

朝顔が便りし竹にもふり放されて俯向きや涙の露が散る

一六二

頼山陽

薄幸の美人にもたふべき歎。

秋の廣野のそれならで、仇し胡蝶の飛びつれて、宿も一夜の女郎花、露が取もつ縁かいな。

遊女の契を女郎花によそへたもの。

秋の眺めは石山で、出船入船矢ばせ船、上る石塲の仇姿、月が取もつ縁かいな。

月こそ今は仇なれ。これなくばアノ曲線美に迷ふやうなことはなかつたらうにこそ愚痴の常。

鮎は瀬につく鳥は樹にごまる人はなさけにすむものよ

「旅は途連れ世はなさけ」と同調子で人情なくて人生は立たないこの意。

井戸の蛙こそしらばそれ花もちりこむ月も見る

頼山陽

謂ふことをやめよ井の中の蛙大海を知らずと。こゝにも月花の雅趣あり。

伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ尾張名古屋は城で持つ

伊勢の生命は津にあり名古屋の生命は城にありと云ふに過ぎないが押韻が面白いので古來人口に膾炙する。

今頃は寝てか起きてか學問してか思ひ出してか忘れてか

「テモ氣がかりな主様よ」の餘韻あり。是れも同音を繰り返した所に多少の趣がある。

いとし我子に嫁ごりやにくいよめは前世のかたきやら

母にして見ると我子に對する愛を嫁に奪はれたやうに思ふからである。

異見されば唯うつむいて聞いてゐながら思ひ出す

顔でうなづき心でかぶり「どうせ悪縁ですから」とも云ひかねて。

意氣な筑波に男體女體外には頼む神もなし

浮れ草

それでこそ「筑波山この面かの面にかげはあれど君がみかげに増すかげはなし」と云ふ。

潮來出島のまこもの中にあやめ咲くこはしほらしや

是れは徳川の末葉に流行した潮來節の一つで其初下總國潮來に起りしより此名あり。まこもは

三四月頃に池沼に生へる菖蒲やうのもの。

石の反橋身ごもが戀は文をつくせご落ちもせず

小歌志彙集

いつかなく相手が堅くて。

いふてごらうじませ、客一人に柿一つに客二人に柿二つ、客三人に柿三つに

其六 但 話

一六三

客四人に柿四つ。

一六四

小歌志集

言ひにくい語路を態と並べてをかしみをつけたもの。

意氣で、こいさみで、めかさず、すかさず、物敷いはずに、かうごうで底に甘味のある男、可愛うなうてなんごしやう。

徳川時代の女性から観た理想の男子はまづこんなもの。

一夜あくれば千夜の思ひ、回向しやうごてお姿を畫にはか、せはせぬものを魂かへす反魂香、名畫の力もない事か。

「廿四孝」の八重垣姫が勝頼の死んだことを聞いてその繪姿を祭つてこがれ泣きする心を歌つたもの。

(二月) 一夜明ければ、門松禮者に、鳥追萬歳、道中雙六、お寶く、大紙鳶揚げたり、はないち獨樂ごで、姉さん羽根突、大きなおいごを、尻振振りまはす。

(二月) 稻荷祭やうちこちう、ごんくかつかに、藤棚登、強飯油揚、狐は満腹、ゑまやがくやご、神樂の馬鹿囃子。

(三月) 花の彌生は向島、さかきげんでごてをばみめぐり、お茶屋の姐さん一拳來なされ、歸路は夜櫻、花魁眺めて、格子で首挟む。

(四月) 四月八日は、お釋迦の誕生、いかに宗旨を、擴めるごて、お酒も吞まずに、甘茶を吞んで、べんくくさばな、戴肴で、裸體で踊り出す。

(五月) 幟やちまきに柏餅、菖蒲刀や神功皇后、義經辨慶、加藤の虎狩、鐘馗睨める、鬼奴が怖がる、大きな聲を上げ。

(六月) 日吉山王へ、祭禮ごんく、かつかにつゝいて、年番稽古に、てこまにちばしりやたい、すつてんてれすこ、蛇の目の傘、お祭番附。

(七月) 色紙あげます七夕祭、軒の燈籠や、ぼんく踊、嘘つきあ舌抜く、十六日には、地獄で鬼めが、お釜の蓋開け、閻魔の笑顔。

(八月) 兔何見て跳ねまする、十五夜お月を、見るから浮かれる、つきぬき團子に、すゝきに芋栗、枝柿枝豆、大きな蛤、皆さん好だんべ。

(九月) 芝の神明様、きくづき御祭禮、お茶屋の姉さん、ごんかち吹きや、芝

居に輕業、曲馬に竹澤、ちぎ箱飴かし、名代の甘酒、生薑の土産物。

(十月) 惠比須講棚中で、旦那にかみさん、番頭に小僧、おさんも浮かれて、滑つてころんで、向脛むいた。

(十一月) 勇姿でごりのまち、向鉢巻、熊手を擔いで、熊手の附物、おかめにみのます眞黒毛に、けんくの生えたぶらくかしようだま。

(十二月) 暮の十七八日淺草市で、しめか飾か、伊勢海老橙、ゆみまはりに羽のはごいた、金の付いたる、大きな松茸。

此は舊江戸の年中行事を茶化したもの。太平の民の享樂を茶化してをかしともをかし。打つに打たれず打たねばならず月のきぬたに母の影

母のかげは勿躰なし。さりとて砧の上だから打たねばならずと云ふ孝女の小さい煩悶。嬉しまぎれについ惚れ過ぎてあこで猶ます物思ひ

ちやによつて戀の深田は義仲の栗津落どころでない。梅が枝の手水鉢、叩いてお金が出るならば、若しもお金が出た時は、其時や身受をそうれたのむ。

戯曲「ひらがな盛衰記」に神崎の遊女梅が枝が手水鉢を無限の鐘と見たて、明日までに夫が出陣の武具質請けの金の出る様にご一心にたたいて祈つたことが書いてある。それをうたつたもの

江戸が見たくば此節ござれやがて武藏の原ごなる

幕末亂離の江戸を弔うたもの。

親は他國に子は島原に櫻花かやちりぐに

父子離散の悲しみを落花の翩々たるにたとへたもの。

沖の鷗に潮時ごへばわたしやたつ鳥波に聞け

わたしや出て行くものです。あどの人に聞いて下さいと云ふ所。

沖の暗いのに白帆が見えるアレハ紀の國蜜柑ぶね

紀の國屋文左衛門が風波を冒して江戸に上陸しようとするところ。彼れは冒險的な商人で連日の風波を乗り切て紀州から江戸に蜜柑を積んで大儲けをした。

親の異見ご茄子の花は千に一つもあだはない

眞味の親程實意のあるものはない。

親の異見ご金米糖は甘いやうでも角がある

之の角が即ち爲になるどころである。

お月様さへ泥田の水に落ちて行く世の浮沈み

頼山陽

まして浮世ぢやもの娑婆ぢやもの、有爲轉變のあるのは當然だ。

お前百までわしや九十九まで俱に白髪のはへるまで

銀婚式金婚式も何のその。ダイヤモンド以上である。

思ひ出すは忘るゝ故よ思ひ出さぬよ忘れねば

遊女高尾が名句「忘れねばこそ思ひ出さず候」を歌にしたもの。

お、い、親父ごの、その金こつちへ貸してくれ、與一兵衛びつくり仰天し  
いや、金では御座りません、むすめにしてもらた用意のにぎり飯、さよな  
らお先へ参じましよ、やれ、しぶごい親父めご、抜きはなし、何の苦も無  
く一るぐり、いのち金ごおんあいわかれの二つ玉。

戯曲「忠臣蔵」定九郎が與市兵衛を殺して金をとるところ。大津繪節。

女禁制の高野の山よ誰がうゑたか女郎花

小歌志彙集

女郎花を擬人化し女性化した作歌者の慣用手段。

金は無くなる未練は残る女の親切薄くなる

破れ紙衣にセンベイ蒲團遊治郎のなれの果は皆かうだ。是れもるの音を重ねた所に多少の面白

味がある。

川そひ柳風ふけば動くこ見れご根はつよし

榮花物語

根はかたく枝はすなほな柳こそ日本婦人の鑑である。

垣の朝顔つぼみは筆よ蔓はあら〜かしこ

朝顔の形を女ぶみにたとへたもの。

可愛い顔して酸漿吹けご憎い口きく町娘

あの顔がどうしてそんなことを云ふのだらう。蛇くふと聞けば恐ろし雉子の聲。

風よなぜ吹く吹くなじや無いが花を三尺よけて吹け

此花ばかりは今少し散らせたくないから……どうぞたのむ。

影になりたやおまへのかげにはなれがたなきわしが身は

異身同躰偕老同穴と云ふではありませんか。

カチユーシヤかわいや わかれのつらさ

せめて淡雪あはせごけぬ間ま

神に願ねがひを(ララ)かけましやうか。

カチユーシヤかわいや

わかれのつらさ

今宵けふひよにふる雪ゆきの

明日あしたは野山(ララ)の(ララ)路みちかくせ。

カチユーシヤかわいや

わかれのつらさ

せめて又逢またあふそれまでは

おなじ姿すがたで(ララ)ゐてたもれ。

カチユーシヤかわいや

わかれのつらさ

つらいわかれの涙なみだのひまに

風かぜは野のを吹ふく(ララ)日はくれる。

カチユーシヤかわいや

わかれのつらさ

ひろい野原のほらをごぼく

ひこり出でて行いく(ララ)あすの旅のり。

クリスマスの前夜貴公子チフリユーードフと小間使のカチユーシヤが霜夜にさゆる月影が前の小川にうつるのを見つゝ手に手をとつて歌つた戀歌で明治四十五年頃此劇の輸入と共に流行したものだ。

三浦肥後

君きみと寝ねやうか五千石取とるか何なんんの五千石君きみと寝ねる

金かねと戀こひとをはかりにかけりや戀こひは金かねより遙とほに重い。或あるは云いふ此こゝれは三浦肥後が五千石を輕かろし

して友ともを重おもんじた意氣いきを歌うたつたものだ。

きみにあをあごて心こゝろはもえぎほんにいろくくくらうする

黄わうと青せいと萌も黄わうと黒くろとを讀よみ込んで人戀ひとこひふ人の氣分きぶんを歌うたふたもの。

君きみに別わかれて松原まつはら行いけば松まつの露つゆやら涙なみだやら

どうせ未練みれんの心こゝろの雫しずくであらう。人情にんじやうの自然しぜんを些ちの滯とどりなく歌うたつてあるので古來こらい名高なたかいものになつて居ゐる。

切きれてしまへば便たはないが闇やみに見みに行くいく初はつ織お

人目ひとめの關せきをははかつて晝ひるはよう來きず。闇やみの夜よに先まの夫おとこの家いへの軒のきまで來きていとし我兒わがこの初はつ節せつ句くを世間よ並ならに祝いわつてもらつてゐるかどうかとこつをいつ。

君きみにうた、ね百合ゆり起おされてあやめあかぬに實じつ短みぢ夜よは名殘なごり惜おしくもかへる月つき

三麻盛衰記

「三千世界の鳥を殺し君と朝寝がして見たい」の餘情あり。

菊きくはさくく、葵あひは枯かれる西にしで轡くわの音ねがする

菊きくは皇室てんしやうの御紋章ごもんぢやう葵あひは徳川とくがわ氏の紋章もんぢやう。王政復古おうせいふこの勢盛せいせいなりし幕末まくまの光景こうけい。

其六 俚 語

來てはちら／＼思はせぶりな今日もごまらぬ秋の蝶

一七二

一鉢おれをどう思つてるのかしらと淡い煩悶。

京の金閣寺の 糸の湯の座敷は、御覽じなしたか拜見なしたか、楠くすのぎの天井の一枚板ではないか、榛木はすぎのちがへ棚、南天床柱、名所名所。

金閣寺の立派さをたゞへたもの。

來いごいふたごて行かるゝ道かみちは五十里波の上

詠歌 例

「來いと云ふたごて行かりよか佐渡へ佐渡は四十五里波の上」と同じ想。

是は世間の女房の名寄、后おきささまには政所せいしよ、北きたの方なたには御臺様おんたいさま、奥方、御新造御内室、お神さんには御うち方おんうちかた、嬪左衛門ひんざゑもん、内の奴うちのやつ、小指に夫婦喧嘩をする時は、ひきづりお多福、山の神、中のよい時や、にこ／＼笑つて、いつも乍またら生た辨天さんご申升。

世間の女房の名寄とは社會のあらゆる階級の妻君の名稱をよせたものといふこと。

坂は照る／＼鈴鹿は曇るあひの土山雨がふる

天氣模様を見るに敏なる馬子の唄として面白し。るの字の押韻で歌ふ調子が誠によいのと馬子

の氣分にふさはしい歌の意味とで古來有名なるものとされて居る。  
咲いた櫻になぜ駒つなく駒が勇めば花は散る

花の姿をして永久に美しからしめんとならば先づ駒を解け。とは表面の意味だが咲き亂れた櫻の艶麗やかさと勇ましい駒との取り合はせは情調の上に云ひ知れぬ調和があるので此歌を謡ふと泰平逸樂の様目に見るがやう。徳川時代の歌謡中最も名高いもの。

咲いたが花かや咲かぬが花か咲くを待つのが花の花

眞の楽しみと云ふものはその楽しみを待つのを楽しむ時に在る。

酒を飲む人花なら蕾今日もさけ／＼明日もさけ

「咲け」と「酒」をもじつたもの。

西郷隆盛せいけいりゅうせいか雑魚ざつぎよかたいに追はれて逃げかねた

「隊に追はれて」を「鯛に追はれて」にもじつたもの。明治十年西南の役の際に流行した新撃節。

櫻のこずへに鳴く鶯をさすなさわるなやさしさに

見てほめてこそ風流の味もあれ近よつてさすとは殺風景の極だ。

死んだつもりで稼いちや居るが花が咲くやら實のるやら

其六 俚 諺

一七三

行く末を思ふと心細い。ソコが人情の弱味。

眞の闇夜に櫻を削り赤い心を墨で書く

兒島高德の故事を詠つたもの。

書生書生と輕蔑するなフランス「ナポレオン」も元は書生

末は博士か大臣か……テモ頼もしやと立てゝくれい。

蒸汽出て行く煙は残るのこる煙がしやくの種

「アアアちれつたい。わたしも連れてつて頂戴ナ」と云ふところ。

十四の春から通はせおいて、今更いやさはごうよくな、鳥が啼かうが夜が明けよが、お寺の坊さん鐘つこが、枕屏風に日がさそが、此わけきかなきや歸りやせん。

攝氏百度以上の熱い口説き方。

住めば浮世に思ひの増すに月ご入らばや山の端に

とは云ふものゝさうもならず。煩悶引受所はないものか。

裾をこらへてこれ聞かしやんせ實ぢや眞ぢや嘘ぢやない

マア〜待つてと拜まんばかり。こんなことを云はれる男の艶癖よりは女の切なさを察すべしだ。

世間渡らば豆腐のやうに四角四面でやわらかく

小歌志葉集

處世の秘訣此一句に在り。とは云へ豆腐のやうに弾力が無くては獨逸と戦争など想ひも寄らぬ笑止くが三笑止ござる、一に出ぬ首尾二に舟の雨、土手の夕ぐれ橋場の煙り、明の鳥のこゑくも氣のごく。

さりごてはお笑止様の世の中よな。

空ごぶ鳥が物云ふならばたより聞きたや聞かせたや

若しもわたしに翼があらば飛んで行きたや主様にの意。

染めてくやしき似せ紫や、本の白地がましじやもの白地がな、もこの白地がましじやもの。

もこの處女になりたいと悔んだものだが覆水盆に返へることも到底だめな望みである。

高い山から谷底見れば瓜や茄子の花ざかり

讀んで字の通りの田園詩。淡々たること水の如き所に一種云ふ可からざる趣味がある。

たごへ泥田の芹にもさんせこ、ろあらへば根はしろい

遊女だつて誠はありますと云ふ意氣。

つれてござれやいづくへなりとたごへ葎が宿なりと

お前とならばごこまでもたごへ火の中水の底竹の柱にかやの屋根手鍋さげてもいといやせぬ。

つゝみかくせご軒端のすゝきいつか穂に出てあらはれる

戀の下水いつしか湧いて湧いて流れて浮名を流すの意。

露は尾花ご寝たごいふ、尾花は露ご寝ぬごいふ、あれ寝たごいふ、寝ぬごいふ、尾花が穂に出てあらはれた。

露の恵みで尾花が穂ぐむことを男女の情事によそへたもの。

露のひぬ間の朝顔に、照す日影のつれなさは、あはれ一村雨のはらくご降れかし。

露が乾いたら花が凋まるにの餘情あり。戯曲「朝顔日記」に阿蘇次郎が深雪に書いて與へてから此歌が有名になつた。

天道八幡涙で暮らす一字讀まれぬこの文が

大 怒 佐

「文はやりたし書く手は持たず」と云つたやうな男にふさはしい女の述懐。

天には自由の鬼ごなり、地には自由の人たらん、自由よ自由やよ自由、汝ご我ご其中は天地自然の約束ぞ。

小室 風山

明治十二年頃板垣伯が首領となつて大に佛國の自由主義を唱導したときの標榜歌。

都々一は野暮でも遣り繰りや上手今朝も七つ屋で賞められた。

手から口宵越の金は遣はぬ江戸ツ子に常に謠はれるので名高い。

鳥も通はぬ八丈が島へやられる此身は厭はねご、あごに残りし妻や子が、ごうして毎日常らすやら、思へば涙の種ごなる。

配流の人鵬九回の思ひあり。透き貫るやうな美聲で此追分節を謠はせると云ひ知れぬ情味を感じる。

隣のお婆さんが寒三十日寒念佛を申しませうご申しましたが申した事やら申さぬ事やら、申したら申したご申しませうが、申さんからにや申したご申しませぬ。

小歌志葉集

申しの反覆に可笑味をつけたもので之れを早口で言ふので面白い。



何をくよく／＼川端柳水の流れを見てくらす

一七八

高杉晋作

何もさう屈托することはないさ、アレ見たまへ川端柳年々歳々来る日も来る日も同じ流れを見て居るではないかど。此俚謠禪の自然主義を道破せるの趣ありて情味の掬す可きものあり。余は屢子守女の無心に之れを謠へるを聞きて感慨無量なるものあり。

松の葉

涙くらへんやまほごごぎす我も浮世のつらければ  
「まゝならぬ世ぢやものお前さりんくす」と云つたやうな人生不如意の怨嗟。

なるはいやなりおもふはならずごかく浮世はまゝならぬ  
それで桂姫が御殿に召されたり深雪が旅音楽師になつたりするのだ。

啼いてくれるな可愛の駒よ今宵忍ぶは戀ぢや無い  
ソナナデリケートな要件ぢやないぞ。

何ごつゝめごいろには出でて顔に紅葉がちりかゝる  
「しのぶれご色に出にけり我戀は物や思ふと人のごふまで」と同じころ。

夏の眺めは兩國で、出船入船屋形船、上る流星ほし下り、玉屋が取持つ縁か  
いな。

京は鴨川大阪は大川江戸は兩國の夕涼みが名物で中にも兩國の花火は江ッ子氣風を能く現はすので有名なものである。

二度と行くまい丹後の宮津縞の財布はだんぜん空ごなる

宮津がわるいんではない。御本人がチトその……と云ふべきを逆にした馬鹿決心が面白し。

西は追分東は關所關所越るねばまゝならぬ

旅愁をいろに路標を見て悵然。粹人の喉を借れば凄艶の感特に深し。

女房もちごは知つての事よ惚れるに加減の出来やうか。

後の一句は確に中庸を得ること困難なる戀愛の哲理を説破してゐる。

日清談判破裂して品川乗出す吾妻艦、續いて金剛難波艦、國旗堂々翻へし、  
遺恨重なるちやんちやん坊主糞坊主、愉快くきんりようく。

日清戦争の當時流行した愉快節。

ぬしはわしゆるわしや主ゆるるに人に恨はないわいな

自業自得と云ふもの。戀の重荷は二人で背負ふのはあたりまへですの意。

主に逢ふては手ごもむだよ智恵も思案もないわいな

共六 俚 謠

一七九

潮 來 風

戀は思案の外と云ひ戀愛は盲目とも云ふ。手練手管の無い所に強い／＼チャームがあるのだ  
箱根八里は馬でもこすが越すに越されぬ大井川

大井川の渡しが如何に困難であつたかと云ふことがわかる。然り關西九州の大小名が事を擧  
げて江戸を攻めんと計る時には徳川は此川で防ぐ積りであつたから橋などはかけなかつたこの  
事。

羽織させかけ行く先根問ひすねて簞笥をせなでしめ

此様な妻君は恐らく黒人も跣足の腕がありさうだ。

花が蝶々か蝶々が花か來てはチラ／＼迷はせる

どつちがどつちとも云へぬ。夢幻朦朧これその特美。

花に置く露小笹の霰こぼれやすきはわが涙

こぼれやすいもの二つを我涙に配合したもの。

松の葉

春の眺めは芳野山、峰も谷間も爛漫と一目千本二千本、花が取りもつ縁かい  
な。

「御見せめしたは去年の春櫻さかりのあの下で……」と云ふ戀物語りの産地であるとの意。

袴羽織で錢無い人は學校教員か家相観か。

ハテその外には誰もソナナ人はないか。マダアル／＼腰辨官吏に玄關番。

春は嬉しや、ふたりころんで花見の酒、庭の櫻に朧月、それを邪魔する雨風  
が、ちよご散らして又咲かす。

夏は嬉しや、二人揃うて鳴海の裕衣、團扇片手に橋の上、雲がするゐして月隠  
す、ちよいご螢が身を焦す。

秋は嬉しや、二人並んで月見の窓、色々話を菊の花、しかごわからん主の胸、  
ちよごわたしが氣を紅葉。

冬は嬉しや、二人轉んで雪見の酒、苦勞知らずの銀世界、話も積れば雪も積む  
ちよご解けます炬燵中。

京都に於ける青春男女四季の行樂を謠つたもの。

春のながめは嵐山、櫻散り來る渡月橋、かつら渡しの筏船、しづがいたゞく  
花づくし。

夏の景色は清らかに、賀茂の流れの夕涼、闇も月夜もわが立つ床に、明を恨むる戀の山。

秋のながめは通天の、木の間木の間を敷しまの、道も紅葉にうづもれて、暮を忘るゝ人心。

冬の景色は花頂山、四方は着けたり綿白絹、花かこ吹雪を見まがはん、寒さ忘るゝ雪の暮。

京の四季を今様風に歌つたもの。

髯を生やして官員ならば猫や鼠は皆官員

明治十數年民權論頗る盛んなりし時官吏を嘲罵するを以て能事と考へる連中が少くなかつた當

時に唄はれたものゝ一つ。

文はやりたし書く手はもたぬものを言へかし白紙が

無筆者の心情穿ち得て妙。

ふつこ目がさめ抱きしめ見れば主ご着て寝た夜着の袖

寝ざめの戀のさてやるせなや。

夫婦げんくわは三日のつきよひご夜ひご夜にまろくなる。

それどころ同棲が出来たものだ。

筆にいはせて硯にたのみ文に媒させた中わすれさんすな紙の恩

このごりもちがなかつたなら今だつてどうなつてるんだかわかりやしないのは餘情あり。

更けて砧の音より聞けば月に落ちくるわが涙

松の葉

秋夜砧を打てる怨婦の聲。

冬の眺めは圓山で、上り下りの京女郎、開く左阿彌の大廣間、雪が取もつ縁かいな。

雪の背景に花の人、處は左阿彌の大廣間ときてゐるからたまらないの意。

まるい卵も切り様で四角物も言ひ様で角が立つ

意味は同一でも音の表情如何によつて相手の感情に大なる影響を與へるものだからなるべく婉

曲なことを選べ。

潮來風

松ごいふ字は木偏に公よきみにはなれてきは残る

「わたしや松の木さめてもねてもきみ(公)とぼく(木)とのさしむかひ」と出たひ心。

都鳥きねごや鳴音なもゆかしわれは吾妻あづまに隅田川

あれ鳥がなく鳥の名の都は名所すみどころ。

宮さんくお馬の前に閃々ひび光るは何ぢやいな、ごごんやれごんやれな、あれは朝敵征伐せよこの錦の御旗を知らないか、ごごんやれごんやれな。

明治元年東征大總督有栖川宮熾仁親王殿下には西郷隆盛を總督參謀とし三軍の將士を従へ江戸征伐の途につかれた。それを歌つたもの。

娘十七八は嫁入盛りねえ、箆たす筒長持はさみ箱、これ程持たせてやるからは、必ず戻ると思ふなよ。もうし母さんそりや無理ぢや、西が曇れば雨となり、東が曇れば風となる、千石積んだる船でさへ、追手がかはればねえ、出てもごろえ。

嫁入道具を與へて嫁たる精神を與へざる母に娘の氣分主義を配合す。滑稽に似て實は感無量。

めでたくの若松様よ枝も榮えりや葉もしげる

目出たいことをならべたてたもので大工が棟上の際に節面白く謠ふを例とす。

山で赤いのは躑躅に椿咲いてからまる藤の花

春ざきの花三種をとり合はせたもの。意味なくして餘情あり。

櫓太鼓でふご目をさましあすはごの手で投げてやろ

武夫は鏝音で目を覺まし乞食の子は茶碗の音で目を覺ますとかや。流石は角力取だけあつて太鼓の音に目をさまし寢ざめにすら角力の手を思ひ浮べる。

山で伐る木は數多けれご思ひ切る氣は更にな

木と氣を通はせたものに過ぎないが未練は麻の絲よりも強い。

山へ登ればいばらがごめるいばら放しやれ日が暮れる。

赤い襷に姉さま被り山に柴刈る田舎女の無邪氣な繪が思ひ出される。押韻の巧みなので頗る口調がよい。

雪のはだ身に氷のやひば露の生命のすて所

小松帶刀

幕末志士の熱腸感慨鬼神を動かす。

よしや今宵は曇らば曇れごても涙で見る月を

戀故愚痴の真情穿ち得て妙。

宵の鐘なら千里もひびけきかせごもなや明けの鐘

潮來風

かねに怨みはかすくごさる。まづ第一が明けの鐘云々とうらんだ趣向。  
よしや世の中うらむは愚痴ようつりかわるは世のならひ

潮來風

とは云ふものうらめしいの餘情がありさうに想ふは如何に。若し此餘情なくんば是れ達磨宗  
の堂に入れる人。

宵は月にもまぎれてすむが更くる鐘には袖しぼるよしなの思ひ

松の葉

更たけて壁にそむける灯かげもやせてと云ふ處。

欄干にもたれて化粧の水をここに捨てよか蟲の聲

小松帶刀

鬼貫が「行水の捨てどころなし蟲の聲」とよんだ句を俚謠化したもの。

### 其七 漢詩

支那の古に采詞の官があり地方に流行せる詞藻の風教に資するものを集めさせてみた。周代目を分け  
て風賦雅興比頌と云ひ孔子之を編して三百五章と爲し漢代更に歌、行、引、吟、謠、曲、怨、篇の古  
詩諸躰を見唐に至つて平仄の規定確立し五言、七言、各古詩、律詩、排律、絶句の種別定まり初唐よ  
り中唐、中唐より盛唐、晩唐と次第に推移して宋元明清の今日に至る。我國又その影響を受けて早く  
寧樂の朝に懷風藻の編纂を見王朝前半期の漢籍家同後半期の公任、順を経て鎌倉室町の時代一時衰へ  
徳川時代に至りて再び盛んとなり諸家の集汗牛充棟の觀あり。全体漢詩は男性的なる流麗典雅の調が  
あつて而も含蓄深く想形共に變轉の自在を極めて或は雄大跌宕の趣を爲し或は光風霽月の態を爲し或  
は慷慨惻怛の哀音となり或は妖麗艶冶の嬌調となる。其讀者を感奮興起せしむるの一點に至つては短  
歌よりも俳句よりも新體詩よりも何よりも強く深く且厚い。和漢古今の秀吟中其愛誦に値するもの千  
萬にして足らずと雖今暫らく割愛して其中最有名なものばかりを掲げることにした。

(一) 日本の部

偶成

四郷南洲

一貫唯唯諾。從來鐵石肝。貧居生傑士。勳業顯多難。  
堪雪梅花潔。經霜楓葉丹。若能識天意。豈敢自謀安。

(譯) 一貫唯々の諾。從來鐵石の肝。貧居傑士を生じ。勳業多難に顯はる。雪に堪ふ梅花の潔。霜を  
經る楓葉の丹。若し能く天意を識らば。豈敢て自ら安きを謀らん。

(大意) 我生來心肝鐵石よりも堅く一旦唯々として諾すれば終始一貫毫も變らず。由來俊傑の士は貧  
家に出で赫々たる功勳は多難の中に發揮せらる。梅花の清きも雪の苦に堪へてあらはれ楓葉の赤きも  
霜の苦をしのぎて後のことなり。此造化の原理を知らばどうして安逸遊惰を貪つてゐることが出來や  
う。

知足吟 (呈二十)

牛齋

知足無不足。我聞諸老宿。苟生不足念。莫如視奴僕。  
我常食稻粱。彼自啜藿菽。我受妻子養。彼長守單獨。

况仍值清時。	文字頗解讀。	雖無二酉富。	賴藏書一篋。
非禮不敢言。	非禮不敢服。	以是了吾生。	百年足清福。
俗子謾誇今。	書生徒慕古。	古今原無隔。	所遇皆樂土。
門前有楊柳。	非學彭澤五。	園中有梅花。	豈知石湖譜。
梅花迎月冷。	楊柳待風舞。	欣然來其下。	閑作風月主。
人道處貧難。	貧富各自取。	若夫不知足。	王侯亦貧窶。
翡翠非好音。	鸚鵡無文翅。	乃知天賦物。	與一不與二。
孔席不曾煖。	孟轍將遍地。	聖賢當在世。	猶且不得志。
吾儕碌々者。	安得百如意。	十中得二三。	寵賜實爲至。
所幸生爲男。	頗識古今事。	况乃有微祿。	可以寄所寄。
王侯擁錦衾。	欲眠夢數驚。	乞兒臥路傍。	鼻息有雷聲。
可見勞心者。	一寢不能清。	吾雖在仕籍。	官責亦大輕。

其七 漢

詩

退食有餘暇。江湖可尋盟。坐右垂釣線。汲泉試茶鐺。  
 谷口尋隱去。林間採菜行。蕭散吾忘我。此事任人評。  
 向人勿賣長。賣長便買短。向人勿爭能。爭能徒長誕。  
 我生幸微賤。恰慙此迂緩。長夜眠方足。日出起櫛盥。  
 靜坐琴爲朋。散步策作伴。脫巾三伏涼。擁爐一冬暖。  
 不道世路險。只覺心地坦。無人知此意。看做嵒康懶。  
 登山勿嫌險。歷險方就安。處世勿厭苦。忍苦始得歡。  
 察彼天地意。送暑又迎寒。吉凶與悔吝。堆遷自無端。  
 達人知此理。後得而先難。我生元窮困。吸盡三十酸。  
 世上百般味。何物不堪餐。菜根酸得熟。猶勝苜蓿盤。  
 昔我爲兒時。膝前求梨栗。梨栗腹已飽。欣々志願畢。  
 稍及成人後。胸中情慾室。經營無休期。得一更生一。

中歲忽覺悟。悵然若有失。誰道兒愚蒙。不及爲兒日。  
 苟有衣與食。何必求盈溢。人間縱貪榮。皇天旣陰隲。  
 舉世誇才名。我獨愛無能。無能雖可愧。誇才亦可憎。  
 我方十七八。負氣頗峻嶒。燕雀不知分。徒要學鯤鵬。  
 齡已及四旬。此失深自懲。祇頃把一經。窓下伴夜灯。  
 不然討山水。應如行脚僧。此心儔能知。知己有兩朋。  
 (譯) 足ることを知れば不足無し。我諸を老宿に聞く。苟も不足の念を生せば。奴僕を視るに若くは  
 なし。我常に稻梁を食む。彼自ら葦菽を啜る。我は妻子の養を受く。彼は長く單獨を守る。況んや仍  
 清時に値ひ。文字頗る讀むことを解す。二酉の富なしと雖も。頼に藏書一篋あり。禮に非れば敢て言  
 はず。禮に非れば敢て服せず。是を以て吾が生を了ふ。百年清福に足る。  
 俗子諷に今を誇る。書生徒に古を慕ふ。古今原隔りなし。遇ふ所皆樂土。門前楊柳有り。彭澤の五を  
 學ぶにあらず。園中梅花有り。豈石湖の譜を知らんや。梅花月を迎へて冷けく。楊柳風を待つて舞ふ  
 欣然として其下に來り。閑に風月の主と作る。人道貧に處するは難し。貧富各自ら取る。若夫れ足る

ことを知らずんば。王侯も亦貧窶。

翡翠も好音に非ず。鸚鵡も文翅無し。乃知る天の物を賦するや。一を興へて二を興へず。孔席曾て煖ならず。孟轍將に地に逼し。聖賢の世に在るに當り。猶且志を得ず。吾儕碌々たる者。安んぞ百意すべての如くなるを得ん。十中二三を得。寵賜實に至れりと爲す。幸とする所は生れて男たり。頗古今の事を識る。况んや乃ち微祿有るをや。以て寄する所に寄すべし。

王侯錦衾を擁し。眠らんと欲して夢數驚く。乞兒路傍に臥し。鼻息雷聲あり。見るべし心を勞する者は。一寢も清きこと能はざるを。吾仕籍に在りと雖。官責亦大に輕し。退食餘暇あり。江湖盟を尋ぬべし。坐右釣線を垂れ。泉を汲んで茶鑪を試む。谷口に隱を尋ねて去り。林間に菜を採つて行く。蕭散吾にして我なるを忘る。此事人の評に任せん。

人に向つて長を賣る勿れ。長を賣るは便ち短を買う。人に向つて能を争ふ勿れ。能を争へば徒に長誕す。我生幸に微賤にして。恰も此迂緩に愜ふ。長夜眠り方に足る。日出でて起つて櫛盥し。靜坐琴を以て朋と爲す。散步策を以て伴と作し。巾を脱すれば三伏涼し。爐を擁して一冬暖なり。道はず世路の險なるを。只覺ゆ心地の坦なるを。人の此意を知るなし。看て嵇康の懶を倣ふ。

山に登るに險を嫌ふこと勿れ。險を歷れば方に安きに就く。世に處しては苦を厭ふこと勿れ。苦を忍

んで始めて歡を得。彼の天地の意を察し。暑さを送り又寒さを迎ふ。吉凶と悔吝と。推遷自ら端無し。達人は此理を知り。得ることを後にして難きを先にす。我生元窮困。吸ひ盡す三十酸。世上百般の味何物か餐に堪へざらむ。菜根齧み得て熟すれば。猶勝る首着の盤。

昔我兒爲りし時。膝前梨栗を求む。梨栗腹已に飽き。欣々として志願畢る。稍成人に及びて後。胸中情慾の室。經營休期無し。一を得て更に一を生ず。中歳忽ち覺悟し。悵然とし失ふ有るが若し。誰か道ふ兒愚蒙なりと。及ばず兒爲るの日。苟も衣と食とあれば。何ぞ必ずしも盈溢を求めん。人間縦ひ貪り榮ゆども。皇天既に陰隲。

世を擧つて才名を誇る。我獨り無能を愛す。無能は愧づべしと雖も。才に誇るは亦憎むべし。我方に十七八なるとき。氣を負んで頗る峻贈。燕雀分を知らず。徒に鯤鵬を學ぶを要す。齡已に四旬に及び此失深く自ら懲る。稊頃一經たぐひのうらを把り。窓下夜灯を伴ふ。然らざれば山水を討ね。應に行脚の僧の如くなるべし。此心儻か能く知らん。已れを知るものに兩明あり。

(大意) 全体人間と云ふものは足ることを知つて分に安んじてゐさへすれば不平など起るものではない。よく年よりの言ふことに何か不平が起きたらしものことを思ふがよい。自分はいつも白い飯を喰つてゐるのに彼等は粗末なあかだの交つた飯を喰つてゐる。自分は妻子眷族から立てられて安々と



暮らしてゐるのに彼等は終生孤獨である。まして氣の進む時には讀書の樂しみすらある。よしや二酉の富を有たすとも藏書千卷以て自適するに足るものがある。苟くも其禮に非れば敢て妄に言はず。妄に服従せず。かくして百年の一生清くして且幸福を保つことが出来る。今の世俗は動もすれば當世風の言論行動を好み今の學生はともすれば古を慕ふの癖があるが古と云ひ今と云ひ其實あまり隔りのあるものではない。我心よく足ることを知らば人間到る處樂土あり。敢て彭澤の五を學ばすとも門前の楊柳鬱を解くべく敢て石湖の譜を知らすとも園中の梅花暗香の浮動を掬すべく梅花は月に照らされて益々清冽に楊柳は風に飄つて愈々面白く舞ふ。吾欣然として其下に來り閑に風月の主となる亦よからすや。

抑々吾人は一体に富に處するよりは貧に處することがむつかしいものだが貧と云ひ富と云ひめい／＼自分のわけまへを探つたと云ふに過ぎない。若し吾々にして知足安分を知らなかつたならば王侯になつても矢張り富んだ氣持はせず。翡翠のなく音すらも矢張り醜音であり鸚鵡も亦依然として醜鳥たるの感があらう。全体天が萬物に性能を賦與するや必らず一物を能へて二事を兼ねしめず。此を以て聖人孔子は席の暖まるに暇なく其所を得ずして諸方に奔走し賢人孟子の轍天下に遍くして遊説に苦しんだ。聖賢孔孟を以てすら尙且斯の如きものがある。況んや吾等尋常平凡の徒がどうして百事意

の如くなることが出来やう。まあ十のものなら二つ三つを得てそれで有がたいことゝしなければならぬ。幸にも男子と生れ古今の事に通達することを得お負に少々にもせよ知行を頂戴してゐる。マア何たるしあはせである。彼の王侯は錦の衾に入つて眠らうとしてとつきり得う眠らないのに引かへて乞食は路ばたに寝てグウ／＼と雷のやうないびきをかいて寝てゐる。氣苦勞な身分になると寝ることすら満足に出来ない。余の如きは官途には就いてゐるけれども至つて軽い身分で仕事も極端である。氣に向いた時には知るべをも訪問しやうし釣りにも行かうしお茶をも立てやうしあすこの山麓が面白いと思へばそこへ居を移し此處にうまさうな菜があると思へば摘んでも見たり意の向くまゝにしたいざんまいをして時には吾にして吾なるを忘れることすらある。幸か不幸か。禍か福か。そんなことは世間の評判にまかしておかう。

人に向つて長所を持出すな。これ即短所をさがし出される端緒である。人に向つて能を争ふな。これ即入らぬ氣苦勞の種を蒔く所以である。我性元來魯鈍に地位微賤地位と性と正に相適合せりと謂ふべし。長夜充分に眠りを貪り日三竿をのぼつてポツ／＼顔を洗ひ髪をとき靜に琴を弾じたりステッキを振りまはしながら散歩をしたりする。暑い時には頭巾を脱ぎ寒い時には圍爐裏を抱へ浮世の風はごこを吹くやら心はいつも春の風。それを知らない奴は「ナンダ稽康の二の舞ひめが」など云ひもしやう

がソナナことは勝手に云ふがよい。

凡そ山に登るには險を厭うな。險を通れば安に就くものだ。世間に處しては苦を厭うな。苦しみを過ぐれば樂しみ來ると云ふのが浮世の通則だ。凡そ自然の大法は暑過ぎ寒來り吉去つて凶となり福變じて禍となるなごめぐりて端なき環の如きものである。唯獨達人のみよく此理を悟り易を後にして難を先きにす。我もと窮困に生れ辛苦甘酸を吸ひ盡すこと三十年。世上百般のこと一として嘗められざるなし。菜根も之に食ひなれては猶首宿の盤に勝ることを知る。昔我が幼き時梨や栗やお賃をねだつた梨栗已に飽いては最早何物をも要求しなかつた。稍成人してからは胸中一個慾望の倉庫となり夜晝あせつて甲を得れば乙を求め中年にして忽ち悟るところあり。人は子供を馬鹿だと云ふが實は子供の無欲に劣ること萬々である。まゝならぬ浮世に何をよく／＼することぞ。衣食さへあらばもう充分だ。世間の人は名を誇つても吾は自分の無能を誇らう。なるほど無能は恥づべきではあるが才名を誇るのには實に憎むべきものがある。我の年少氣鋭なるや随分勝ち氣で向う行きの強いことを言ひもし行ひもして燕雀の分を以て大鵬巨鯨の企てもして見たが年齢四十の分別盛りとなつてはいたく前非を悔い唯一冊の經書をとつて窓下燈前に之を愛讀し然らざれば山水を訪ねて行脚の僧をまねる。此心果して誰かよく知らん。知るは書物のみ。山水のみ。

述 懷

弘 文 天 皇

道德承天訓。鹽梅寄眞宰。羞無監撫術。安能臨四海。

(譯) 道德天訓を承け。鹽梅眞宰に寄す。羞づらくは監撫の術なく。安ぞ能く四海に臨まん。

(大意) 「夫れ道德は上天のをしへにして之によりて天下を巧みにおさむるは天皇の任である。然るに朕今や何等治國の術なくして天位に登りどうして四海を安穩におさめることが出來やう。まことに我ながらはづかしい次第である。」と御謙遜になつたもの。

參 同 契

石 頭 大 師

笠土大仙心。東西密相附。人根有利鈍。道無南北祖。  
靈源明皎潔。支派暗流注。執事元是迷。契理亦非悟。  
門々一切境。回互不回互。回而更相涉。不爾依位住。  
色本殊質象。聲元異樂苦。暗合上中言。明明清濁句。  
四大性自復。如子得其母。火熱風動搖。水濕地堅固。

其 七 漢 詩

一九七

眼色耳音聲。鼻香舌鹹酢。然於一々法。依根葉分布。  
 本末須歸宗。尊卑用其語。當明中有暗。勿以暗相遇。  
 當暗中有明。勿以明相親。明暗各相對。比如前後步。  
 萬物自有功。當言用與處。事存函蓋合。理應箭鋒拄。  
 承言須會宗。勿自立規矩。觸目不會道。運足焉知路。  
 進步非近遠。迷隔山河固。謹白參玄人。光陰莫虛度。

〔譯〕 笠土大仙の心。東西密に相附す。人根に利鈍有り。道に南北の祖なし。靈源明らかに皎潔。支派暗に流注す。事に執するも元是れ迷ひなり。理に契するも亦悟りに非らず。門々一切の境。回互と不回互。回して更に相渉る。爾らざれば位に依つて住す。色本質象を殊にす。聲もと樂苦を異にす。暗は上中の言に合し。明は清濁の句を明らかにす。四大の性自ら復す。子の其母を得るが如し。火は熱し風は動搖。水は濕ひ地は堅固。眼は色耳は音聲。鼻は香舌は鹹酢。然れども一々の法に於いて。根に依つて葉分布す。本末須らく宗に歸すべし。尊卑その語を用ふ。明中に當つて暗あり。暗相を以て遇ふこと勿れ。暗中に當つて明あり。明相を以て親ること勿れ。明暗各相對し。比するに前後の歩み

の如し。萬物自ら功有り。當に用と處を言ふべし。事存して函蓋合し。理應じて箭鋒拄ふ。言を承けては須らく宗を會すべし。自ら規矩を立つること勿れ。觸目道を會せざれば。足を運ぶも焉んぞ路を知らん。歩を進むるも近遠に非らず。迷は山河の固を隔つ。謹んで參玄人に白す。光陰虚しく度ること莫れ。

〔大意〕 天笠大仙人の心は彼此互に相密着して離るるなし。それ大道に南北の別なし。唯吾人の先天的の機根に利鈍の別あるのみ。佛祖教誨の本源は明白高潔一塵の雲霧なしと雖も末派支流に至て暗昧紛々たり。執着はもとこれ迷なり。さりとて理屈を以て一切を規正しやうとするのも大悟の人の爲すところにあらず。あらゆる宇宙の環境は變化と統一と相錯綜して森羅萬象となる。爾らざれば其本然の形相によつて實在す。色は形象を別つ所以なり。聲は樂苦を別つ所以なり。暗は清濁を平等にする所以なり。明は清濁を差別する所以なり。地水火風の四大はとりも直さず皎潔なる一靈源に根ざせること譬へば子の母に於けるが如し。火の熱せる風の動ける水の濕へる地の堅固なる眼の色を見る耳の音聲を聴く鼻の香をかぐ舌の鹹酢を味はう此も亦宇宙の唯一原理の發現ではあるがその些末に至つては枝葉分布して多枝數ふべからずと雖もさりとて亂雜なる分布とはならで一々その本幹を辿るべし。夫れ明中に暗あり。暗中に明あり。彼に對するに單なる暗を以て處すべからず。此に處するに單なる

明を以て處すべからず。一明一暗互に相對して前歩後歩するが如し。萬物各固有の活動あり。よろしく一事一物についてその用と處とを視るべし。事象と原理と相表裏密着して函蓋の如し。先輩の明示に遇うては須らくその根本原理を會得すべし。自らほしいままに規矩を立つること勿れ。觸目徒に皮相にとごまらば勞して効なし。迷の向上を妨ぐるること山河の固きよりもまさる。敢てつつしんで參玄人に告ぐ。此月此日徒に空費することなく當に此旨を體得して悟道につとむべしと。

正氣歌

藤田東湖

天地正大氣。粹然鍾神州。秀爲不二嶽。巍々聳千秋。  
注爲大瀛水。洋々環八州。發爲萬朶櫻。衆芳難與儔。  
凝爲百鍊鐵。銳利可斷釜。蓋臣皆熊羆。武夫盡好仇。  
神州孰君臨。萬古仰天皇。皇風洽六合。明德侔太陽。  
世不無汚隆。正氣時放光。乃參大連議。侃々排瞿曇。  
乃助明主斷。燄燄焚伽藍。中郎嘗用之。宗社盤石安。  
清丸嘗用之。妖僧肝膽寒。忽揮龍口劍。虜使頭足分。

忽起西海颶。怒濤熾胡氛。志賀月明夜。陽爲鳳輦巡。  
芳野戰酣日。又代天子屯。或投鎌倉窟。憂憤正愼々。  
或伴櫻井驛。遺訓何慙慙。或殉天目山。幽囚不忘君。  
或守伏見城。一身當萬軍。昇平二百歲。斯氣常得伸。  
然方其鬱屈。生四十七人。乃知人雖亡。英靈未嘗泯。  
長在天地間。隱然叙彝倫。孰能扶持之。卓立東海濱。  
忠誠尊皇室。孝敬事天神。修文與奮武。誓欲清胡塵。  
一朝天步艱。邦君身先淪。頑鈍不知機。罪戾及孤臣。  
孤臣困葛藟。君冤向誰陳。孤子遠墳墓。何以謝先親。  
荏苒二周星。獨有斯氣隨。嗟予雖萬死。豈忍與汝離。  
屈伸付天地。生死復奚疑。生當雪君冤。復見張綱維。  
死爲忠義鬼。極天護皇基。

(解) 天地正大の氣。粹然として神州に鐘かねまる。秀でて不二の嶽たけとなり。巍々千秋に聳たつゆ。注いで大瀛たいようの水となり。洋々八州を環めぐる。發して萬朶の櫻うづもとなり。衆芳與に備たもにし難し。凝こつて百鍊の鐵てつとなり。銳利えいりを斷つべし。蓋おほ臣皆熊羆くまひ。武夫盡く好仇。神州孰たれか君臨きんりんす。萬古天皇を仰あがぐ。皇風六合に治をさねく。明德太陽に伴ともし。世汚隆よごりゅうなきにあらず。正氣時に光を放はなつ。乃ち大連の議ぎに參まゐり。侃々瞿曇くわんとんを排はす。乃ち明主の斷を助け。猷けん々伽藍がらんを焚やく。中郎嘗て之を用もちひ。宗社磐石安し。清丸嘗て之を用もちひ。妖僧肝膽寒し。忽龍の口の劍を揮ふるひ。虜使頭足分わる。忽西海の颶こを起たし。怒濤胡氛を殲やす。志賀月明の夜。陽ひつはつて風輦ふうねんとなつて巡めぐす。芳野の戰酣せんかんなるの日。又天子に代はりて屯とんす。或は鎌倉の窟くわに投なじ。憂憤正せいに憤ふん々。或は櫻井の驛えきに伴ともひ。遺訓何ぞ感かん歎たんなる。或は天目山に殉しし。幽囚君を忘れず。或は伏見城を守り。一身萬軍に當ある。昇平二百歳。斯の氣常に伸のぶるを得たり。然れども其鬱屈うよくするに方りては。四十七人を生なず。乃知る人亡ぶと雖も。英靈未だ嘗て泯ほびず。長く天地の間に在り。隱然發倫いんぱんを叙しす。孰たれか能く之を扶持しし。卓立たつりつす東海の濱。忠誠皇室を尊たんで。孝敬天神に事まふ。修文と奮武と。誓ちかつて胡塵こじんを清めんと欲ほす。一朝天步てんぷ艱がみ。邦君身先づ淪しんむ。頑鈍機けんどんを知らず。罪戾孤臣ざいりに及およぶ。孤臣葛藟こしんに困こしむ。君冤誰きんえんに向つて陳ちんせん。孤子墳墓こしに遠とほざかる。何を以て先親せんしんに謝せんせん。荏苒じんぜん二周星。獨り斯の氣の隨まふあり。嗟あはれ予萬死よばんすと雖も。豈汝あなと離わかるるに忍しのびんや。屈伸天地に付ます。

生死復な奚なぞ疑なはん。生きては當に君冤きんえんを雪ゆぐべく。復網維わういを張はるを見ん。死しては忠義の鬼おにとなり。極天皇基きを護まもらん。

(大意) 天地間に存在する正氣は粹然として我神州にあつまつてそれが秀でては不二のたかねとなり巍々として永久に聳たつゆそいでは大海の水となり洋々として八洲をめぐつてゐる。開いては萬朶の櫻となり其ふさふさとした芳香は他にくらべるものがない。凝こりては百鍊の鐵てつとなりその鋭いことかぶとでも斷る位である。

忠良の臣民何れも勇氣絶倫武夫は皆々敵愾心てきざいつよく此結構な國に君として臨む方は誰かと云へば即ち萬世一系の天皇である。君の御稜威ごりやういは上下四方にあまねく赫々たる明德は太陽とその光をくらべる位である。とは云へ移りかはりは世の習ひであるから此正氣も我國の皇室の盛衰や時勢の移りかはりと共に或時は顯著にあらはれ或時は姿をかくして又それに伴ともうて變遷をかさねた。乃ち物部守屋が我國固有の神教をあげて佛教を攻撃し欽明天皇を輔けて寺院を焼き拂つたことも正氣のあらはれであるし和氣清麿が正しき復命をして惡僧の膽をひやしたことも正氣のあらはれである。鎌足は之によつてを入鹿を誅して國家を泰山の安きにおき北條時宗は之によつて龍の口に元の使を斬つて日本の意氣地を見せた。ついで玄海灘に波あれて十萬の敵衆魚腹に葬られたのも正氣の然らしむ

るところである。志賀の舊郡月あきらかなる夜後醍醐天皇にかはりて風輦に乗りて御巡幸を装うた藤原師賢吉野の寄せ手急なるを見て護良親王に代つて討死した村上彦四郎義光諷臣尊氏の爲に鎌倉の岩屋に憂國の涙ひる時あらせられぬ護良親王折角の謀も容れられず今回こそは最後の合戦と思ひ定めて青葉しげれる櫻井の里のわたりの夕まぐれ悲壯の別杯をあげて遺訓慰勸に我子正行を河内へかへした楠木正成主君勝頼からは勸當を受けながら天目山合戦の當日孤軍奮闘の群に加はつて殉死した小宮山友信單身伏見の城を守つて萬軍包圍の中に從容防備し以て臣節を全うした鳥居元忠など一として此正氣の發現ならざるなしである。爾來承平二百年斯の氣暗に一味の流れをなしその末尾振はざるにあたつて白々體々滿一白の雪の中に花と散りにし四十七義士を出した。

依て思ふに其人ほろぶと雖もその氣未だ曾て亡びず。永く天地の間に在つて暗々裏に人道をたすけてゐるのである。方今幕末多年の時に當つて誰かよく之を發揮して東海の濱に卓然忠誠孝敬の道を立て皇室を尊び天神に奉仕するものぞ。及ばずながら自分は心竊に文を修め武を鍛へて胡塵を拂ひ以て斯の氣の承繼者となることを自ら任じてゐる。然るに一朝皇運につまづきがありその第一着の犠牲として我君齊昭公は幽囚の裡に呻吟せらるゝ身となつた。我もと資性頑鈍機を逸し餘波を受けて我身も謹慎閉居を命せらるゝ身になつた。あゝかうなれば我君の無實を誰に向つて陳する由もない。その上我

祖先の墳墓は遙かの遠地に在つて先祖の前に斷らうにも幾山河をへだてゝはそれすら心に任せぬ。孤忠に泣いて一日おくり暮してゐる中に早や二年にもなつたがその間とても一日片時念頭を離れぬものは斯の正氣である。嗟汝正氣よ余はたとひ死ぬる様なことがあつてもどうしてお前と離れたりしやうか。屈するも伸びるもそれは運まかせにし生くるも死ぬるも汝の嘯きにまかせて毫も疑はない。若し生あらば君冤をそゝぎ綱維をはることにつとむべく若し死ぬるならば忠義の權化の鬼ともなつて盡未來際皇基をお護りしやう。

皇統歌

大窪詩佛

天地開闢來。大統長相傳。天子無姓氏。定知姓是天。  
天皇如日月。萬古無變遷。誰道周德盛。劣能八百年。  
爲嬴爲劉後。至今已二千。其間幾姓氏。相代互忽焉。  
如何日出國。相傳白綿綿。

(譯) 天地開闢このかた。大統長く相傳はる。天子に姓氏無し。定て知る姓は是れ天。天皇は日月の如く。萬古變遷無し。誰か道ふ周德の盛んなるを。劣に能く八百年。嬴となり劉となつて後。今に至

る已に二千。其間幾姓氏。相代りて互に忽焉たり。如何ぞ日出づる國。相傳へて白綿綿たり。  
**（大意）** 此世開けてから以來天皇の御血すじが長くつたはつていつまでも變らない。支那で周がよくつづいたと云つてもたつた八百年のことである。秦（嬴氏）となり漢（劉）となつてから後今日まで星霜約二千年其間幾多の姓氏の王者が七面鳥も雷ならぬ位に變つてゐる。ひとり我大日本帝國のみはあまつ日つぎの高御座が月日と共に連綿とつづいて照り輝いてゐる。

贈少琴女史

雷首

二八誰家女。嬋娟眞可憐。君無王上點。我爲出頭天。

**（譯）** 二八誰が家の女ぞ。嬋娟眞に憐むべし。君に王上の點なくんば。我は出頭の天とならん。

**（大意）** これは戯れに自分の懇意の少女に贈つたもので年は二八かにくからぬ嬋娟窈窕の一美女があるが全體この娘かして若しも定まれる主人がないのならわしがお前の夫にならうに。王上點。王の字の上に點うつた字即「主」にして定まれる主人のこと。出頭天。天の字の頭の出たもの即「夫」

答二雷首

龜井少琴

扶桑第一梅。今夜爲君開。欲識花眞意。三更踏月來。

**（譯）** 扶桑第一の梅。今夜君の爲に開く。花の眞意を識らんと欲せば。三更月を踏んで來れ。

**（大意）** 日本第一の梅が今夜あなたの爲に開きますが若しその花の心を知らうとならば今夜十二時しのでござれ。（これも戯れにこたへたまでのことで少琴は決してさるだらしない娘ではなかつた）

悟道

扇如離手則無風。手若捨扇亦失風。非手非扇何處出。從來難辨此清風。

**（譯）** 扇如し手を離るれば則ち風無し。手若し扇を捨つれば亦風を失ふ。手に非ず扇に非ずして何處より出でん。從來辯へ難し此清風。

**（大意）** 扇もし手から離れたら風は起きないし手が若し扇を捨てたとしても亦風は起きない。一體清風は手から起きるか扇から起きるか一寸區別がつかぬが實は手からでもなく扇からでもなく手と扇とからである。

三又江

山田蟻堂

贖佳人。佳人響。太守怒。妾身任君殺。妾身任君活。妾有阿郎在。妾心不可奪。鬢髮在手亂如絲。

其七漢詩

二〇七

木蘭舟中斬蛾眉。遺恨不知深幾尺。三叉之水終古碧。

(譯) 佳人を買ふ。佳人を愛す。太守怒る。妾が身君の殺すに任す。妾が身君の活すに任す。妾に阿郎の在るあり。妾が心奪ふべからず。鬢髪手に在り亂れて絲の如し。木蘭舟中蛾眉を斬る。遺恨知らず深さ幾尺。三叉の水は終古碧なり。

(大意) 戯曲「仙臺萩」に出る名妓高尾の心事をうつしたものだ。高尾の容色絶美なるより某藩主千金を以て之を贖はんとす。高尾他に契りし情郎あるを以て意に従はず。太守怒つて之を三叉江(東京の今戸川が隅田川に注ぐところを三つ又と云ふ。それを漢語風にしたたもの)に斬る。此だけのことを詩化したるものである。

藩主が美人を買ひとらうとしたところが美人は眉をひそめてはねつけたので藩主は怒つて之を殺さうとした。美人は少しも恐れず「殺すも活かすも御意次第です。私には別に許した夫があります。他のお方にあだし心を持つことは出来ませぬ」と。そこで藩主は丈なす黒髪を無慙にも手にまきつけて舟中佳人をなきものにした。悠々たる隅田の流れその深さは幾尺と測るべきも綿々たる彼女の怨みははかるべからず。三叉の碧流とこしへに縁を湛へて此の悲しき貞操の犠牲を弔ふものゝ如し。

失 題

藤 田 東 湖

戒君勿耽花月夜。

濃花朧月屬多情。

戒君勿耽歌舞宴。

遊冶畢竟誤一生。

君身須愛海外名。

妾身須要閨中節。

君不聞功烈奈破翁。

討盡歐洲唱文明。

又不聞偉勳豐太閤。

振起皇威破膚兵。

古今英雄皆如此。

天下何事豈難成。

與君多情得同志。

闌宵和夢語丹誠。

七砲臺邊波萬里。

帆檣影裏月三更。

欲寄一封想子詞。

淚落枕頭靜有聲。

(譯) 君を戒む耽ること勿れ花月の夜。濃花朧月多情に屬す。君を戒む耽ること勿れ歌舞の宴。遊冶畢竟一生を誤まる。君が身は須らく海外の名を愛すべし。妾が身は須らく閨中の節を要すべし。君聞かずや功烈ナポレオン。歐洲を討盡して文明を唱ふ。又聞かずや偉勳豐太閤。皇威を振起して膚兵を破る。古今の英雄皆此くの如し。天下何事か豈成し難からん。君と多情同志を得。闌宵夢に和し丹誠を語る。七砲臺邊波萬里。帆檣影裏月三更。寄せんと欲す一封想子の詞。淚枕頭に落ちて靜に聲あり(大意) 君よ。花月の夜に耽溺する勿れ。濃花朧月は徒らに享樂の兒子をつくるのみである。君よ。歌舞宴樂に耽ること勿れ。遊蕩は要するに一生をあやまるものである。君よ。よろしく名を海外に馳



せんことに努め給へ。そは妾が閨中の節を守ることの大切なるご等し。御身は嘗てナポレオンのことを聞かれませんか。歐洲の列強をふみにじつて新文明を唱へたではありませんか。又御身は嘗て豊太閤の偉勳を聞かれませんか。皇國の威光を支那朝鮮にまで輝かしたではありませんか。古今内外の英雄は皆この通であります。天下何事か成らぬ事があります。君と氣があつて夢に心のあるだけ打あけて話す。五百重波臥す品川の台場のあたりチチと啼き通ふ千鳥に文ことづけて我此思ひ知らせまし。枕しとどに涙にぬれて壁に響くよすすりなき。

示二 諸 生二

安 積 長 齋

戒君莫見墨田花。 花下美人花讓華。 戒君莫見墨田月。  
月下少婦月耻潔。 先哲惜陰強研精。 何暇耽花月流連。  
吾閱書生三十年。 志業多因花月損。

(譯) 君を戒しむ見ること莫れ墨田の花。花下の美人花華を讓る。君を戒しむ見ること莫れ墨田の月下の少婦月潔を耻づ。先哲陰を惜しみ強いて研精す。何の暇あつてか花月流連に耽らん。吾書生を閱すること三十年。志業多く花月に因つて損せらる。

(大意) 諸君墨田の花を見てはいけない。花の下蔭には花より美しい美人が誘惑の秋波を送つてゐる。諸君墨田の月を見てはいけない。月の下には妙齡の處女月よりも美しいものがあつて人をチャームしてゐる。だから先哲は光陰を惜しんで強ひて勉強してゐた。何の暇があつて月に浮れて遊ぶなど出来やう。吾は書生を教ふること茲に三十年。その間始終花月によつて志業を妨げられる學生を見る。

偶 成

木戸松菊(孝允)

一穗寒燈照眼明。 沈思默坐無限情。 回頭知己人已遠。  
丈夫畢竟豈計名。 世難多年萬骨枯。 廟堂風色幾變更。  
年如流水去不返。 人似草木爭春榮。 邦家前路不容易。  
三千餘萬奈蒼生。 山堂夜半夢難結。 千岳萬峯風雨聲。

(譯) 一穗の寒燈眼を照らして明らかなり。沈思默坐限り無きの情。頭をめぐらせば知己人已に遠し。丈夫畢竟名を計らんや。世難多年萬骨枯れ。廟堂の風色幾變更。年は流水の如く去つて返らず。人は草木に似て春榮を争ふ。邦家の前路容易ならず。三千餘萬蒼生を奈。山堂夜半夢結び難し。千岳萬峯風雨の聲。

其 七 漢 詩

二二一

(大意) 寒夜友なし。一穗の孤燈に對して沈靜すれば千感萬感胸にあふれてとめどなし。夫れ大丈夫の世に處する何ぞ必ずしも名譽の一端にのみ限るべき。今や内憂外患事しげく實に國家危急の秋であつて此が爲に幾多の知人も犠牲になつた。この先どう云ふ風に開展するものか。これを想ひかれを想ふて山堂の夜半千嶽萬峯の風雨を聞きながら悵然として腕を拱いてゐる。

辭 世

上 杉 謙 信

一時榮辱一杯酒。 四十九年天地空。 今而不問死生境。

歲月匆匆短夢中。

一期榮華一杯酒。 四十九年一醉間。 生不<sub>レ</sub>生死亦不<sub>レ</sub>死。

歲月只是如夢中。

(譯) 一時の榮辱一杯の酒。四十九年天地空し。今にして問はず死生の境。歲月匆匆短夢の中。

一期の榮華一杯の酒。四十九年一醉の間。生くるも生きず死するも亦死せず。歲月只是れ夢中の如し

(大意) 榮辱何物ぞ。是一杯の薫酒に過ぎず。喉頭一過して已に其甘苦なし。四十九年の短夢の生今

に於いて亦何をか云はう。

今や我逝く。是四十九年と云ふ一杯の酒をのんで夢みてゐたものが當に逝くべきのところに逝き歸す

べきの處に歸すると云ふものだ。

夢 想 國 師

一日學問千載寶。 百年富貴一朝塵。 一書恩德勝萬玉。

一言教訓重千金。

(譯) 一日の學問は千載の寶。百年の富貴は一朝の塵。一書の恩德は萬玉に勝り。一言の教訓は重き千金。

(大意) こゝに謂ふ學問とは普通の文字の學を云ふに非ず。人生の本質真如の妙諦を會得するの學にして此學に比すれば富貴財寶の如きは弊履の如しとなり。

偶

感

西 郷 南 洲

幾歷辛酸志始堅。 丈夫玉碎羞瓦全。 我家遺法人知否。

不爲兒孫買美田。

(譯) 幾たびか辛酸を歷て志始めて堅し。丈夫玉碎瓦全を羞づ。我家の遺法人知るや否や。兒孫の爲に美田を買はず。

(大意) 人間と云ふものは苦勞をなくちや駄目だ。幾たびか千辛萬苦して始めて志操が堅固になる

其 七 漢 詩

二二三

もので男子たるものは玉となつて碎けても瓦となつて全きを差づるものである。だから自分の家の遺法は人が知つてゐるかどうかは知らぬが子孫の爲に美田を買うて安逸遊惰のもといれなんかは敢てせない方針である。

玉島澄暉 (和歌浦十二景)

祇園 南海

風鳴江葦夜漫々。 神女不還秋月團。 二十五絃空雁影。

霜花如夢水雲寒。

(譯) 風は江葦を鳴らして夜漫々たり。神女還らず秋月團かなり。二十五絃雁影空し。霜花夢の如くにして水雲寒し。

(大意) 風は磯邊の葦をふいて夜は森々と更けて行く。玉津島姫一たび逝いて亦還らず。團々たる秋月の大空にかゝつて光さやか雁は琴柱の枕しつ。霜花夢より淡くして水雲いご身にしみて寒い。

後夜聞佛法僧鳥一

僧 空 海

閑林獨坐草堂曉。 三寶之聲聞一鳥。 一鳥有聲聲有心。 聲心雲水俱了了。

(譯) 閑林獨坐草堂の曉。三寶の聲一鳥を聞く。一鳥聲あり聲心あり。聲心雲水俱に了々。

(大意) 物静かな草堂に獨坐して法を修してをると曉に一羽の鳥が飛んできて佛法僧々々と啼くのが如何にも心ありげで見上ぐれば悠々たる行雲たなびく。耳を敬つれば淙々たる流水あり。行雲と流水と彼の鳥と此の心と溶融調和してこゝに玄々神祕の妙諦を悟了す。

九月十三夜

菅原道真

去年今夜侍清涼。 秋思詩篇獨斷腸。 恩賜御衣猶在此。 捧持毎日拜餘香。

(譯) 去年の今夜清涼に侍し。秋思の詩篇獨り斷腸。恩賜の御衣は猶こゝに在り。捧持して毎日餘香を拜す。

(大意) 去年の今月今夜は清涼殿に天子に侍つて秋思と云ふ題で詩を吟じてそれが御意になつて御褒美をいたゞいた。嗚呼その時の歡喜と今配所に月を見るの悲哀とを比ぶれば誠に腸を斷つ感じがする。恩賜の御衣は今も離さず持つてゐる。これをば毎日おしいたゞいて君恩の有りがたきを拜してせめてもの慰み草にしませうわい。

赴靈山長嘯子看花

藤原 愷 高

君是護花花護君。 有花此地久留君。 入門先問花無恙。

其 七 漢 詩

二二五

莫道先花更後君。

(譯) 君は是花を護り花は君を護る。花有つて此地久しく君を留む。門に入つて先づ問ふ花恙なきやと。道ふこと勿れ花を先にして更に君を後にすることを。

(大意) 君は花を護り花は君を慰めして御身と花と互に慰安保護の伴となつてゐるわけである。門に入つて先づ第一に花はどうだかと聞いても御身は「花のことを先にどうて俺を後にする」と答めないで下さい。

泊二天草洋一

頼山陽

雲耶山耶吳耶越。 水天髣髴青一髮。 萬里泊舟天草洋。

煙橫篷窓日漸沒。 瞥見大魚躍波間。 太白當舟明似月。

(譯) 雲か山か吳か越か。水天髣髴青一髮。萬里舟を泊す天草の洋。煙は篷窓に横はつて日漸くに没す。瞥見すれば大魚の波間に躍るを。太白舟に當つて明月に似たり。

(大意) 水や空や水なる沖あひに青く一髪を引けるものは雲か山か吳か越かとばかりほのぼのと見て萬里の波濤を見渡しつゝ我舟は天草洋に泊つた。折しも淡煙一抹船の窓べりをかすめて見渡せば夕陽已に西海に入らんとす……と見れば名も知らぬ大魚ありて波間にをどり仰げば輝々たるゆふづ

つ(太白)が我船べりををらして光さながら月の如く得も云はぬ風勝である。

出郷作

佐野竹之助

決然去國向天涯。 生別又兼死別時。 弟妹不知阿兄志。

慇懃牽袖問歸期。

(譯) 決然國を去つて天涯に向ふ。生別又兼ね死別の時。弟妹は知らず阿兄の志。慇懃に袖を牽いて歸期を問ふ。

(大意) 御國の爲めにつくさんときつぱりと覺悟を定めて長途の旅に出やうとしてゐる自分の門出は生別と死別とを兼ねたものである。それなのに無邪氣な弟妹はこの兄の心を知らぬもんだから又しても袖をひいては「兄さんいつ歸るの」ときく。あはれ何等のいぢらしさぞ。

八幡公圖

頼山陽

結髮從軍弓節雄。 八州草木識威風。 白旗不動兵營靜。

立馬邊城看亂鴻。

(譯) 結髮軍に従うて弓節雄なり。八州の草木威風を識る。白旗は動かす兵營靜なり。馬を邊城に立

其七 漢詩

て、亂鴻を看る。

(大意) 少壯已に初陣からして強弓を以て鳴り八州の草木君が威に靡かんばかり。白旗は動かす兵營は静か。空に行雁の列を亂るゝを見て下に伏兵あるを知るなど實に知勇兼備の良將である。

太田道灌借し蓑圖

遠山雲如

孤鞍衝雨叩茅茨。 少女爲遺花一枝。 少女不言花不語。  
英雄心緒亂如絲。

(譯) 孤鞍雨を衝いて茅茨を叩く。少女爲に遺る花一枝。少女は言はず花は語らず。英雄の心緒亂れて絲の如し。

(大意) 道灌獵に出てにわかあめに降られてしかたなく唯一騎雨を冒して茅茨をおどつれてどうか蓑をかしてくれいと頼んだから少女は無言で唯山吹の花一枝をさし出した。これは「七重八重花はさけども山吹のみの一つだになきぞかなしき」の古歌によつて「實の」と「蓑」とをかけて答へたものだがなさないことには道灌當時文雅のたしなみなく何のことだかわからぬものだから戰場に出て雲霞の敵をも物どもせぬ英雄が此花一枝の前に色々様々と煩悶したとはさても笑止千萬で又此が後日道灌が發奮して歌文を深く究めた動機ともなつたのである。

前兵兒語

輒山陽

衣至脗袖至腕。 腰間秋水鐵可斷。 人觸斬人馬觸斬馬。  
十八結交健兒社。 北客能來何以酬。 彈丸硝藥是膳羞。  
客猶不屬厭。 好以寶刀加渠頭。

(譯) 衣は脗に至り袖は腕に至る。腰間の秋水鐵斷つべし。人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る。十八交はりを結ぶ健兒の社。北客能く來らば何を以て酬いん。彈丸硝藥是れ膳羞。客猶屬厭せずんば好し寶刀を以て渠が頭に加へん。

(大意) 裾はすねまでたもとは腕までチャンピラビンの短い着物を着てはゐるが腰間三尺の秋水は鐵をも斷つべき銳利さで此をどつて一たび戰場に向へば人と云はず馬と云はず手あたり次第に斬りたふす。かくて朝々暮々に武を練り勇を鍛へ十八才始めて健兒の社に仲間入をして一個堂々たる若武者となる。ナニ外國から攻めてくるとな。よし、オロシヤのお客に出したものは煙硝着に彈丸の豆をれでも懲り懲りしないとならば此一振を以て彼等の頭上をお見舞ひ申すまでいある。」

葉兒行

雲井龍雄

斯身飢斯兒不育。 斯兒不棄斯身飢。 捨是耶不捨非耶。

共七漢詩

二一九

人間恩愛斯心迷。 哀愛不禁無情淚。 復弄兒顔多苦思。

兒兮無命伴黃泉。 兒兮有命斯心知。 焦心頻屬良家教。

欲去不忍別離悲。 橋畔忽驚行人語。 殘月一聲杜鵑啼。

(譯) 斯の身飢ゆれば斯の兒育たず。斯の兒棄てざれば斯の身飢ゆ。捨つるが是なるか捨てざるが非なるか。人間の恩愛斯の心に迷ふ。哀愛禁せず無情の涙。復兒の顔を弄して苦思多し。兒や命なくんば黄泉に伴はん。兒や命有らば斯の心知らん。焦心頻に屬す良家の教。去らんと欲して忍びず別離の悲しみ。橋畔忽ち驚く行人の語。殘月一聲杜鵑啼く。

(大意) 此の身が飢ゑては斯の兒は育たず。斯の身を飢ゑぬ様にするには此兒を棄てねばならぬ。棄てるがよいか棄てぬがよいか父子恩愛の情にかられてとつおいつ。不覺の涙はどめどもなくハラ／＼とこぼれて袂をこらへ顔をなでして「若しもお前が死ぬるのならば父さんも一緒に死んで黄泉の道しるべをしてやらう。若しもお前が生い立つならば今の心を成程と推量してくるれ時も來やう。必ず無情のしうちとは思ふてはくれるなよ。一旦すてた此からは親と思ふな子でないぞ。」と思つて一足行つてはあと心をいらち氣を亂し「何でも立派な人が拾つて育て上げればよいが。」と思つて一足行つてはあともどり又去り又來幾たびもためらつてそぞろ別離の情のつらさに堪へかねてゐるやさきに橋のたもと

に下駄カラコロと人のけはひにハツとして身を縮めて物かげに忍びよれば殘んの月はさやかに照つて。杜鵑一聲血になく聲の又一しきり斷腸の思ひをそへるものがある。

芳野 藤井竹外

古陵松柏吼天颯。 山寺尋春春寂寥。 眉雪老僧時輟帚。

落花深處說南朝。

(譯) 古陵の松柏天颯に吼ゆ。山寺春を尋ねれば春寂寥。眉雪の老僧時に帚くことを輟め。落花深き處に南朝を説く。

(大意) 山寺の春を尋ねべく芳野の山にきて見れば春は已に暮れかたとなつて延元帝(後醍醐天皇)の陵のあたり天颯颯々として物あはれにある。侍る眉雪の老僧折から手にせる帚をやめて花の吹雪の中にたゝすみながら南朝の古を語つて言ひ知れぬ感慨のわくものがある。

失題 橋本景岳

殘月滴露濕人袂。 曉風吹面覺秋冷。 忽驚大蛇當路橫。

拔劍欲斬老松影。

(譯) 殘月滴露人のたもとを濕はす。曉風面を吹いて秋冷を覺ゆ。忽ち驚く大蛇の路に當つて横はる

を。劍を抜いて斬らんと欲すれば老松の影。

(大意) 朝けの露はきら／＼と残んの月の影更けて風ひややかに顔をふく。と見れば大蛇あり我前路に横たはる。「ナニ糞ツ」と劍をぬいて斬らうとする。これはしたり道傍の老松影透迤として残月にうつつてゐるのであつた。

逸 題

西 郷 南 洲

才子元來多過事。 議論畢竟世無功。 誰知默々不言理。

山是青々花是紅。

(譯) 才子元來多く事をあやまる。議論畢竟世に功無し。誰か知る默々不言の理。山は是れ青々花は是れ紅なり。

(大意) とかく才子は事を過りやすい。口先の議論と云ふものは何の役にもたつものではない。何も云はないでも紅花緑葉の自然の理は行はれる。沈黙は畢竟最上の雄辯である。

遊 芳 野

河 野 鐵 兜

山禽叫斷夜寥々。 無限春風恨未消。 露臥延元陵下月。

滿身花影夢南朝。

(譯) 山禽叫び斷わて夜寥々たり。無限の春風恨みて未だ消えず。露臥す延元陵下の月。滿身の花影南朝を夢む。

(大意) 小鳥の聲も音たわてヒツソリとした夜山谷の春風無限の怨みを吹いて後醍醐帝の御陵近く露臥すれば滿身落花を浴びて夢は南朝の昔をさまよつてゐる。

九月十三日陣中作

上 杉 不 識 庵 (謙信)

霜滿軍營秋氣清。 數行過雁月三更。 越山併得能州景。

遮莫家鄉憶遠征。

(譯) 霜は軍營に滿ちて秋氣清し。數行の過雁月三更。越山併せ得たり能州の景。さもあらばあれ家郷遠征を憶ふ。

(大意) 霜は陣營にさわわつて見渡たす一面には秋の氣が滿ち／＼てゐる。夜はふけて三更の明月高く天心に澄み一つら二つら竿さしわたる雁の數さへ見ゆるさやけさである。さても我此度越中能登までも征服して武威益々ふるひ今宵此七尾の城で十三夜の月を見るやうな事になつたがそれにつけても故郷越後の方では自分の家族や家來の家族どもがああ明月におもひをよせて我等遠征の一行の健在を祈つてゐることであらう。

人生五十愧無功。花木春過夏已中。滿室蒼蠅掃難去。

起尋禪榻臥清風。

(譯) 人生五十功無きを愧づ。花木春過ぎて夏已に中なり。滿室の蒼蠅掃へども去り難し。起つて禪榻を尋ねて清風に臥す。

(大意) 自分は飽くまで我君義滿を輔佐しやうと思つてゐたのに讒臣のために却つて我君にうとんせられるやうな破目になつた。あゝ人間わづか五十年で年は老い易く事は成り難い。春過ぎ夏も半ばとなつて今が深山のしげり時我身も夏の働きざかりだが室一面にうるさい蠅のやうな小人原が居つて邪魔を入れるから俺はそんなものには相手にならず起つて清風をよぐあたり禪榻にでも臥したやうな色々適樂の場所を求めて住まふ。

僧 隱 巖

祝融南來鞭火龍。 火旗焰々燒天紅。 日輪當午凝不去。

萬國如在紅爐中。 五嶽乾雲彩滅。 陽侯海底愁波竭。

何當一夕金風發。 爲我掃却天下熱。

(譯) 祝融南より來たつて火龍に鞭うつ。火旗焰々天を燒いて紅なり。日輪午に當り凝つて去らず。萬國紅爐の中に在るが如し。五嶽乾き雲彩滅す。陽侯海底愁波竭く。何ぞ一夕金風の發して。我爲めに天下の熱を掃却するに當らん。

(大意) 火の神祝融が南より來たつて龍に鞭うつと火の旗手は焰々とあがつて天を眞紅に燒き日は午天に凝り萬國は火爐の底に在るが如く五嶽は乾きあがり雲は褪めるし海底愁の波をよせる。その波すらも盡きた。斯の如く暴威を逞しくする炎熱も一夕秋風冷を齎せば頓に勢挫けて煙散霧消するに至る

正 氣 歌

廣 瀬 武 夫

死生有命不足論。 鞠躬唯應酬至尊。 奮躍赴難不辭死。

從容就義日本魂。 一世義烈赤穗里。 三代忠勇楠子門。

憂憤投身薩摩海。 慷慨就刑小塚原。 或爲芳野廟前壁。

遺烈千年見鏃痕。 或爲菅家筑紫月。 同存忠愛不知寧。

可見正氣滿乾坤。 一氣磅礴神州存。 嗚呼正氣畢竟在誠字。

呶々何必要多言。 誠哉誠哉斃而已。 七生人間報國恩。



(譯) 死生命あり論するに足らず。鞠躬唯至尊に酬ゆべし。奮躍難に赴き死を辭せず。從容義に就く日本魂。一世の義烈赤穂の里。三代忠勇楠子の門。憂憤身を投ず薩摩の海。慷慨刑に就く小塚原。或は芳野廟前の壁となり。遺烈千年鏃痕を見る。或は菅家筑紫の月となり。同じく忠愛を存して寧きを知らず。見るべし正氣乾坤に満ち。一氣磅礴して神州存す。嗚呼正氣は畢竟誠の字にあり。嗚々何ぞ必らずしも多言を要せん。誠なる哉誠なる哉斃れて已み。七たび人間に生れて國恩に報せん。

(大意) 從來忠誠憂國の士たる赤穂義士楠公父子西郷隆盛僧月照吉田松陰等の幕末の志士菅原道真等にあり唯一至誠を以て君國に報いやう。

村居雜詩

横井小楠

既擲榮達甘閑退。

豈得高踏傲人間。

養將山水清靈氣。

欲踰利名第一關。

(譯) 既に榮達を擲つて閑退を甘んず。豈高踏人間に傲るを得ん。山水清靈の氣を養ひ將つて。踰べんと欲す利名の第一關。

(大意) 既に官職をすて、閑散の身となつたとて何も高踏勇退の名士氣取りをして他にたかぶることは出来ない。唯山水清靈の氣に心腸を洗つて利名に汲々たる俗心の第一關門を超えやうと思ふ。

逸風

西郷南洲

不養虎兮不養豺。

亦是九州西一涯。

七百年來舊知處。

百二都城皆我儕。

壓倒海南三尺劍。

蹂躪天下七寸鞋。

人若欲知吾居處。

長住甕城千石街。

(譯) 虎を養はず豺を養はず。亦是れ九州の西一涯。七百年來舊知の處。百二の都城皆な我儕。海南を壓倒す三尺の劍。天下を蹂躪す七寸の鞋。人若し吾が居處を知らんと欲せば。長く住す甕城の千石街。

(大意) 此は隆盛が征韓論を唱へて議容れられず。その徒を連れて郷里甕島に歸り私學校を建て、籠居してゐた時の豪懷を咏んだものである。

我養ふところ虎にあらず。豺にあらず。別に天下の英俊を養成しやうと云ふのでない。九州の西のはなる此土地は我がなつかしの生れ故郷で百二都城の人々は皆我ころやすい人ばかりだからそれでかうしてゐると云ふに止まる。さはれ我も一個の男子であるからには三尺の劍をふるつて海南を壓倒し七寸の草鞋をはいて天下を蹂躪する位の意氣はある。人々若も我が住所を知らうと思ふならば俺は長く鹿兒島の千石街に居るつもりだからさう承知してゐて貰ひたい。

殘民爭採首陽蕨。

處處開爐鎖竹扉。

詩興吟酸春二月。

滿城紅綠爲誰肥。

(譯) 殘民争ひ採る首陽の蕨。處處爐を開き竹扉を鎖す。詩興吟酸なり春二月。滿城の紅綠誰れがためにか肥ゆ。

(解) 殘民。騷亂の爲に別れ／＼になつてくるしんでゐる民。首陽の蕨。伯夷叔齊の故事を引いて人民の飢に苦しんでゐることを云つたもの。昔周の武王の臣伯夷叔齊の兄弟は武王が其君殷の紂王を討たんとするを諫めて容れられず。周の粟を食ふを耻とし首陽山に入つて蕨を食つて飢をしのいだ。紅綠。紅花綠葉のこと。

(大意) 戦亂にさいなまれたみじめな人民は飢に苦しんで首陽のわらびもとり合ひし兼ねなさうなり。寒さにこゝねては竹のさぼそを閉ぢ爐をひらいて「あゝ寒い」を繰り返してゐる。此有様を見てはよしや氣候は二月でもまさか詩などよんでみる氣にもなれないのに心な花や葉はさらぬげに紅く咲きあをくしげつてゐる。

これは暗に義政の文學に耽溺して政治を怠るをおいませめになつたものである。

仙客來遊雲外巔。

神龍棲老洞中淵。

雪如紈素煙如柄。

白扇倒懸東海天。

(譯) 仙客來り遊ぶ雲外の巔。神龍棲み老ゆ洞中の淵。雪は紈素の如く煙は柄の如し。白扇倒に懸る東海の天。

(大意) いとも神々しい富士の嶺は仙客も雲の上に來りあそぶ神龍も洞中に安居老を送りて誠に崇高の極みである。更に之を遠くより望めば消ゆやらぬ白雪は素絹の如く立のぼる煙は柄にもたとへつべき形をして一個の大なる白扇が東海の空に倒にかけられたかのやうにある。

本心の鏡

松林飯山

世評紛々亂如絲。

不是諛辭即妬辭。

磨得一團方寸鏡。

自家妍醜自家知。

(譯) 世評紛々亂れて絲の如し。是れ諛辭ならずんば即ち妬辭なり。一團の方寸鏡を磨し得て。自家の妍醜は自家に知れ。

(大意) 世評紛々として甲是乙非亂絲の如し。その是とするものはへつらひにして其非とするものは

妬みと云ふが如く一も誠實の評なし。よろしく自家先天に享有せる良心のますみの鏡を磨いで自家の美醜を自家に知るべきである。

欲し出題し壁

僧 清 狂

男兒立志出鄉關。學若無成死不還。埋骨豈惟墳墓地。人間到處有青山。

(譯) 男兒志を立てて郷關を出づ。學若し成る無くんば死すとも還らず。骨を埋むる豈惟墳墓地のみならんや。人間到處に青山あり。

(大意) 男子一たび志を立てて故郷を出るからには學問が成就するならばともかく左もない以上は死んでも還らぬぞ。ナニ故都ばかりが活動の舞臺ではない。人間は到るところに青山もあれば白水もあるサ。骨を埋めるのは必ずしも先祖累代の墓地と限らなくてもよい。

男兒元愧傲書生。跋涉雲山千里程。欲讀乾坤活歷史。須暗世態與人情。

(譯) 男兒元愧づ書生に傲ふを。跋涉す雲山千里程。乾坤の活歷史を讀まんと欲す。須らく世態と人

情とを暗んすべし。

(大意) 男兒徒らに書生のまねに甘んずるは愧づべきの極である。唯夫れ雲山千里の道を跋涉するは大自然の活きた歴史の教科書を讀んで世態人情を審に知らう爲である。

被し送江戶途上

帽 三 樹

當年意氣欲凌雲。快馬東馳不見山。今日危途春雨冷。檻車搖夢度函關。

(譯) 當年の意氣雲を凌がんと欲す。快馬東に馳せて山を見ず。今日危途春雨冷たし。檻車聲を搖がして函關を度る。

(大意) 當年の意氣雲を凌がんばかり快馬に鞭うつて東に馳せて前面の小岳眼中になし。今や途危くして春雨蕭々たり。檻車夢を搖つて函根の關をこねる。

花 朝 下二瀬 江一

藤 井 竹 外

桃花水暖送輕舟。背指孤鴻欲沒頭。雪白比良山一角。春風猶未到江州。

(譯) 桃花水暖かにして輕舟を送る。背指す孤鴻沒せんと欲する頭。雪は白し比良山の一角。春風猶

未だ江州に到らず。

(大意) 比良の暮雪の遠景を吟じたものである。棹さし下る兩岸は桃さへ咲いて流れもいと暖かき心地のせらるゝにかへりみすれば鴻一羽東をさして飛んで行く。その方角にあたつて比良が嶽の一角尙雪白の冠をとらず。さては江州へはまだ春風がおとづれぬと見ゆる。

隅田櫻花

龜田 鷗 齊

長堤十里白無痕。 訝似澄江共月渾。 飛蝶還迷三月雪。

香風吹渡水晶村。

(譯) 長堤十里白痕無し。澄江月と共に渾するに似たるを訝かる。飛蝶還迷ふ三月の雪。香風吹渡る水晶の村。

(大意) 隅田の堤約十里が間は櫻花一白白水連なつて月と水と花と凡べてが融合したかどばかり。あたり飛び舞ふ蝶までも時ならぬ花の吹雪に迷つてゐる。やがて春風一しきりわならぬ香を齎らして清らかな水村をかすめて過ぎる。

蒙古 古 來

賴 山 陽

筑海颶風連天黑。 蔽海而來者何賊。 蒙古來來自北。

東西次第期吞食。 嚇得趙家老寡婦。 持此來擬男子國。

相模太郎膽如甕。 防海將士人各力。 蒙古來吾不怖。

吾怖關東令如山。 直前斫賊不許顧。 倒吾檣登虜艦。

擒虜將吾軍喊。 可恨東風一驅附大濤。 不使羶血盡膏日本刀。

(譯) 筑海の颶風天に連つて黒し。海を蔽ふて來る者は何の賊ぞ。蒙古來北より來る。東西次第に吞食を期す。趙家の老寡婦を嚇し得て。此を持して來つて男兒國に擬す。相模太郎膽甕の如く。防海の將士各々力む。蒙古來吾怖れず。吾は怖る關東令山の如きを。直前賊を斫つて顧みるを許さず。吾が檣を倒し虜艦に登り。虜將を擒にし吾軍喊す。恨むべし東風一驅大濤に附し。羶血をして盡く日本刀に膏せしめず。

(大意) 玄海灘に風荒れて空物すこき折しもあれ海を蔽うてまつしぐらによせくるつはものそも何ぞ曰はく蒙古なり。彼趙氏の宋室を奪ひそれと同じ寸法を以て男子國たる此日本を併吞し次第に西に東に手を出さうとしてゐるがナニ此しきの烏合衆はちつとも恐るゝに足らぬ。相模の太郎時宗剛膽無双の執權で其命を受けて博多の濱で防戦してゐる將士何れも忠魂義膽鐵石よりも堅き人ばかりである。

怖るべきは蒙古來ではなくて時宗の儼乎たる命令である。勇往邁進して一步もあとへ退くことを許さ  
れず。吾橋を倒して敵の軍艦に登りては彼の將を生捕りにして吾軍の喊聲(ごきのこわ)雷のごとく  
である。折からすさぶ神風に三千餘艘の敵艦は木の葉を散らすが如くに或は漂ひ或はくだけ或は沈み  
又捕へられてをしいことには日本刀の切れ味を知らしてやる機會が遂になかつた。

訣 別

梅田雲濱

妻臥病床兒泣飢。 此心誓擬拂戎夷。 今朝死別兼生別。  
唯有皇天后土知。

(譯) 妻は病床に臥し兒は飢ゑに泣く。此心誓つて戎夷を拂はんことを擬す。今朝の死別は生別を兼  
ぬ。唯皇天后土の知るあらん。

(大意) 此は雲濱が安政の大獄につながれて江戸に下らうとするとき郷里の病妻飢兒に哀別の意をよ  
せたものである。

妻は病床に呻吟し兒は飢ゑになきして一個人としてはまことに不幸な境遇に在りながら自分は飽くま  
でも王事につくして洋夷をはらはうと思つてゐる。今此家を出て行くのは一世一度の生きわかれでや  
がてまた死にわかれであらうが公明正大な此心はとても今の幕府なんかにはわかるものではない。唯

天神地祇が御照覽ましますことであらう。

偶 成

木戸孝九

天道不知是耶否。 陰雲漠々日光微。 我君邸閣看難見。  
春雨和淚滿蓑衣。

(譯) 天道知らず是なるか否なるか。陰雲漠々日光微なり。我君の邸閣看れども見難し。春雨涙に和  
して蓑衣に滿つ。

(大意) 天道の是非我之を知らずと雖も陰雲むら／＼と湧いて日光を障へ我君の御居も爲に望みがた  
く春雨血涙と共に我蓑を濕ほす。

成る時成るに非ず

弘法大師

莫道此花今年發。 應知往歲下種因。 因緣相感枝幹聳。  
何況近日遇早春。

(譯) 道ふこと莫れ此花今年發くと。應に知るべし往歲種を下すの因を。因緣相感して枝幹聳ゆ。何  
ぞ況んや近日早春に遇ふをや。

(大意) 此花今年開くと觀るのは誤である。今年開くのは往年種を蒔いた結果である。原因と結果と

相呼應して枝も榮わりや葉も茂る。まして近日早春に遇へば此花の更に深甚なるを覺ゆるものがある

櫻 花 詞

逸 名

薄命能伸旬日壽。納言姓字冒此花。零丁借宿平忠度。

吟詠怨風源義家。滋賀浦荒飜暖雪。奈良都古簇紅霞。

南朝天子今何在。欲望芳山路更賒。

(譯) 薄命能く伸ぶ旬日の壽。納言の姓字此花を冒し。零丁宿を借る平忠度。吟詠風を怨む源の義家。滋賀の浦は荒れて暖雪飜り。奈良の都は古びて紅霞簇り。南朝の天子今何くにか在る。芳山を望まんと欲すれば路更に賒なり。

(解) 薄命。ふしあはせなことを言ふけれどもここでは櫻花の早く散ると云ふ意。旬日。十日。納言云々。藤原成範此花を愛して庭に一ばい植ゑて天皇から櫻町中納言の稱號を賜はつた。

零丁云々。おちぶれること。忠度の詠「行きくれて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじなるらん」怨風。源義家が「吹く風をなこそこの關と思ひしに道もせにちる山櫻花」の詠をさす。滋賀浦。舊都にして又櫻の名高し。平忠度の詠に「さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」奈良云々。これも舊都で古櫻の名所の一。つ伊勢大輔の歌に「いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな。」

(大意) 櫻は僅に數日の盛を保つに過ぎないけれども我國古來の人士の愛玩措かざるところである。

江都客裡雜詩 (江戸に客居してゐる時につくつたもの)

賴 杏坪(賴山陽の父)

八百八街宵月明。秋風處處賣蟲聲。貴人不解籠間語。

總是西郊風露情。

(譯) 八百八街宵月明らかなり。秋風處々蟲聲を賣る。貴人は解せず籠間の語。總べて是れ西郊風露の情。

(大意) 秋ふけて江戸の八百八街にはさやかな月がてつてそよふく風につれて蟲賣の聲や蟲の聲が聞ゆる。あゝあのあはれな蟲よ。お前の聲は凡べて西郊の風にうたひ露に養はれた故郷戀しの悲しい聲だのに貴人はおもひやりなくして籠になく音をきいて面白くと興じてゐるとは何と無情のしうちではないか。

獄 中 作

賴 三樹(賴山陽の子)

排雲欲手掃妖熒。失脚墜來江戸城。井底痴蛙過憂慮。

天邊大月缺高明。身臨鼎鑊家無信。夢斬鯨鯢劍有聲。

其 七 漢 詩

二二七

風雨多年苔石面。 誰題日本古狂生。

(譯) 雲を排して手に妖燐を拂はんと欲し。失脚墜ち來る江戸の城。井底の痴蛙憂慮に過ぎ。天邊の大月高明を缺ぐ。身は鼎鑊に臨んで家に信なく。夢に鯨鯢を斬つて劍に聲あり。風雨多年苔石の面。誰か題せん日本の古狂生。

(大意) 手づから國家にあだなすわるものごもを平げやうとおもつて却つて失敗して江戸城にとらはれ人となつた。これと云ふのも自分が分に過ぎた心配をしたからでそんな心配をするやうになつたのももとはと云へば天邊の明月にも比すべき我朝廷の御威光がふるはんからそれを歎いてのことだ。今や自分は死刑に處せられやうとして居るけれども故郷へたよりをするそのつてすらもないし無念かうじて夢路を辿れば鯨鯢を斬ると見てさめてカチャリツと劍がなる。ああ此身死して秋風秋雨幾星霜を經過せば誰がおどづれてくれることだらう。此に日本の古狂生がとはの眠りについたとでも苦むす石の面に刻んでくれたらそれをせめてもの心やりにしやうがそれすらもどうだかわかつたことでない。

源 九 耶

武田 耕雲 密

鶉越之險猶可跋。 屋島之濤猶可絕。 腰越之驛不可越。 難拔讒豎三寸舌。 譏豎之舌有所恃。 十萬平軍一鼓拔。

兄家岳翁如魍魅。 獨怪帷幄張子房。 不安劉氏安呂氏。 李廣兵法渾是奇。 一生數奇亦可悲。 芳野風雪衣川水。 英雄之末路無所歸。 多情空得兒女憐。 蛾眉唱斷縑絲詞。

(譯) 鶉越の險猶跋ゆべし。屋島の濤猶絶つべし。腰越の驛は越ゆべからず。十萬の平軍一鼓にして抜く。拔き難きは讒豎三寸の舌。讒豎の舌は恃むところあり。兄家岳翁魍魅の如し。獨り怪しむ帷幄の張子房。劉氏を安んぜずして呂氏を安んず。李廣の兵法渾べて是奇。一生の數奇亦悲しむべし。芳野の風雪衣川の水。英雄の末路歸するところなし。多情空しく兒女の憐れみを得。蛾眉唱斷す縑絲の詞。

(大意) 鶉越の險も屋島の荒波も一たび叱咤して踰ゆること易々たれども腰越の驛ばかりはどうにもこわられない。十萬の平軍は一鼓の下に抜くことが出来るが讒臣の舌はどうにも抜くことが出来ない。蓋彼等讒臣には相應のよるところがあるからつよいのである。兄の頼朝と云ひ頼朝の外父時政と云ひ皆悪魔のやうな人間ばかりである。唯それ頼朝の夫人政子が北條氏の爲ばかり謀つて源氏の爲を思はなかつたのは實にわけのわからない話である。漢に在つては李廣將軍が數奇の運命にも比すべきか。

或は芳野の風雪にござされ或は衣川の寒流に惱み五尺の軀肢おくところなし。美女爲に哀怨の情に堪へず。鎌倉の社殿にしづのをだまきの歌迄うたつてかなしんだ。

高德題 櫻圖

齋藤監物

踏破千山萬嶽煙。鸞輿今日到何邊。

單蓑直入虎狼窟。

一七深探鮫鰐淵。

報國丹心嗟獨力。

回天事業奈空拳。

數行紅淚兩行字。

附與櫻花奏九天。

(譯) 踏み破る千山萬嶽の煙。鸞輿今日何れの邊にか到る。單蓑直に入る虎狼の窟。一七深く探る鮫鰐の淵。報國の丹心獨力を嗟き。回天の事業空拳を奈ん。數行の紅淚兩行の字。櫻花に附與して九天に奏す。

(大意) 千山萬嶽を踏破して君がみあごを慕ふてはきたものゝ鸞輿は今日はその邊におとまりになつてゐることであらう。ナニ院の庄とナ。よし／＼それではと云つて雨をしのいで簑笠姿で用心きびしい行在の庭にしのみこみこゝかそこかと刃を提げつ鮫鰐の淵にもたどへつべき恐ろしい中を探りまはつた。嗚呼此我は報國の丹心燃わて火の如きものがあるけれども志ざすところは回天の事業に在つて

到底獨力空拳を以て今急にどうすることも出来ない。紅淚滴々折からの雨よりしげくせめてはかくてあることを上聞に達しやうと櫻の株にことづけて二行の詩句を書きとめた。

本能寺

頼山陽

本能寺溝深幾尺。

吾就大事在今夕。

葵粽在手併葵食。

四簷梅雨天如墨。

老阪西去備中道。

揚鞭東指天猶早。

吾敵正在本能寺。

敵在備中汝能備。

(譯) 本能寺溝の深さ幾尺ぞ。吾が大事を就すは今夕に在り。葵粽手にあり葵を併せて食ふ。四簷の梅雨天墨の如し。老阪西に去れば備中の道。鞭をあげて東を指せば天猶早し。吾が敵は正に本能寺に在り。敵は備中に在り汝よく備へよ。

(大意) 明智光秀が本能寺に在る主君織田信長を弑せんとする前夜の光景を寫したるもの。大事を企てて舉止おのづこおちつかぬさまをよくあらはしてゐる。

光秀茶人紹巴に問ふて曰はく「本能寺の堀はどれほど深いか」と。彼心に思へらく我大事を爲すは今夜中のことだど。折から人民が獻上したちまきを手にしてゐたが軍略を思ひめぐらすのあまりつひ笹と一しよに食つてしまつた。「甲乙」と老阪から西へ出れば直ぐ備中街道だなど云ふかと思へば愈々馬



にまたがつて「進め」と云ふ方向は東であつて未だ夜の幕の深く立罩めた一角を指して「我敵は正しく本能寺にあるのだ。アイヤさうではない備中にもゐるんだ。貴様たちしつかりやつてくれよ……。」

逸 題

篠原國幹

飲馬鳴綠果何日。一朝事去壯圖違。此間誰解英雄恨。

袖手春風詠落花。

〔譯〕馬を鴨綠に飲ふ果して何れの日ぞ。一朝事去つて壯圖違ふ。此間誰か解す英雄の恨み。手を袖にして春風落花を詠す。

〔大意〕馬を朝鮮に乗り入るゝの日は果していつ到來することだらう。一朝事違つて我壯圖水泡となるあり此恨み何ぞ碌々小人輩の知るところならん。手を袖にして春風の前に落花を詠じて懷をやつてゐる。

幽 四 詩

藤田東湖

三決死矣而不死。二十五回渡刀水。五乞閑地不得閑。

三十九年七處徙。邦家隆替非偶然。人生得失豈徒爾。

自驚塵垢盈皮膚。猶餘忠義填骨髓。嫖姚定遠不可期。

丘明馬遷空自企。苟明大義正人心。皇道奚患不興起。

斯心奮發誓神明。古人有云斃而已。

〔譯〕三たび死を決して而かも死せず。二十五回刀水を渡る。五たび閑地を乞ふて閑を得ず。三十九年七處に徙る。邦家の隆替偶然に非ず。人生の得失豈徒爾ならんや。自ら驚く塵垢皮膚に盈つるを。猶忠義を餘して骨髓に填つ。嫖姚定遠期すべからず。丘明馬遷空しく自ら企つ。苟くも大義を明にして人心を正さば。皇道奚を興起せざるを思へん。斯の心奮發神明に誓ふ。古人言ふあり斃れて己むと

〔大意〕自分は三度まで死を決して三度ながら死を遂げなかつた。其間王事に奔走して利根川を渡る。こと二十五回。五たび退隱を乞へども此も許されず。凡を生れて以來三十有九年その居を移すこと七ヶ處斯く東奔西走しばらくも席の暖まる隙なき所以のものは皆君國を思へばである。國家の將に榮ねんとするや必ずその由つて來るところあり。邦家の盛衰は偶然に生ずるものではない。人生境遇の順逆も亦無理由で生ずるものではない。自分が斯様に逆境に立つてゐるのも亦相當の理由がある(即君國の爲に犠牲になると云

ふ)とは云へ我れながら驚かるゝことには塵や垢が皮膚一面に掩はれてかはればかはる姿かな……。  
だけど猶も忠義の心は内に燃わて骨に髓に通り満ちてゐる。古へ漢の嫫婁や定遠が出てすばらしいは  
たらきをしたが自分にはとても彼等の足あとはふめない。せめては左丘明や司馬遷の流にならつて正  
しい史筆でも揮ひたいと出来ない相談だけれども自分では心中窃に之を期してゐる。  
此際唯よく大義を明かにして人心を正しくすることが出来さへすれば皇道が照らないなど言ふて心配  
する必要は少しもないのである。古人言はずや斃れて後已むと。さうぢや自分も此覺悟で盡さう。自  
分で決心したゞけではおぼつかない。更に之を神明に誓はふ。

自 警 箴

實 茶 翁

夢幻生涯夢幻居。

了知幻化絶親疎。

貪榮萬乘猶無足。

退歩一瓢還有餘。

無事心頭情自寂。

無心事上境都如。

吾儕苟得體此意。

廓落胸襟同大虛。

(譯) 夢幻の生涯夢幻の居。幻化を了知して親疎を絶す。榮を貪らば萬乘猶足る無し。歩を退かば一  
瓢も還餘りあり。事心頭に無くして情自ら寂し。心事上に無くして境都て如し。吾儕苟くも此意を體  
することを得て。廓落たる胸襟大虚に同じ。

(大意) 夢の浮世に夢の庵。親疎の區別何かせん。欲を云ふなら萬乘の高位も尙足れりとすべからず  
足ることを知らば一瓢の飲も尙餘りあり。心を静寂の境において事物の煩をさく。余幸に此意を躰得  
し胸中ひろくきつぱりとして宇宙と同化することが出来た。

舟至由良港

吉 田 松 隆

回首蒼茫浪速城。

篷窓又聽杜鵑聲。

丹心一片人知否。

不夢家鄉夢帝鄉。

(譯) 首を回らせば蒼茫たり浪速城。篷窓又聽く杜鵑の聲。丹心一片人知るや否や。家郷を夢みすし  
て帝郷を夢む。

(大意) 我のる船は今しも由良の港に入らうとしてゐる。首をめぐらしてかへりみれば浪華は遠にへ  
だたつて大阪城のあたり茫々として眺めおぼろである。折しも名のるほどぎす船の窓べをかすめて  
彼方に響く。あゝ汝杜鵑よ。汝は故郷を慕ひて啼けど我は朝廷を思ふて泣くぞ。一片の丹心報國の心  
知る人ありや。はたなしや。それはともかく此我は夜毎々々の夢路まで故郷は見ずに帝都を見るぞよ

桂林莊雜咏示諸生

管 茶 山

休道他郷多苦辛。

同胞有友自相親。

柴扉曉出霜如雪。

君汲泉流我拾薪。

(譯) 道ふことを休めよ他郷苦辛多し。同胞友あり自ら相親しむ。柴扉曉に出で、霜雪の如し。君は泉流を汲み我は薪を拾はん。

(大意) 諸生道ふことを止めよ。旅の空といふものは苦辛の多いものだ。其中氣の合ふたものは互ひに兄弟同様の親交を結ぶのだから柴の扉の朝戸出で雪なす霜をふんで君が水を汲めば僕は薪を拾つて家族的に面白く生活をしやうぞ。

過二櫻井驛址一

頼山陽

山崎西去櫻井驛。	傳是楠公訣子處。	林際東指金剛山。
堤樹依稀河内路。	想見警報交奔馳。	促驅羸羊餒獐虎。
問耕拒奴織拒婢。	國論顛倒君不悟。	驛門立馬臨路歧。
遣訓丁寧垂髻兒。	從騎肅聽皆含淚。	兒伏不去叱起之。
西望武庫賊氛惡。	回首幾度覩去旗。	既殲全躬支傾覆。
爲君更貽一塊肉。	剪屠空復膏賊鋒。	頗似祁山與錦竹。

脈々熱血灑國難。

大澗東西野竹綠。

雄志難繼空逝水。

大鬼小鬼相望哭。

(譯) 山崎西に去れば櫻井驛。傳ふ是れ楠公の子に訣るゝの處。林際東を指せば金剛山。堤樹依稀たり河内の路。想ひ見る警報交々奔馳するを。羸羊を促驅して獐虎に餓はす。耕を問ふて奴を拒み織るに婢を拒む。國論顛倒君悟らず。驛門馬を立てて路歧に臨み。遣訓丁寧垂髻兒。從騎肅聽皆淚を含む兒伏して去らず叱して之を起たしむ。西武庫を望めば賊氛惡し。首を回らせば幾度か去旗を觀る。既に全躬を殲して傾覆を支ふ。君が爲に更に貽る一塊の肉。剪屠空しく復賊鋒に膏す。頗る祁山と綿竹とに似たり。脈々熱血國難に灑ぐ。大澗東西野竹綠なり。雄志繼ぎ難し空逝の水。大鬼小鬼相望んで哭す。

(解) 祁山綿竹。蜀の諸葛亮が魏を打つて祁山を圍んだ。又その子の膽も魏將の鄧艾と綿竹に戦つて子尙と共に討死した。それを指す。

(大意) 山崎を出て行くこと數里。その小驛を櫻井驛と云ふ。言傳へによれば是は楠公が我子に訣れたところだと。又山崎の木立から東を見るとそこに聳わてゐるのは即金剛山である。其下並木ほのぼのとつづいて河内路がある。あゝその昔賊勢日々に猖獗なるを傳へてくるのに廟議は耕を奴にとは

す織を婢に問はず。軍の道を武將にとはす。つまらぬなま公卿の云ふことを聞いて主上はその非を悟り給はず。事已にここに至る。此を最後の出陣と思ひ定めてことばの花も櫻井の驛に乗駒とまらせ我子正行をかへりみて色々因果をふくめて言ひおきしたので並みある將士もしどごに戎衣の袖を絞つた。正行も父の子だけあつて「御最期までもお供」と身動きもししない……。それをば無理に遣りかへしてさて西の方六甲のあたりを見れば雲霞の如き賊兵は陸に充ち満ちてゐる。ふりかへつて味方を見れば鳥合の衆は賊の旗色に動いて一人へり二人へりしてゐる。まよ我身はもとより君國の爲に犠牲にするつもりだつたのだと諸葛孔明が祁山の思ひして奮戦激闘遂にはあへなくも淡河原の夕露と消れた。あゝそのあとよ。此野此川淀川瑠璃を悴いて數十里。芳艸依然として幾春毎に茂れども雄魂杳々逝いて歸らず。迷鬼夜毎に哭して啾々又啾々。

常磐雪行圖

梁川星巖

雪壓笠檐風捲袂。呱呱覓乳若爲情。他年鐵枵峯頭險。叱咤三軍是此聲。

(譯) 雪は笠檐を壓し風は袂を捲く。呱呱乳を覓む若爲の情ぞ。他年鐵枵峯頭の險。三軍を叱咤するは是れ此の聲。

(大意) 平治の軍に義朝方のまげとなり義朝の妾常磐は今若乙若牛若三人をつれて青葉の間に落ちて行つたが折しもふりくる白雪は笠をおさへ袂をまいて身を切るばかり寒いのに懐にした牛若はオギャオギャと乳を求めてゐる。あゝオギャ／＼の聲こそは他日鐵枵峯頭(義經がさかおとしにした鶴越のあるところ)三軍を指揮して平家を屋島に追ひはらうたあの叱咤の聲のめばわであつたのだ。

走筆作詩

黑澤忠三郎

呼狂呼俗任他評。幾歲妖雲一旦晴。正是櫻花好時節。櫻田門外血櫻如櫻。

(譯) 狂と呼ばれ俗と呼ばるゝも他評に任せん。幾歳の妖雲一旦晴る。正に是れ櫻花の好時節。櫻田門外血櫻の如し。

(大意) 此は水戸の志士の一人たる黒澤忠三郎が直弼を要撃した時の心もちを吟じたものである。人は狂と言はうが賊と言はうがそんなことには頓着せぬ。かうして今まで永くから國家にわざはひした人間をたふしたから心にかゝるむら雲がすつきり晴れたと云ふものだ。時は此れ三月正に櫻花の咲かうと云ふ好時節に花ならぬ櫻田の門外に時ならぬ血しほの花がちつて櫻のやうだ。あゝ何たる痛快なことであらうと云ふことで作者が袴のそばで血刀を拭つて快心の笑みをもらしてゐる相貌みるが如き

詩である。

無題

村上佛山

落花紛紛雪紛紛。踏雪蹴花伏兵起。白盡斬取大臣頭。

噫嘻時事可知耳。落花紛紛雪紛々。或恐天下多事兆於此。

(譯) 落花紛々雪紛々。雪を踏み花を蹴りて伏兵起る。白盡斬り取る大臣の頭。噫嘻時事知るべき耳。落花紛々雪紛々。或は恐る天下の多事此に兆するを。

(大意) 此は櫻田門の變の壯烈を謳つたもの。

萬延元年三月三日時ならぬ雪は花と散りしく櫻田門に待ちまうけたる十六士。スハと云ふ間もあらばこそ。矢庭に斬りとる大臣の頭……。雪は依然として紛々と降り亂れてゐる……。あゝ世の中はかうした亂脈になつてしまつた。或は此が天下騷亂の兆ではあるまいかとそれが何より懸念にたへない。

(二) 支那の部

怨歌行

班婕妤好

新裂齊紈素。皎潔如霜雪。裁爲合歡扇。團々似明月。

出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼颼斂炎熱。

棄捐篋笥中。恩情中道絕。

(譯) 新に齊の紈素を裂く。皎潔霜雪の如し。裁して合歡の扇と爲す。團々明月に似たり。君が懷袖に出入し。動搖微風發す。常に恐る秋節至り。涼颼炎熱を斂むることを。篋笥中に棄捐して。恩情中道に絶ゆ。

(大意) 班婕妤は才色兼備の婦人で漢の成帝の後宮に入りて一時非常に寵愛を受けたが後に他の姫の嫉みを受け卻けられて長信宮に淋しい月日を送つた。此詩はその退き際の述懐である。

齊の白絹雪より白きを新に裁つて閨の扇にすると形まるくとして月の如し。一たび煽げば得も云はぬ涼風發して君が懷に入つて大さう御意に召したのに月にむら雲花には嵐秋風一たび訪れて炎熱あとを斂むれば君が情けも秋立ちて扇は篋底に妾は長信宮に退けらるゝやうな事になつた。こんなこと

になりはしないかと兼て氣づかつてゐたことなのだがどう／＼その日が来た。

范 晉

戒爾勿嗜酒。狂藥非佳味。能移謹厚性。化爲凶險類。  
古今傾敗歷々皆可記。

(譯) 爾を戒しむ酒を嗜む勿れ。狂藥にして佳味に非ず。能く謹厚の性を移して。化して凶險の類となす。古今の傾敗歴々として皆記すべし。

(大意) お前にかたくとめておくが酒に耽つてはいけない。酒は決して眞の佳味ではない。あれは一種の氣ちがひ藥だ。之が爲には平素つましい性質のものまでも凶險な人間になつてしまふ。古今人士の酒が禍しての失敗は一々明瞭に數へたてることが出来る。

蘇 東 坡

入峽喜巉巖。出峽愛平曠。吾心淡無累。過境即安暢。

(譯) 峽に入つては巉巖を喜び。峽を出でては平曠を愛す。吾心淡々として累なし。境を過つて即ち安暢なり。

(大意) 山峽に入つては巉巖を愛し境を出ては平野の廣々として空しきをよろこぶ。斯の如く其境に

つれてその心を光明方面に逍遙せしむることが出来るから至るところ自得の餘裕がある。

絶 句

杜 甫

江碧鳥逾白。山青花欲然。今春看又過。何日是歸年。

(譯) 江碧にして鳥逾白く。山青うして花然ると欲す。今春看す又過ぐ。何れの日か是れ歸年。

(大意) 江流のあをに配して白鳥ますます／＼白く山は綠葉を着て花は燃ゆるばかりに紅色焔爛。あゝ今年も亦みすみすあらぬ異國で暮らしていつになつたら故國の春に出あへることやら轉轉不安と郷愁の至に堪へない。

春 望

杜 甫

國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。  
烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。

(譯) 國は破れて山河あり。城は春にして草木深し。時に感じて花涙を濺ぎ。別を恨んで鳥心を驚かす。烽火三月に連り。家書萬金に抵る。白頭搔けば更に短く。渾べて簪に勝へざらんと欲す。

(大意) 唐の安祿山叛を謀つて宮廷を攻め玄宗蒙塵して馬嵬が原にさまよひ給ふ。愛國詩人杜甫はそのあつを弔して此五律を悲歌した。

其 七 漢 詩

二五三

ふるき都を来て見れば國は破れて山河は依然として聳ね流れしてゐる。折節春のことゝて草木深くしげれども時に感しては無心の花も涙あり哀別の恨みには鳥も悲調になき見るもの聞くもの悲痛に得堪へぬものがある。偕も軍が始まつてから早や三月故郷のたより杳として來らずと云ふ有様なるよりたまさか得た消息の値其貴きこと萬金とも謂ひつべし。國を憂へて身は老いつ。白髪の頭かけば急に毛が少くなつたやうな氣がしてこれでは到底簪すら支へることが出來なからうと思ふ程自分は時勢について嘆いてゐる。

易水送別

駱賓王

此地別燕丹。壯士髮衝冠。昔時人已歿。今日水猶寒。

〔譯〕 此地燕丹に別る。壯士髮冠を衝く。昔時人已に歿し。今日水猶寒し。

〔解〕 易水送別。昔此易水で悲壯の訣別をした壯士の心事をよんだもの。

燕丹。燕の太子丹のこと。彼秦王を怨みて百方報復を謀り遂に決死の壯士荆軻を刺客とし往いて秦王を刺さしむ。

壯士。荆軻のこと。彼が燕丹の依頼を受けて燕を立つ時には燕國の諸臣皆白帽白衣を以て之を見送り國境易水のほとりに至つて別れの盃をあげた。荆軻慨然として起つて歌ふて「風蕭々として易水寒し。壯

士一たび去つて亦かへらず。」と云ふ一座頭髮慄然として冠をつくの趣があつた。

〔大意〕 此易水の地は昔壯士荆軻が怒髮冠を衝いて悲壯の詩を吟じて燕丹と別れたところである。爾來星霜幾百年春風秋雨幾たびか経れども易水の水は猶そのかみの名残をこめておもひなしにや何となく身にしみるやうな寒さを覺ゆる。

南樓望

盧鴻

去國三巴遠。登樓萬里春。傷心江上客。不是故鄉人。

〔譯〕 國を去つて三巴遠し。樓に登る萬里の春。心を傷ましむ江上の客。是れ故郷の人にあらず。

〔解〕 南樓望。三巴樓上故國を望んで惆悵するの意。三巴。閬水と白水とが流れて三たび曲つて巴の字なりになつてゐるところを三巴とよ。即ち蜀の地のこと。

〔大意〕 故國を去つて遠く三巴の地にあり。樓に登つて萬里一色の春に見とるれば江上の客江岸の花皆故國の人故國の花と様變りて萬里異郷の遊子をして天涯放浪の悲しみに得堪へぬものあらしめる。

四時

陶淵明

春水滿四澤。夏雲多奇峯。秋月揚明輝。冬嶺秀孤松。

〔譯〕 春水四澤に滿ち。夏雲奇峰多し。秋月明輝をあげ。冬嶺孤松秀づ。

其七 漢詩

二五五

〔大意〕 四季をりくゝの景物の推移をあげたもので春はなごかの水が四方の澤邊に満ちわたり夏は種々なる雲の峯秋は輝く月の影冬がれ立てる一つ松何れも吾人の心目をよろこばしめる。

春 曉

孟 浩 然

春眠不覺曉。處處聞啼鳥。夜來風雨聲。花落知多少。

〔譯〕 春眠曉を覺せず。處々啼鳥を聞く。夜來風雨の聲。花落つるこ知りんぬ多少ぞ。

〔大意〕 夢さめやらぬ短か夜の曉告ぐる鶯に「オヤもう夜があげたのか。さても夜前は大分の雨風であつたが今朝はきつと落花繽紛として地にしいてゐることだらう。」と聞にして庭前の落花を想像したもの。

題三袁氏別業一

賀 知 章

主人不相識。偶坐爲林泉。莫謾愁沽酒。囊中自有錢。

〔譯〕 主人相識らず。偶坐林泉の爲なり。謾に酒を沽ふことを愁ふること莫れ。囊中自ら錢有り。

〔大意〕 袁君はもとより我が知人ではないけれども風流には親疎を問はない。今偶然にやつてきて對坐するのも林泉を愛する風流心からだ。ナニ酒がないと。それは御心配には及ばぬ。小生少々の酒手位は用意がござる。

靜 夜 思

李 白

牀前看月光。疑是地上霜。舉頭望山月。低頭思故鄉。

〔譯〕 牀前月光を見る。疑ふらくは是地上の霜かと。頭をあげて山月を望み。頭を低れて故郷を思ふ

遊 子 吟

孟 郊

慈母手中絲。遊子身上衣。臨行密密縫。意恐遲々歸。難將寸草心。報得三春輝。

〔譯〕 慈母手中の絲。遊子身上の衣。行くに臨んで密々縫ふ。意に恐る遅々として歸り。寸草の心を

將つて。三春の輝に報じ得難きを。

慈 烏 夜 啼

白 樂 天

慈烏失其母。啞々吐哀音。晝夜不飛去。經年守故林。夜々夜半啼。聞者爲沾襟。聲中如告訴。未盡反哺心。百鳥豈無母。爾獨哀怨深。應是母慈重。使爾悲不任。

其 七 漢 詩

二五七



昔有吳起者。母沒喪不臨。哀哉若此輩。其心不如禽。  
慈鳥亦慈鳥。鳥中之曾參。

(譯) 慈鳥其母を失ふ。啞々として哀音を吐く。晝夜飛び去らず。年を経て故林を守る。夜々夜半啼く。聞く者爲に襟を沾はす。聲中告訴するが如し。未だ反哺の心を盡さず。百鳥豈母無からんや。爾獨り哀怨深し。應に是れ母の慈重くして。爾が悲しみをして任へざらしむるなるべし。昔吳起なるものあり。母没して喪に臨まず。哀しい哉此の若きの輩。其心禽に如かず。慈鳥亦慈鳥。鳥中の曾參か。(大意) 子鳥が其母を失つた。カア／＼と哀しい音にないてゐる。晝夜樹上を去らない。永年もどの林にゐて毎夜夜半頃に啼いて聞く者は爲に涙を落す。其聲何だか訴ふるところあるが如し。「わたしはまだ六十日哺養してもらつた恩返しが濟んでゐません。」と云つた風……。あゝ百鳥何れも其親ありと雖も獨子鳥の悲しみ衆鳥に超ゆる所以のものは母鳥の撫育周到なるによる。昔は吳起其母の死に目にあはなかつたので師匠の曾參は之を卻けた。こんなものは禽にも劣つた義理知らず。あゝ鳥よ鳥。汝はしも鳥類に於ける曾參の流か。

人生觀

杜牧

嵩山高萬尺。洛水流千秋。往事不可問。天地究悠々。

四百年炎漢。三十代宗周。二三里遺堵。八九所高丘。  
人生一世間。何必多悲愁。

(譯) 嵩山高さ萬尺。洛水流るゝこと千秋。往事問ふべからず。天地究めて悠々たり。四百年の炎漢も。三十代の宗周も。二三里の遺堵のみ。八九所の高丘のみ。人生一生の間。何ぞ必ずしも多く悲愁せん。

(大意) 嵩山の高さ洛水の長さ悠々たる天地限りなし。生を此間に稟けて精を萬物に抜くと雖も渺々たる蒼海の一粟何ぞ云ふに足らん。炎漢よく四百年の社稷を保てりと雖も宗周よく三十世の覇を維持せしと雖も其遺すところ僅に二三里の墓地。八九所の高丘のみ。斯の須叟の人生を何とて徒に悲觀しやうぞ。悠々自適逍遙享樂するに限る。

廣長舌

蘇軾

世尊見大神力。出廣長舌清淨法身。法華經。溪聲便是廣長舌。  
山色寧非清淨身。

(譯) 世尊大神力を見はし。廣長舌清淨法身を出す。溪聲は便ち是れ廣長舌。山色は寧んぞ清淨の身に非ざらん。

(大意) 法華經の中に「世尊が大神力をあらはして廣長舌と清淨法身とをあらはした。」とあるが所謂世尊の廣長舌とは彼の溪流の潺湲たるを云ひ又清淨法身とは彼の山容の翠綠透徹たるをさしたものでありませう。

長 歌 行

無 名 氏

青青園中葵。朝露待日晞。陽春布德澤。萬物生光輝。  
常恐秋節至。焜黃華葉衰。白川東到海。何時復西歸。  
少壯不努力。老大徒傷悲。

(譯) 青々たり園中の葵。朝露日晞を待つ。陽春德澤を布き。萬物光輝を生ず。常に恐る秋節至り。

焜黃華葉衰ふるを。白川東して海に到れば。何れの時か復西に歸らん。少壯にして努力せずんば。老大徒に傷悲せん。

(大意) いき／＼とした園生の葵朝露おいて日影もうら／＼か陽春の德澤普及するところ萬物盡く光輝ありと雖も秋節一たび來つて華葉離落の憂あり。白川一たび東流せば長へにもこの泉に歸り難きが如く少壯一たび悠悠逸樂の年をふれば老後如何程悔ゆとも詮なし。

中 隱

白 居 易

大隱住朝市。小隱入邱樊。邱樊太冷落。朝市太囂喧。  
不如作中隱。隱在留司官。似出復似處。非忙亦非閑。  
不勞心與力。又免飢與寒。終歲無公事。隨月有俸錢。  
君若好登臨。城南有秋山。君若愛遊蕩。城東有春園。  
君若欲一醉。時出赴賓筵。洛中多君子。可以恣歡言。  
君若欲高臥。但自深掩門。亦無車馬客。造次到門前。  
人生處一世。其道難兩全。賤即苦凍餒。貴則多憂患。  
唯此中隱士。致身吉且安。窮通與豐約。正在四者間。

(譯) 大隱は朝市に住み。小隱は邱樊に入る。邱樊は太だ冷落。朝市は太だ囂喧。如かず中隱となり隠れて留司の官に在るには。出づるに似たり復處るに似たり。忙に非ず亦閑にあらず。心と力とを勞せず。又飢と寒とを免る。終歲公事無く。月に隨つて俸錢あり。君若し登臨を好まば。城南に秋山あり。君若し遊蕩を愛せば。城東に春園あり。君若し一醉を欲せば。時に出で、賓筵に赴け。洛中には君子多し。以て歡言を恣にすべし。君若し高臥を欲せば。但自ら深く門を掩へ。亦車馬の客なし。造次

門前に到る。人生一世に處す。其道兩全なり難し。賤しければ即凍餒に苦しみ。貴ければ即憂患多し。唯此中隱の士。身を致すこと吉にして且つ安し。窮通と豊約と。正に四者の間に在り。

(大意) 眞の隱者と云ふのは世俗に交つても心は世俗を超越した人である。浮世離れた山のおく(邱樊)に住む人は隱者としては先初步である。山はさびしいし人里はやかましい。まづその中をとつて留守居役位になるが一番よからう。朝に仕へるでもなく野にゐるでもなく忙しいこともなくさりとて暇で困ると云ふ程でもなくかつれもせねばこゝろもしない。年中きまつた職務なくしてきまつた俸給がもらへる。山あがりをして眺望を恣にしたければ城南秋山の好景がある。若し平地で遊樂を味ひたければ城東に春園もあり酒がのみたければ賓客の座敷に招かれて行くがよい。都には可なり話せる士君子連もゐる。若し世人に接するのが厭で枕を高うして眠らうと思へば自分の屋敷の戸をしめるがよい。さすれば車馬にのつた客がガヤ／＼と訪れてくるきづかひはない。人間の世わたりはさう單純なる一道に善いことすくめと云ふわけには行かぬ。賤しかつたら凍わたり飢ゑたりの苦しみがあり貴ければ又色々心配がある。只此中隱のものは身に障りがなく且心も安らかである。困難に陥ると出世して高位に登ると富んで豊になると貧しくつてつゝまやかなと四つの中間を得て吉にして且安いものは實に中隱の士である。

離

別

陸

管

望

丈夫非無淚。不灑離別間。仗劍對樽酒。恥爲遊子顏。

蝮蛇一螫手。壯士疾解腕。所志在功名。離別何足論。

(譯) 丈夫涙無きにあらず。離別の間に灑がず。劍に仗つて樽酒に對し。遊子の顔を爲すを恥づ。蝮蛇一たび手を螫さば。壯士疾に腕を解く。志す所功名に在り。離別何ぞ論するに足らん。

(大意) 男子だつて木でも石でもない。矢張血もあり涙もあるが唯離別の時なんか女々しく泣かないまでのことだ。劍をついて樽酒に對するからは意氣八紘を呑むの趣があつて通常旅行く人の子のやうに泣いたり名残を、しんだりほしない。まむしが一度手をさいたならばそんな手は切り捨て、しまふと云ふ程の剛健果斷が大事である。我志すところ功名にあり。離苦何ぞかなしむに足らん。

子

夜

李

白

長安一片月。萬戶擣衣聲。秋風吹不盡。總是玉關情。

何日平胡虜。良人罷遠征。

(譯) 長安一片の月。萬戸衣を擣つ聲。秋風吹いて盡さず。總べて是れ玉關の情。何れの日か胡虜

を平らげて。良人遠征を熊めん。

(大意) 長安の町月さわて遠近々々打つ砧秋風たわすおとづれて夫の君のみす玉關のあたりいかにと氣づかはしめる。さても戀しの君は萬里遠征の長途に就いていつ胡虜どもを平らげて無事御歸國の事ぢややら。月すむ夜半風吹く夜一入それが氣づかはれる。

述 懷

魏 徵

中原還逐鹿。投筆事戎軒。縱橫計不就。慷慨志猶存。  
仗策謁天子。驅馬出關門。請纓繫南粵。憑軾下東藩。  
鬱紆陟高岫。出沒望平原。古木鳴寒鳥。空山啼夜猿。  
既傷千里目。還驚九折魂。豈不憚艱險。深懷國士恩。  
季布無二諾。侯嬴重一言。人生感意氣。功名誰復論。

(譯) 中原還鹿を逐ふ。筆を投じて戎軒を事とす。縱橫計就らず。慷慨志なほ存す。仗策天子に謁し馬を驅つて關門を出づ。纓を南粵にかけんことを請ひ。軾に憑つて東藩に下る。鬱紆として高岫にのぼり。出沒して平原を望む。古木寒鳥鳴き。空山夜猿啼く。既に千里の目を傷ましめ。還九折の魂を

驚かす。豈艱險を憚らざらんや。深く國士の恩を懷へばなり。季布二諾なく。侯嬴一言を重んず。人生意氣に感ず。功名誰か復論せん。

(大意) 中原又もや亂れたち劍を筆にとりかへて毎日兵馬倥傯の間に暮す。作戰策成らずと雖も一片報國の丹心燃わて火の如く策に仗つて天子に謁し馬を驅つて關所を越ぬ南の方粵に下り又更に車を馳せて東藩に下る。その間或は鬱紆として高嶺の頂に攀ち又茫漠の野にさまよひ寒鳥の古木になくを聞き夜猿の空に叫ぶに驚き一望千里異境の空見るから眼を痛ましめ近くて遠きつゝ折に又魂を驚かしむるなど其辛苦艱難は中々一通ではない。尤我とても我身の可愛い位は知つてゐるけれども上太宗皇帝の御信任あつくして國士を以て遇せらるゝその知遇の恩に身を捨て、昔の季布侯嬴(共に昔支那で大變然諾を重んじた任侠の人)の徳を慕つて斯は東奔西走の人となつたのである。由來人間意氣に感ず。功名の成不成の如きは事抑々些末に過ぎない。意氣投合と云ふことが第一必要である。

清 夜 吟

邵 子

月到天心處。風來水面時。一般清意味。料得少人知。

(譯) 月天心に到るの處。風水面に來るの時。一般清意の味。料り得たり人の知ること少きを。

(大意) 月の天心に澄みわたる時風の水面にそよぐの時是を當に清新の極致と謂ふべきであるが這の

間の旨趣を體せるもの世間果して幾人あることであらう。

夜 送 趙 縱

楊

炯

趙氏連城壁。由來天下傳。送君還舊府。明月滿前川。

(譯) 趙氏連城の壁。由來天下に傳ふ。君が舊府に還るを送れば。明月前川に滿つ。

(解) 趙氏連城壁。戰國時代趙の國に平和の壁と云ふ寶玉があつたのを秦の昭王が十五の城を連ねて之と交換してくれよと申込んだ。連城の壁とは此をさしたものである。

(大意) 趙氏の連城の壁に比すべき御身が故都に歸られるのを送ると折しも壁ならぬ月が川の面にうつて實に美事である。

友人會宿

李 太 白

滌蕩千古愁。留連百壺飲。良宵宜且談。皓月未能寢。  
醉來臥空山。天地即衾枕。

(譯) 滌蕩たる千古の愁ひ。留連す百壺の飲。良宵且らく談すべし。皓月未だ寢ぬる能はず。醉ひ來つて空山に臥す。天地は即ち衾枕なり。

(大意) 悠々として盡さない永久の憂ひを抱きながら百樽の酒を飲みつけして今宵皓月寢るのも心な業なれば上戸の胸襟を開いて一つ大に語らう。醉へば空山にゴロリとなつて雲の蒲團に地の枕。

正 氣 歌

文 天 祥

天地有正氣。	雜然賦流形。	下則爲河嶽。	上則爲日星。
於人曰浩然。	沛乎塞蒼溟。	皇路當清夷。	含和吐明廷。
時窮節乃見。	一一垂丹青。	在齊太史簡。	在晉董狐筆。
在秦張良椎。	在漢蘇武節。	爲嚴將軍頭。	爲嵇侍中血。
爲張睢陽齒。	爲顏常山舌。	或爲遼東帽。	清操厲冰雪。
或爲出師表。	鬼神泣壯烈。	或爲渡江楫。	慷慨吞胡羯。
或爲擊賊笏。	逆豎頭破裂。	是氣所磅礴。	凜冽萬古存。
當其貫日月。	生死安足論。	地維賴以立。	天柱賴以尊。
三綱實繫命。	道義爲之根。	嗟予遘陽九。	隸也實不力。

其 七 漢 詩

楚囚纓其冠。傳車送窮北。鼎鑊甘如飴。求之不可得。  
 陰房闕鬼火。春院闕天黑。牛驥同一卓。鷄栖鳳凰食。  
 一朝蒙霧露。分作溝中瘠。如此再寒暑。百沴自辟易。  
 哀哉沮洳場。爲我安樂國。豈有他繆巧。陰陽不能賊。  
 顧此耿耿在。仰視浮雲白。悠悠我心憂。蒼天曷有極。  
 哲人日已遠。典刑在宿昔。風簷展書讀。古道照顏色。

(譯) 天地正氣あり。雜然として流形に賦す。下は則河嶽となり。上は則ち日星となる。人に於ては浩然と曰ひ。沛乎として蒼溟に塞がる。皇路清夷に當り。和を含んで明廷に吐く。時窮して節乃ち見はる。一々丹青に垂る。齊に在つては太史が節。晉に在つては董孤の筆。秦に在つて張良が椎。漢に在つては蘇武の節。嚴將軍の頭となり。嵇侍中の血となり。張睢陽の齒となり。顏常山の舌となり。或は遼東の帽となり。清操氷雪よりも厲し。或は出師の表となり。鬼神壯烈に泣く。或は江を渡る楫となり。慷慨胡羯を呑む。或は賊を撃つ笏となり。逆豎頭破裂す。是の氣の磅礴するところ。凜冽として萬古存す。その日月を貫くに當りては。生死安ぞ論するに足らん。地維頼つて以て立ち。天柱頼

つて以て尊し。三綱實に命を繋ぐ。道義之が根と爲る。嗟予陽九に遘ふ。隸や實に力めず。楚囚其冠を纓す。傳車窮北に送らる。鼎鑊甘きこと飴の如し。之を求めて得べからず。陰房鬼火闕しく。春院天黒に闕さず。牛驥一卓を同じふし。鷄栖鳳凰食す。一朝霧露を蒙り。溝中の瘠を作るを分とす。此くの如くにして再び寒暑。百沴自ら辟易す。哀しいかな沮洳の場。我が安樂國と爲る。豈に他の繆巧あらんや。陰陽賊ふこと能はず。此を顧みて耿耿たり。仰いで浮雲の白きを視。悠悠たる我心の憂。蒼天曷ぞ極まりあらん。哲人日已に遠し。典刑宿昔に在り。風簷書を展べて讀めば。古道顏色を照らす。

(解) 太史節。齊の史書官太史は公明正大の筆を揮つて雀抒其君を弑すと書いて雀抒の爲に斬られた董孤筆。晉の史官で趙盾が其君靈公を弑したことを公平に書いたこと。張良椎。張良韓の爲に秦の始皇を博浪沙で槌を投げて殺さうとしたこと。蘇武節。蘇武漢の使として匈奴に行き捕はれて十九年彼の地に牢居し而も少しも節操をかへず。嚴將軍。三國時代劉璋の臣戰敗れて蜀の張飛に捕へられて降參せよと勧められた時「我國には頭を断られる將軍はあつても降參する將軍はない」と云つた。嵇侍中血。晉の惠帝の臣嵇侍中争亂に際し身を以て主君を掩ひ重傷を負うて流血帝衣をけがす。臣下之を洗はうとすると帝のたまはく「是忠臣の血なり洗ふこと勿れ」とこめられた。張睢陽。唐の張巡安祿山の亂に睢陽城を守り皆裂け面に血し齒を噛みて盡く碎いたけれども降らなかつた。顏常山舌。唐の

常山の太守顔杲賊に捕へられ罵つてやまず賊その舌を斷つ。遼東帽。管寧魏の明帝に聘せられながら辭して行かず。黒帽を被り清貧に甘んじて學に耽つた。出師表。蜀の諸葛孔明が出征するに當つて後主に奉つた表で壯烈鬼神を泣かしむる血涙の文章と云はれてゐる。渡江楫。洛陽の祖逖晉の時江を渡つて出征する時江中楫を撃つて「中原を平定しなかつたならば生きて還らない」と誓つた。擊賊笏。唐の德宗の時段秀實反賊朱泚を罵り笏を持つて之を打つた。逆豎。朱泚をさしたるもの。陽九。炎厄のこと陽極まつて陰を生ず。隸也。句左傳にあり。楚の公子の忍びあるきして危難に遭うたときその僕之を罵つて隸也句と云つて之を救つた。恰も我が安宅辨慶に似た故事。之を文天祥自身になぞらへたもの。楚囚。此も自分をたどへて云ふ。左傳成公五年に楚の鐘子發晉にとらへられながら依然として楚の冠をつけてゐた故事による。

(大意) 天地の間正氣なるものがあつてそれが色々形をかへてあらはれる。下に在つては河や山となり上にあつては日月星辰となり人にははれては浩然の氣と云ひ鬱々然として此宇宙に充ち満ちてゐる。皇道正しく四海安穩なれば此氣和みて明廷の秩序となり時窮つて人々の節操となり一々史上に光彩をそへてゐる。即ち齊の太史晉の董孤が正義の筆秦の張良が博浪沙の投椎漢の蘇武が十九年の苦忠或は晉の嚴將軍嵇侍中唐の張巡顏常山魏の管寧の清貧勉學蜀の孔明が出師の表晉の祖逖が渡江の壯

語段秀實が正笏の一喝一として此氣の發揮せられたるものならぬはない。此氣一たび日月を貫くばかりにあらはれんか生死の如きは敢て論するに足らず。天柱も地維も之に依つて立ち三綱五常も之によつて正される。嗚呼自分は今や陽九に遭つて衆力の足りない爲に捕へられて此極北の地につながられて釜いりにせられる位は何とも思はぬ。否寧ろその方が望ましいけれどもさうもならず。却つて土牢の鬼火ものすこき一隅につまらない俘虜と同一扱ひを受けて一朝霧露のおかすあらば肉骨を溝中の泥土に委せざるべからず。悲しい中にも月日はくれて指ふしをれば早や二年。唯此正氣あるが爲に百害却つて彼よりしりごみし此卑濕の地も我には一種の安樂國となつた。さはれ一たび思ひを宋の本國のことに致せば耿々と氣は冴わて眠られず。仰いで浮雲の白きをながめ俯しては悠々たる我心に悲しみを起して蒼天の無窮を考ふ。哲人已に逝いて星霜數千。典型書齋にのこりて荒風すさぶ簷端の前に之を緝けば古道歴々として我忠節を鞭撻するものゝ如し。よし百難はまゝよ。ごうあらうとも我は此正氣に向つて掉尾の發揮者とならうよ。

七 歩 詩

曹 植

煮豆燃豆箕。豆在釜中泣。本是同根生。相煎何太急。

(譯) 豆を煮るに豆箕を燃す。豆は釜中に在りて泣く。本是れ同根より生ず。相煎る何ぞはなはだ急

其 七 漢 詩

なる。

(大意) 魏の曹操に丕と植との兄弟があつて二人仲不和にして丕は屢々植をいじめた。そこで植はこ

の詩をつくつて諷したのである。豆と豆殻とはもと同じ根から出たものなのに豆殻をたいて豆を煎るとはまるで同士討である。御身と私との不和なものも此に似てゐるではありませんか。

秋 浦 歌

李 白

白髮三千丈。緣愁似箇長。不知明鏡裡。何處得秋霜。

(譯) 白髮三千丈。愁ひによつて箇の似く長し。知らず明鏡のうち。何れの處よりか秋霜を得たる

(大意) せちからい浮世のなみにもまれくして明鏡のうちどこからともなくいつともなく秋の霜がふつて今や白髮三千丈嗚呼我も老いたるかな。

雜 詩

陶 淵 明

結廬在人境。而無車馬喧。問君何能爾。心遠地自偏。

採菊東籬下。悠然見南山。山氣日夕佳。飛鳥相與還。

此間有真意。欲辯已忘言。

(譯) 廬を結んで人境に在り。而も車馬の喧無し。君に問ふ何ぞよく爾る。心遠く地自ら偏なり。菊を東籬の下に採り。悠然として南山を見る。山氣日夕佳なり。飛鳥相與に還る。此間真意あり。辯せんと欲して已に言を忘る。

(大意) 浮世はなれぬわびすまゐる而も静かで人はこず。どうしてこんなところに樂居することが出来るんだらうと我と我身に問ふて見ると「心能く人境を離れて物に執せないからだ」と心のごん底に答が響く。毎日の生活は菊を東の籬に採つたりちつと坐つて南山を見る位のこと菊は元來我が愛花なり。南山は氣朝夕とも清らかで殊に夕方群鳥が飛ぶことに倦んで翼を收めて歸るところがよい。これを見る一瞬或る真意の閃きがあるが之を言はうとして早やそのことを忘れてしまった。サテモ氣樂な境涯ではあるわい。

燕 詩。示劉叟。

白 樂 天

叟有愛子。背叟逃去。叟甚悲念之。叟少年時亦嘗如是。故作燕詩以諭之。

梁上有雙燕。翻々雄與雌。銜泥兩椽間。一巢生四兒。

四兒日夜長。索食聲孜孜。青蟲不易捕。黃口無飽期。

觜爪雖欲弊。心力不知疲。須叟千來往。猶恐巢中饑。

其 七 漢 詩

二七三



辛勤三十日。母瘦雛漸肥。喃喃教言語。一一刷毛衣。  
 一旦羽翼成。引上庭樹枝。舉翅不回顧。隨風四散飛。  
 雌雄空中鳴。聲盡呼不歸。却入空巢裏。啾啾終夜悲。  
 燕々爾勿悲。爾當返自思。思爾爲雛日。高飛背母時。  
 當時父母念。今日爾應知。

〔譯〕 叟に愛子あり。叟に背いて逃げ去る。奥甚之を悲しみ念ふ。叟が少年の時亦嘗是の如し。故に燕詩を作つて以て之を諷す。

梁上雙燕あり。翩々たり雄と雌と。泥を銜む兩椽の間。一巢四兒を生ず。四兒日夜に長じ。食を索めて聲孜孜たり。青蟲は捕へ易からず。黃口は飽く期無し。背爪弊れんと欲すと雖。心力疲ることを知らず。須叟にして千たび來往し。猶恐る巢中の餓ゑんことを。辛勤すること三十日。母は瘦せて雛は漸く肥わたり。喃喃として言語を教へ。一々毛衣を刷ふ。一旦羽翼成り。引いて上る庭樹の枝。翅をあげて回顧せず。風に隨つて四に散飛す。雌雄空中に鳴き。聲盡きて呼べども歸らず。却つて空巢の裏に入り。啾啾として終夜悲しむ。燕々爾悲しむこと勿れ。爾當に返つて自ら思ふべし。思ふに爾が雛

たりし日。高く飛んで母に背けるの時。當時の父母が心。今日爾應に知るべし。

〔大意〕 劉叟の愛子親をおいて出奔したので叟は非常に之を悲しんだ。そこで白居易が燕のたとへを以て之をさとしたものである。

梁の上に二羽の燕があつて泥をたるきの間に積んで巢くひ四羽の雛を孵した。チー／＼と云つて食を求めらるものだから親鳥は一所懸命うまさうな青蟲を捕つてきてやるが雛は随分とよく喰ふ。それから燕の言葉を仕込み一々羽をなめてやつて一朝翼が出来て飛びそめに庭を飛ばせるとそれつきり四方へ飛んで行つて見向もしない。親鳥は聲の囁れるまで呼んで見た。が駄目なので巢に歸つて夜通し悲しんでゐた。オイ／＼燕。お前はソンナに悲しむにも當るまい。お前の雛の時に親鳥に同じ思ひをさせたではないか。今になつて思ひ知ればよいのだ。

早發白帝城

李

白

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。

〔譯〕 朝に辭す白帝彩雲の間。千里の江陵一日に還る。兩岸の猿聲啼いて住まらず。輕舟已に過ぐ萬重の山。

(解) 白帝。有名な白帝城のこと。江陵。白帝から三峡を下る水路。萬重山。幾重もかさなつてゐる山  
(大意) ましらの聲を聞きながら矢よりも早き水流に千里の船路も唯一日にして迎ふことが出来た。

蜀道難

李白

噫吁戲危乎高哉。蜀道之難。難於上青天。蠶叢及魚鳧。開國  
何茫然。爾來四萬八千歲。不與秦塞通人煙。西當太白有鳥道。  
可以橫絕峨眉巔。地崩山摧壯士死。然後天梯石棧相鉤連。上  
有六龍回日之高標。下有衝波逆折之回川。黃鶴之飛尚不得遇。  
猿猱欲度愁攀援。青泥何盤々。百步九折縈巖巒。捫參歷井仰脅  
息。以手撫膺坐長歎。問君西遊何時還。畏途巖巖不可攀。但  
見悲鳥號古木。雄飛從雌繞林間。又聞子規啼夜月。愁空山。蜀  
道之難。難於上青天。使人聽此凋朱顏。連峯去天不盈尺。枯  
松倒懸倚絕壁。飛湍瀑流爭喧豗。砢崖轉石萬壑雷。其險也如  
此。嗟爾遠道之人胡爲乎來哉。劍閣崢嶸而崔嵬。一夫當關萬

夫莫開。所守或匪親。化爲狼與豺。朝避猛虎。夕避長蛇。磨  
牙吮血。殺人如麻。錦城雖云樂。不如早還家。蜀道之難。難  
於上青天。側身西望長咨嗟。

(譯) あゝ危いかな高いかな。蜀道の難。青天に上るよりも難し。蠶叢及び魚鳧。國を開くこと何ん  
ぞ茫然たる。爾來四萬八千歲。秦塞と人煙とを通せず。西は太白に當つて鳥道有り。以て峨眉の巔を  
横絶すべし。地は崩れ山は摧けて壯士死し。然後天梯石棧相鉤連す。上に六龍日を回へすの高標有  
り。下に衝波逆折の回川有り。黃鶴の飛ぶ尙ほ遇ふことを得ず。猿猱度らんと欲して攀援を愁ふ。青  
泥何んぞ盤々たる。百步九折して巖巒を縈る。參を捫し井を歷し仰いで脅息す。手を以て膺を撫し坐  
して長歎す。君に問ふ西遊何んの時にか還る。畏途巖巒攀づべからず。但見る悲鳥の古木に號ぶを。  
雄飛び雌に従うて林間を繞るを。又聞く子規夜月に啼いて空山に愁ふるを。蜀道の難きは。青天に上る  
よりも難し。人をして此を聽いて朱顔を凋ばしむ。連峰天を去ること尺に盈たず。枯松倒さまに懸か  
つて絶壁に倚る。飛湍瀑流争うて喧豗す。崖を砢ち石を轉す萬壑の雷。其險やかくの如し。あゝ遠道  
の人なんすれぞ來るや。劍閣崢嶸として而して崔嵬たり。一夫關に當れば萬夫も開くなし。守る所或  
は親に匪ざれば。化して狼と豺とになる。朝に猛虎を避け。夕に長蛇を避く。牙を磨き血を吮ひ。人を

殺すこと麻の如し。錦城は云ふに樂しと雖も。如かず早く家に還らんには。蜀道の難きは。青天に上るよりも難し。身を側て、西望長く咨嗟す。

〔解〕 噫吁戲。蜀の地方の方言で「ああ」と云ふこと。蠶叢魚鳧。共に蜀の古代の王の名。秦塞。秦の邊塞のこと。邊塞とは邊鄙にあるとりの意。太白。山名。鳥道。鳥のみ通ひ得る險阻な路。壯士死。華陽國志に秦の惠王其女五人を蜀王に嫁がしめるとふので蜀の國からも五人の力士が迎へに行つたが途中で大蛇に遇つて之を征伐しやうとして俄に山が崩れて王女も力士も皆死んだとある。鈎連。長くつづく。六龍。日の神の御のりもの。高標。蜀の高山の名で語は高いめじるしの意。青泥。山名。捫參歷井。參も井も共に星の名。脅息。息をころして苦しみ恐るゝ意。畏途。畏るべき峻しき途。子規。ホト、ギス。喧逐。水と石と相撃ちて喧しく音する貌。砮崖。砮は水の巖を撃つ聲。崔嵬。山のけはしい貌。錦城。成都府城の名。咨嗟。なげいてため息をつくこと。

〔大意〕 あゝ危いこと高いこと。蜀道の難路を行くことは。青天に上るよりもむつかしい。蜀を開いたと云ふ蠶叢と魚鳧の事は茫然としてわからないがそれ以來四萬八千年の今に至るまで山の此方の秦とは全く交通は遮断されてゐる。西の方太白山に當つて僅に鳥だけの通へる險路があつてその高いことは蜀の峨眉山の頂上をも横に絶てる程である。秦の惠王の時に地が崩れ山がくだけて五人の壯士が

こゝで横死を遂げ其後棧道を作つてやつこのことで縷のやうな細い道が出来た。更にその險難をくはしく言ふと空には太陽をも後返りせしめるやうな高峯聳む下に屈曲せる激流があつてその險峻の極は飛ぶことに妙を得た黄鶴すらもわたることが出来ない。木のぼりに妙を得たましらすへも攀ぢなやむ程である。殊に有名な青泥嶺は盤々と高くわだかまつてその廣大險阻なことは百歩に九度も曲りくねつて岩山をクル／＼とまはる程だ。で天上の星をさぐりつかみながら登りつゝ息を殺して恐れおのゝき手で胸をさすりながらあゝとため息をつくのである。今君西の方蜀地に遊んだならば果して何れの時にか歸つて來られることであらう。恐ろしい險路やそばだてる巖は到底攀ぶべくもあらず只悲鳴する雌雄鳥が古木にさびび林間にはばたくを見又杜鵑が空山の夜月に名のつてゐるのを聞くだけだ。それこの通り蜀道の難は青天に昇るよりも甚しく人をして唯聞いただけでも元氣のよい紅顔を青ざめさせるには充分だ。實に山々は天を離れること一尺あるなしである。枯松は側にかゝつて絶壁により瀑は争うて鳴り崖を撃ち石を動かして雷かたあめかどばかり。こんな恐しいところにマア遠い他國からくる人の氣が知れぬ。彼の劍閣は險しく高くして若し一夫之を守つたならば萬夫も當るべからざる形勝がある。だれども肝腎の衛卒が君主に心服してゐなかつたならば却つて狼や豺のやうに君主自身を危うくする所以となるであらう。朝夕に猛虎や長蛇を避けても尙牙を磨き血を吮うて人を殺

すこと亂麻の如く骸骨累々として夥しなご云ふばかりなし。だから蜀の成都その者は楽しくてもこんな恐ろしいところがあるんだから寧ろ早く家に還る方が可い。あゝ余は更にくりかへして云はう。蜀道の難は青天に昇るよりも以上だ。そこで實地踏査の勇氣も抜けて唯徒に西の方蜀の地を望んで嘆息するのみである。

長恨歌

白居易

唐の玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛せられたことを吟じたもので甚だ有名であつて又甚だ長いものであるからわけて數節にあげよう。

漢皇重色思傾國。御宇多年求不得。楊家有女初長成。

養在深閨人未識。天生麗質難自棄。

(譯) 漢皇色を重んじて傾國を思ふ。御宇多年求むれども得ず。楊家に女あり初めて長成す。養はれて深閨に在り人未だ識らず。天生の麗質自ら棄て難し。

(大意) 唐の玄宗皇帝は女色を好ませられて多年美人を求められたがまだ此と云ふ程の美人もなかつた。然るに茲に楊氏の家に一人娘があつて深窓の下に生ひ立つて人はまだ知つてゐないけれども持つて生れた美貌は到底知れずにはゐない程かゞやかしい。

一朝選在君王側。回眸一笑百媚生。六宮紛黛無顏色。

春寒賜浴華清池。溫泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。

始是新承恩澤時。雲鬢花顏金步搖。芙蓉帳暖度春宵。

春宵苦短日高起。從是君王不早朝。承歡侍宴無閑暇。

春從春遊夜專夜。後宮佳麗三千人。三千寵愛在一身。

金屋妝成嬌侍夜。玉樓宴罷醉和春。姊妹弟兄皆列士。

可憐光彩生門戶。遂令天下父母心。不重生男重生女。

驪宮高處入青雲。仙樂風飄處處聞。緩歌慢舞凝絲竹。

盡日君王看不足。

(譯) 一朝選ばれて君王の側に在り。眸をめぐらして一笑すれば百媚生ず。六宮の粉黛顔色無し。春寒浴を賜ふ華清の池。溫泉水滑らかに凝脂を洗ふ。侍兒扶け起す嬌として力なし。始めて是新たに恩澤を承くるの時。雲鬢花顏金步搖ぐ。芙蓉帳暖にして春宵を度る。春宵短きに苦しみ日高うして起

く。此より君王早く朝せず。歡を受け宴に侍して閑暇なく。春は春の遊びに従ひ夜は夜を専らにす。後宮の佳麗三千人。三千の寵愛一身に在り。金屋<sup>よとほひ</sup>妝成つて嬌として夜に侍し。玉樓宴罷み酔うて春を和す。姉妹弟兄皆土に列す。憐むべし光彩門戸に生じ。遂に天下の父母の心をして。男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ。驪宮<sup>りきゆう</sup>高き處青雲に入り。仙樂風に瓢り處々に聞ゆ。緩歌慢舞絲竹を凝らし。盡日君王看てあかず。

(大意) 一 朝選ばれて君のかたはらに侍る身となつたがもとよりの美人瞳を流してホ、と笑めば百の媚びと、のう。六宮の美人誰一人及ぶものがない。折しも春まだ浅く柔肌<sup>やははだ</sup>寒い頃とて華清池のゆあみを許されたが温泉の水もなめらかにこしもと数人つきさうて風も厭ふやうななよくとたよくとしたそぶりであつた。さうして始めて御目にかつた時には雲の緑髪花のかんばせ蓮歩のあゆみ楚々として芙蓉帳深き君が寢殿にお伽を申したが情は長く夜はみじかく美しい瞳を開けば早や春の日は大分のはつてゐた。此より皇帝は早く朝し給はず。貴妃はお側はなれず。一切萬事の御用を承つて夜通し晝通し皇帝は貴妃一人の専有となつた。全体後宮には三千人の美女がつかへてゐるんだがその三千人の寵愛を一身に集め爲に金屋を設けられ爲に様々の酒宴催され一門何れも領土を賜はり貴妃一人の爲に楊氏の一門は御光がさすばかりの繁昌さである。此を見た當時の父母は誰一人男の兒がほしいと云ふ

者はなく兒を産むなら女兒に限ると云ふやうになつてきた。雲に聳ゆる驪宮殿そこに奇しの仙樂ひびき羅綾の袖を翻へし珠玉の肌を宛轉として緩歌慢舞にあらんかぎりの嬌態艶容をつくせば皇帝は日もすがらそれをめで見てなほ飽けりとせず。寵愛眷顧歴史あつてこのかた殆んどそのためしなき程であつた。

三

漁陽鞞鼓動地來。	驚破霓裳羽衣曲。	九重城闕煙塵生。
千乘萬騎西南行。	翠華搖搖往復止。	西出都門百餘里。
六軍不發無奈何。	宛轉蛾眉馬前死。	花鈿委地無人收。
翠翹金雀玉搔頭。	君王掩面救不得。	回看血淚相和流。
黃埃散漫風蕭索。	雲棧縈紆登劍閣。	蛾眉山 <sup>二</sup> 下少人行。
旌旗無光日色薄。	蜀江水碧蜀山青。	聖主朝朝暮暮情。
行宮見月傷心色。	夜雨聞鈴斷腸聲。	

(譯) 漁陽の鞞鼓地を動かして來り。驚破す霓裳羽衣の曲。九重の城闕煙塵生じ。千乘萬騎西南に行

く。翠華搖々往いて復止まり。西都門を出づる百餘里。六軍發せず奈何ともするなし。宛轉たる蛾眉馬前に死す。花細地に委し人の收むる無く。翠翹金雀の玉搔頭。君王面を掩うて救ひ得ず。回看し血淚相和して流る。黄埃散漫風蕭索。雲棧縈紆劍閣を登る。蛾眉山下人の行くこと少なり。旌旗光なく日色薄し。蜀江水碧にして蜀山青し。聖主朝々暮々の情。行宮月を見る傷心の色。夜雨鈴を聞く斷腸の聲。

(解) 漁陽。安祿山が兵を起したところ。雲棧。雲中にあるかけはし。蜀の棧道のことで高いところにあるから雲の字をつかふ。劍閣。蜀の棧道のこと。

(大意) 夫斯の如し。而も好事は魔多く歡樂の極まるどころやがて哀情となる。漁陽鼓ひいて安祿山の叛軍大舉して攻めてきて貴妃が緩歌慢舞をおごろかすと最早霓裳羽衣の曲ごころの騒ぎではない。宮中大混雜となつて皇帝は數多の部下と共に都の西南をさして落ちゆかれたので貴妃もまたかわいながらにおつき申して行つたが都門を出でて百何里部下の兵はランことまつて進まない。どうしたときけば「我々は貴妃の死を賜はるのを待つて進みます」と。蓋彼の賊將安祿山は此迄大變貴妃にとり入つてそれによつて勢力を得たものでもあるし皇帝が日夜宴樂に耽られるのも彼女あるが爲めで此ことわりせめた部下の苦言には奈何ともする能はず。あたら嬋娟窈窕たる美人をどうく君の馬前で

亡きものにした。花のかんざし地にくだけ君王は顔を掩うて血淚萬斛。さてしもあるべきならずと更に蜀の棧道へと志ざされた。その行く道は塵埃々風颯々といさびしく人の往き來は稀にして旌旗光無くして色悲しみ日色薄くして天怨むが如く蜀江の碧蜀山の青朝に眺め暮に眺めても君が御胸を徂來するものは唯死せし寵姫逝きし貴妃のことばかりで月を見ても鈴を聞いても唯徒に涙の種となるばかりであつた。

四

天旋地轉迴龍馭。到此躊躇不能去。馬嵬坡下泥土中。不見玉顏空死處。君臣相顧盡霑衣。東望都門信馬歸。

(譯) 天旋り地轉し龍馭迴り。此に到つて躊躇去る能はず。馬嵬坡下泥土の中。玉顔を見ず空しく死せし處。君臣相顧みて盡く衣を霑ほし。東都門を望んで馬に信せて歸る。

(大意) 亂賦已に平らぎて君は再び洛陽におかへりになることとなり鹵簿漸くに進んで馬嵬が原にきて見れば玉のかんばせ月の眉あとかたもなく影うせて無言の君無言の臣。眼には熱い涙がボタボタと……それでも馬の足なみにつれていつか舊都に着いた。

五

歸來池苑皆依舊。太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。  
 對此如何不淚垂。春風桃李花開夜。秋雨梧桐葉落時。  
 西宮南苑秋草多。宮葉滿階紅不掃。梨園弟子白髮新。  
 椒房阿監青娥老。夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未成眠。  
 遲遲鐘鼓初長夜。耿耿星河欲曙天。鴛鴦瓦冷霜華重。  
 翡翠衾寒誰與共。悠悠生死別經年。魂魄不曾來入夢。

〔譯〕 歸來池苑皆な舊に依る。太液の芙蓉未央の柳。芙蓉は面の如く柳は眉の如し。此に對して如何ぞ涙垂れざらん。春風桃李花開く夜。秋雨梧桐葉落つる時。西宮南苑秋草多く。宮葉階に滿ち紅拂はず。梨園の弟子白髮新なり。椒房の阿監青娥老。夕殿螢飛んで思ひ悄然たり。孤燈挑げ盡して未だ眠を成さず。遲々たる鐘鼓初めて長き夜。耿耿たる星河曙けんと欲する天。鴛鴦瓦冷にして霜華重く。翡翠衾寒うして誰と與に共にせん。悠悠たる生死別れて年を経。魂魄曾て來つて夢に入らず。  
 (大意) 歸來宮殿を見れば池も園も太液殿の芙蓉も未央宮の柳もありし昔と態變へず。君は芙蓉を見て貴妃の顔を思ひ出し柳を見ては眉を思ひ出し一事一物が凡て涙の種となつた。春風桃李の花を綻ば

するの朝秋雨梧桐を誘ふの夕さては西宮南苑秋草しげく生ね或は宮葉階に滿つれども紅葉を掃はずと云ふ有様で四季は推移しそのかみの俳優も大分年をとり宮中の女官も段々年をとつたが君が楊貴妃戀しの心はいやましに憎すばかりであつた。夕べ御殿に飛ぶ螢を見ても思ひしほれ孤燈油きれてまだ眠られず。夜ふけを告ぐる鐘鼓ひとふた三つ四つ。あゝ今此様になつて始めてかの貴妃在世の時にあこがれた長夜がやつてきた。見上ぐれば星河耿として世は曉天に近く鴛鴦をかたごつた風におく霜白く翡翠のふすま寒けれど共に寒がる伽なくして幽冥彼此數千里をへだてゝは晝はおろか夜の夢路にだに再び見るの機なき有様となつた。

六

臨邛道士鴻都客。能以精誠致魂魄。爲感君王展轉思。  
 遂教方士慙勳覓。排空馭氣奔如電。升天入地求之遍。  
 上窮碧落下黃泉。兩處茫茫皆不見。忽聞海上有仙山。  
 山在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起。其中綽約多仙子。  
 中有仙人字太真。雪膚花貌參差是。金闕西廂叩玉肩。

轉教小玉報雙成。 聞道漢家天子使。 九華帳裏夢魂驚。  
 攬衣推枕起徘徊。 珠箔銀屏遞迤開。 雲鬢半偏新睡覺。  
 花冠不整下堂來。 風吹仙袂飄飄舉。 猶似霓裳羽衣舞。  
 玉容寂寞淚闌干。 梨花一枝春帶雨。

(譯) 臨邛の道士鴻都の客。能く精誠を以て魂魄を致す。君王展轉の思ひに感ずることを爲す。遂に、方士をして慇懃に究めしむ。空を排し氣に取して奔ること電の如し。天に升り地に入り之を求むること遍し。上は碧落を窮め下は黃泉。兩處茫茫として皆見えず。忽に聞く海上に仙山有るを。山は虛無縹緲の間に在り。樓閣珍珠として五雲起り。その中綽約として仙子多し。中に一人太真と字するあり雪膚花貌參差として是なり。金闕西廂玉肩をたつき。轉小玉をして雙成を報せしむ。聞くならく漢家天子の使。九華帳裏夢魂驚く。衣を攬り枕を推し起つて徘徊す。珠箔銀屏遞迤開く。雲鬢半ば遍して新睡覺む。花冠整はず堂を下り來る。風は仙袂を吹いて飄々としてあがり。猶霓裳羽衣の舞に似たり玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春雨を帶ぶ。

(大意) 幸なるかな臨邛の術者楊通幽。能く仙術を以て死人の魂をよびかへすと云ふことで乃召して

君王纏綿の情を聞かせ八方隅なく貴妃の芳魂を求めしめた。通幽詔をかしこんで雲のよりもの風の馬忽にして九天の上を極めむぐら蚯蚓も何のその。忽ち黃泉の底をつくしてさがしたが一向手がりがないので茫然として立つてゐると忽ち見る海上山あり。其形凡ならず。大空の中に頂あれども何處に籠のありとも見えず。五色の雲は樓閣にたなびき多くの仙女は樓上にほのぼのと見えてゐる。正しく此であると思つて件の術によつて尙も見つめてゐると仙女の中に一人太真と字名するものがあつた。是は即ち貴妃の後身であつて花のかんばせ雪の肌髣髴として在世の美貌が遠目にもしるき迄に際だつてゐるそこで道士は其金闕を訪れ西廂のとぼそをほとといたつて「ハイ」とこたへてやつてきた十二三の少女に「あなたに宛てた手紙を言傳かつてきたものがあります。」と告げさせた。「漢家(實は唐室だが始めにも云つたやうに此詩凡べて唐を漢と變へてある。)の使と聞いたばかりで彼女の夢魂は忽ち「オヤサウー。」と驚いて衣をかゝげ枕をかたよせて驚きのあまり起つて樓上をうろくしてをつたがやがて玉の簾をかゝげ銀の屏風を開き綠鬢ふさふさとして水滴るが如きを少し纖手にかきあげ身づくろひもそこくんにアタフタとおひり來ると風は奇しの袖を吹いて恰も生前皇帝がめでた霓裳羽衣の舞曲のやうにあつた。……と見ればその顔は如何にも寂しさに得堪へぬと云ふ表情があり涙はどめどもなくハラ／＼と流れてさながら梨花一枝春雨になやめるの風情である。



含情凝睇謝君王。一別音容兩渺茫。昭陽殿裏恩愛絕。  
蓬萊宮中日月長。回頭下望人寰處。不見長安見塵霧。  
唯將舊物表深情。鈿合金釵寄將去。釵留一股合一扇。  
釵擘黃金合分鈿。但教心似金鈿堅。天上人間會相見。  
臨別殷勤重寄詞。詞中有誓兩心知。七月七日長生殿。  
夜半無人私語時。在天願作比翼鳥。在地願為連理枝。  
天長地久有時盡。此恨綿綿無絕期。

〔譯〕 情を含み睇を凝らして君王に謝す。一別音容兩つながら渺茫。昭陽殿裏恩愛絶わ。蓬萊宮中日月長し。頭を回らして下人寰を望む處長安を見ず塵霧を見る。唯舊物を將つて深情を表し。鈿合金釵寄せ將ち去る。釵は一股を留め合は一扇。釵は黄金を擘き合は鈿を分つ。但心をして金鈿の堅きに似せしめば。天上人間會す相見ん。別れに臨みて殷勤重ねて詞を寄す。詞中誓あり兩心知る。七月七日長生殿。夜半人なく私語の時。天に在りては願はくは比翼の鳥となり。地に在りては願はくは連理の

枝とならん。天長地久時あつて盡く。此恨みは綿々として絶ゆる期なし。

〔大意〕 情を含み睇をこらして君王往時の寵を謝し「お別れ申してから大分の月日がたちましたがたよりせうにも戴かうにも昭陽殿裏道たわて蓬萊宮中徒に烏兔の匆々たるを嘆くのみでありまして頭をめぐらして下を見ても戀しい長安は見ねないで唯塵けむりがもやくとあがつてゐるだけのことですさう悲しい思ひをしてをりましたのようこそお訪ね下されました。それでは私のかたみとして昔我君から戴きました青貝の箱と金の簪とをお贈りしませうがごちらも二つにわけて箱は蓋だけ簪は一股だけにして残る實の方と一股とは私が永久に我君を慕ふよすがにしたいと存じます。心さへ金釵鈿合の如く互に變るな變らじと堅く契つておきましたならばよしや大空と下界とからだは遠く隔てゝゐても又逢ふ時もございませう。左様ならばどうかよろしく仰つしやつて下さい。尙重ねて申しておきませうが此手紙の中にかたく申しておきましたから我君もきつと御承知下さることゝは思ひますが永い未來ではかの牽牛織女が逢ふと云ふ七月七日に長生殿裏の夜半あたりに入なくあるは唯二人喃喃の密語をかはしてさてその後は大空行けば比翼鳥地にまた棲めば連理の枝と生れかはりませう。その天の長きも地の久しきも時にははてしがありませうけれども唯かの馬嵬が原でのお訣れの名残をしさと云ふものは天よりも以上地よりも以上に綿々として盡くるときがないであります……とどうかこれだけ

のことを我君様に申し上げて下さい。」

偶 成

程 明 道

閑來無物不從容。 眠覺東窓日已紅。 萬物靜觀皆自得。  
四時佳興與人同。 道通天地有形外。 思入風雲變態中。  
富貴不淫貧賤樂。 男兒至此是英雄。

(譯) 閑來物の從容ならざるなし。眠り覺めて東窓日已に紅なり。萬物靜觀皆自得し。四時の佳興人と同じ。道は通ず天地有形の外。思は入る風雲變態の中。富貴淫せず貧賤樂しむ。男兒此に至らば是英雄。

(大意) 我心境を冷靜にせば萬物皆我ものとなり春花秋月の序も天地有形の外風雲變態の中至るところに享樂自適の點を看取し得べくかくして能く富み能く貴くして而も淫蕩ならぬ人こそ眞の英雄と謂ふべきである。

渡 桑 乾

買 高

客舍并州已十霜。 歸心日夜憶咸陽。 無端更渡桑乾水。  
却望并州是故鄉。

(譯) 客舍并州已に十霜なり。歸心日夜咸陽を憶ふ。端無く更に桑乾の水を渡り。却つて并州を望めば是故郷なり。

(大意) 并州の客舍に起き臥しすること已に十星霜。日夜故郷の咸陽を慕つて歸心矢の如きものがある。今またゆくりなくも桑乾の江を渡つてまだ遠く行くことになつてふりかへつて見ると咸陽はおろか前に居た并州すらも第二の故郷のやうにおもはれてなつかしい。

胡笳歌送顏真卿使赴河隴

岑 參

岑 參

君不聞胡笳聲最悲。 紫髯綠眼胡人吹。 吹之一曲猶未了。  
愁殺樓蘭征戍兒。 涼秋八月蕭關道。 北風吹斷天山草。  
崑崙山南月欲斜。 胡人向月吹胡笳。 胡笳怨兮將送君。  
秦山遙望隴山雪。 邊城夜夜多愁夢。 向月胡笳誰喜聞。

(譯) 君聞かずや胡笳の聲最悲しきを。紫髯綠眼の胡人吹く。之を吹いて一曲猶未了らす。愁殺す樓蘭征戍の兒。涼秋八月蕭關の道。北風吹斷す天山の草。崑崙山南月斜ならんと欲す。胡人月に向つて胡笳を吹く。胡笳怨む將に君を送らんとす。秦山遙に望む隴山の雪。邊城夜々愁夢多し。月に向つて胡笳誰か聞くを喜ばん。

〔解〕 胡笳。胡人の吹く芦笛。樓蘭。今の露領にあたり支那の西北に存在した一蕃國。蕭關。秦の北にある關。

〔大意〕 御身は知り給ふや。今やおこしになる河隴への道途には紫髯緑眼の胡人が居て夜なく胡笳を吹きならすと。その聲悲愁樓蘭幾千の遠征兒はそゝろに郷愁に得堪へぬものあることを。ところが今や涼秋八月の候かの蕭關の道を辿つておいでになるとだん／＼と旅の日數の重るにつれて氣候も寒くなり天山の草木寒風に折られ崑崙山月西に傾かんとする所胡人胡笳をとつて綿々たる愁思を吹けば御身はその悲しい調べのマーチに合せてカッポ／＼と邊城をさしておこしになる。幾夜な／＼をかうしたかなしい吹奏を聞いてはわびしい旅寢の夢を辿られることかとおもふごまことにお痛はしう存じます。

清平調詞三首

李

白

雲想衣裳花想容。 春風拂檻露花濃。 若非羣玉山頭見。  
會向瑤臺月下逢。

〔譯〕 雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ。春風檻を拂うて露花濃かなり。若羣玉山頭に見るに非ずん

ば。會す瑤臺月下に向つて逢はん。

〔解〕 清平調詞。玄宗皇帝牡丹を愛し之を觀賞する爲に態々李白をして作らしめたるもの。羣玉山。仙女西王母の住みか。瑤臺。佚女と云ふ美人の居るところ。

〔大意〕 雲には衣裳を聯想し花には容顏を聯想す。我君牡丹を愛し又楊貴妃を愛せられるが牡丹と妃と蓋し互の生れ變りであらう。春風はおぼしまを拂うて花の雫の色も艶である。此庭にして此美人ある。眞に人間界のものらなす蓋古より傳へ云ふ西王母や佚女と比肩すべき美妃ならん。

二

一枝濃艶露凝香。 雲雨巫山枉斷腸。 借問漢宮誰得似。  
可憐飛燕倚新粧。

〔譯〕 一枝濃艶露香を凝らす。雲雨巫山枉げて斷腸。借問す漢宮誰か似たるを得ん。可憐の飛燕新粧に倚る。

〔解〕 雲雨巫山。昔楚の襄王夢に巫山の神女と契らせ給ふ。その女別るゝに臨んで曰く「妾は是巫山の神女朝には雨となり夕には雲とならん。雲雨を戀はさば以て妾をな忘れ給ひそ」と。飛燕。前漢武帝の寵姫飛燕と云ふ美人のこと。

其 七 漢 詩

(大意) 濃艶たぐひなき牡丹の精とも謂ふべき楊貴妃の姿を何に譬へたものか。夢に武帝に契つた巫山の神女もたゞでは行かぬ。力めて可憐に斷腸のしなをつくつたら或は稍近いものと謂ふことが出来やう。漢室に數ある宮廷夫人中に比を求めらばあの絶世の美人と云はれた超飛燕が新に化粧を施したその暫らくだけが稍近いものであらう。

三

名花傾國兩相歡。 常得君王帶笑看。 解釋春風無限恨。

沈香亭北倚闌干。

(譯) 名花傾國兩つながら相歡ぶ。常に君王の笑を帯びて看ることを得たり。釋くことを解す春風限りなき恨。沈香亭北闌干による。

(解) 名花。支那での名花。殊に唐朝玄宗皇帝の好ませられる名花。即牡丹。傾國。美人のこと。ここでは楊貴妃を指す。沈香亭。宮殿中にある一つの亭の名。

(大意) 花と人と共に君王の寵を得て貴妃は沈香亭の欄干によりて春風花を凋落せしむる無限の恨みを解して君寵を妨げる「生憎」と云ふ春風に自分も美人薄命と云ふ一般の運命に陥りはしないだらうかとよそへてじつと見いつて居る。暮春名花貴妃唐宮實に優艶妖冶の極と謂ふべき有様である。

對酒

白居易

蝸牛角上爭何事。 石火光中寄此身。 隨富隨貧且歡樂。 不開口笑是癡人。

(譯) 蝸牛角上何事を争ふ。石火光中此身を寄す。隨富隨貧且歡樂す。口を開いて笑はざる是れ癡人。(大意) 電光石火のやうな僅の期間に生を托して蝸牛角上のやうな狭い社會に居て何をこせくと争つたりもがいたりする必要があらう。そんなことをしないで身分相應におもしろをかしく暮らすがい。ナニ口をあいて笑うものは阿呆だ……。そんなことがあるものか。口を開いて笑はないものが馬鹿なのだ。

酌酒與君

王維

酌酒與君君自寬。 人情翻覆似波瀾。 白首相知猶按劍。 朱門先達笑彈冠。 草色全經細雨濕。 花枝欲動春風寒。 世事浮雲何足問。 不如高臥且加餐。

(譯) 酒を酌んで君に與ふ君自ら寬ふせよ。人情の翻覆波瀾に似たり。白首の相知猶劍を按す。朱門

其七 漢 詩

二九七

の先達彈冠を笑ふ。草色全く細雨を経て濕ほひ。花枝動かんと欲して春風寒し。世事浮雲何ぞ問ふに足らん。高臥して且餐を加へんには如かず。

(大意) マア君打くつろいで一杯やり給へ。人情の反覆常なきは丁度波のやうなもんだ。年こるまで親密にしてゐたものでも尙一寸したことから刃物三昧の騒ぎを惹起することがあるし朱門の先輩も冠を弾いて高く標置してゐる士を冷笑する位なものさ。つまらない雑草にも比すべき小人原は又つまらない細雨の如き權門の庇護を得てしたり顔によるこび美花にも比すべき君子が活動しやうとすれば色々邪魔が入つてとかく浮世は生憎なものだ。併しそんなことをくよくよするにも當らない。すきな太白でも傾けて仰のけに安臥してゐるに限るよ。

鳥夜啼

李白

黃雲城邊鳥欲棲。歸飛啞啞枝上啼。機中織錦秦川女。碧紗如煙隔窗語。停梭悵然憶遠人。獨宿空房淚如雨。

(譯) 黃雲城邊鳥棲まんと欲す。歸り飛んで啞々として枝上に啼く。機中錦を織る秦川の女。碧紗煙の如く窗を隔てゝ語る。梭を停めて悵然として遠人を憶ふ。獨空房に宿して涙雨の如し。

(解) 鳥夜啼。鳥は雌雄相失した時夜啼くと云ふ意から妻が旅行く夫を思つて讀むの意。

黃雲。たそがれの雲。秦川女。空買酒が妻のこと。征夫を慕つてその詩を機に織りこんだ。

(大意) 夕日は西に傾きてたそがれ雲におほなる城のいらかに雀啼く。カララコロロの梭やめて雀に見いる留守女旅行く夫は今日いづこ今は如何にと思ひにくれて今日も淋しい床につく。

章員外家花樹歌

岑參

今年花似去年好。去年人到今年老。始知人老不如花。可惜落花君莫掃。君家兄弟不可當。列卿御史尙書郎。朝回花底恒會客。花撲玉缸春酒香。

(譯) 今年の花は去年に似て好し。去年の人は今年に到つて老ゆ。始めて知る人老いて花に如かざることを。惜むべきの落花君掃ふこと莫れ。君が家の兄弟當るべからず。列卿御史尙書郎。朝回花底恒に客を會す。花は玉缸を撲つて春酒香ばし。

(大意) 今日の花は去年と同様美しいけれども去年の人は今年になると一昨年をとつて行くから人間は花に比してあかぬものだと云ふことがわかる。君よ惜しむべきの落花を掃ふことをやめよ。あゝ君が家の兄弟は列卿御史尙書郎と云ふ御歴々ばかりでなか、吾々の及ぶところでない。そこで此花の晨に賓客を會して此盛宴を張られたが玉の盆花おちて春のあしたのうたげの席何となくかぐはしいよ

い氣持である。

虞美人 草

曾子 詞

鴻門玉斗紛如雪。拾萬降兵流血。咸陽宮殿三月紅。  
 霸業已隨煙燼滅。剛強必死仁義王。陰陵失道非天亡。  
 英雄本學萬人敵。何用屑々悲紅粧。三軍散盡旌旗倒。  
 玉帳佳人坐中老。香魂夜逐劍光飛。青血化爲原上草。  
 芳心寂寞寄寒枝。舊曲聞來似斂眉。哀怨徘徊愁不語。  
 恰如初聽楚歌時。滔々逝水流今古。漢楚興亡兩丘土。  
 當年遺事久成空。慷慨樽前爲誰舞。

〔譯〕 鴻門の玉斗紛として雪の如し。拾萬の降兵血を流す。咸陽の宮殿三月紅なり。霸業已に煙に隨がつて燼滅す。剛強必死仁義の王。陰陵道を失す天の亡ぼすに非ず。英雄は本萬人に敵するを學ぶ。何ぞ用ひん屑々として紅粧を悲しむことを。三軍散じ盡して旌旗倒る。玉帳佳人坐中に老ゆ。香魂夜劍光を逐うて飛び。青血化して原上の草となる。芳心寂寞として寒枝を寄す。舊曲聞き來つて眉を斂

ひるに似たり。哀怨徘徊愁へて語らず。恰も初め楚歌を聴くの時の如し。滔々たる逝水今古に流れ。漢楚の興亡兩丘土。當年の遺事久しく空と成る。樽前に慷慨して誰が爲めにか舞へる。

〔大意〕 鴻門の會には玉斗雪の如く降兵拾萬すばらしい勢で咸陽は三ヶ月の大火に煙滅し秦王の覇圖悵として今已みぬ。是天の滅ぼすに非ずして秦の不徳の滅ぼすと云ふものだ。英雄はよろしく萬人に敵對する事を學ぶべし。何ぞ些々たる一婦人の爲に泣いたりする必要があらう。今や項羽の三軍盡く散つて旗色悪く侍御の佳人は玉帳中に老い美人の芳魂夜英雄の劍光につきまどひ其血しほは化して原頭の虞美人草となり一枝の寒樹空しく芳心を托し舊曲を聞けば眉をひそむるものゝ如く尙當年の楚歌の曲を聞いた時の美妓の面影をしてゐる。滔々たる流水今古を流して漢楚の興亡二つながら已に空し今や樽前に慷慨して誰の爲に舞ふたりしやうぞ。何の益もないことである。

妬花 詞

唐 寅

昨夜海棠初帶雨。數朶輕影媚欲語。佳人曉起出蘭房。  
 折來對鏡比紅粧。問郎花妍妾顏好。郎道不如花窈窕。  
 佳人聞語發嬌嗔。不信死花勝活人。把花揉碎擲郎前。  
 請郎今夜抱花眠。

其七 漢 詩

三〇一

(譯) 昨夜海棠初て雨を帯び。數朶の輕影媚びて語らんと欲す。佳人曉起蘭房を出でて。折り來り鏡に對して紅粧に比ぶ。郎に問ふ花妍なるか妾が顔好きか。郎は道ふ花の窈窕たるに如かずと。佳人語を聞き嬌聲を發し。死花の活人に勝れるを信せず。花を把り揉碎して郎の前に擲つ。請ふ郎今夜花を抱いて眠れ。

(大意) 夜來の春雨に海棠美花を開き艶麗今にも綻びさうである。美人曉に起きて一枝を手折り之を我が夫に示して云ふには「花とわたしとどちらがきれいでせう」と。夫戯れて「そりや花の方がすつと」とやかで美しい」と。そこで美人が艶にすねてその花をぐちゃぐちゃに揉んで夫の前に投げつけて「ちやあなたは今晚その花を抱いておやすみなさい」と。

秋 野

白 居

霜草蒼々虫切々。 村南村北行人絶。 獨出門前望野田。 月清蕎麥花如雲。

(譯) 霜草蒼々蟲切々。村南村北行人絶ゆ。獨り門前を出て野田を望む。月清くして蕎麥花雲の如し。(大意) 霜を帯びたる草は尙青く蟲はひつきりなしに鳴いてゐる。村里の南北往き來とだわしあたりひとり門前を出て野づらを見ればそばの花咲いて雲かと怪しまる。

遊 鐘

山

王 荆 公

終日看山不厭山。 買山終待老山間。 山花落盡山長在。 山水自流山自閑。

(譯) 終日山を看れども山を厭はず。山をかうて終に待つ山間に老ゆるを。山花落ち盡して山長へに在り。山水自ら流れて山自ら閑なり。

(大意) 一日すつと山を看て、も一向山に飽かず。山をかうて山間に老の至るを待つ。花散れば流水更に愛すべく静閑の趣致亦一段の趣あり。

春 溪

僧 太 白

春水纔高數尺強。 煙波渺々接天光。 落花漲盡江南雨。 一夜閑鷗夢亦香。

(譯) 春水纔に高し數尺強。煙波渺々として天光に接す。落花漲り盡す江南の雨。一夜閑鷗夢亦香ばし。

(大意) 春の水かさ漸く増して波の面かすかに煙りて大空と一つ色に連り江南一夜雨ふれば落花波間にみちて浮ぶ鷗の夢までも得ならぬ花の香にみちてゐることであらう。

春山無伴獨相求。伐木丁丁山更幽。  
 澗道餘寒歷冰雪。石門斜日到林丘。  
 不貪夜識金銀氣。遠害朝看麋鹿遊。  
 乘興杳然迷出處。對君疑是泛虛舟。

〔譯〕春山伴なくして獨相求めば。伐木丁々として山更に幽なり。澗道の餘寒に氷雪を歷。石門の斜日に林丘に到る。貪らずして夜金銀の氣を識り。害を遠ざけて朝に麋鹿の遊びを見る。興に乗じて杳然として出處に迷ふ。君に對して疑ふらくは是虛舟を泛ぶるかど。

〔大意〕親友張君と相對して氏が幽栖の無爲恬澹の心境に遊べば宛も虚舟を泛べたるが如く百念の執着頓に消わ浮世の齷齪云ふに足らずと云ふやうな氣持になつた。

春江花月夜

春江潮水連海平。海上明月共潮生。  
 滌滌隨波千萬里。何處春江無月明。  
 江流宛轉遶芳甸。月照花林皆似霰。  
 空裏流霜不覺飛。汀上白沙看不見。  
 江天一色無纖塵。

皎皎空中孤月輪。江畔何人初見月。  
 人生代代無窮已。江月年年望相似。  
 但見長江送流水。白雲一片去悠悠。  
 誰家今夜扁舟子。何處相思明月樓。  
 應照離人粧鏡臺。玉戶簾中卷不去。  
 此時相望不相聞。願逐月華流照君。  
 魚龍潛躍水成文。昨夜間潭夢落花。  
 江水流春去欲盡。江潭落月復西斜。  
 碣石瀟湘無限路。不知乘月幾人歸。  
 落月搖情滿江樹。

〔譯〕春江の潮水海に連つて平らかなり。海上の明月潮と共に生ず。滌々として波に隨ふ千萬里。何れの處か春江月明なからん。江流宛轉として芳甸を遶り。月は花林を照らして皆霰に似たり。空裏の流霜飛ぶを覺わす。汀上の白沙看ゆれども見わす。江天一色纖塵なく。皎々たり空中の孤月輪。江畔



何人が初めて月を見る。江月何れの年か初めて月を照らす。人生代々窮まり已むことなし。江月年々望み相似たり。知らず江月何人を照らす。但見る長江の流水を送るを。白雲一片去つて悠々。青楓浦上愁に勝へず。誰が家か今夜扁舟子。何れの處にか相思ふ明月樓。憐れむべし樓上月徘徊するを。應に離人の粧鏡臺を照らすべし。玉戸簾中巻けども去らず。擣衣砧上拂へども還來る。此時相望めども相聞こわす。願はくは月華を逐うて流れて君を照らさん。鴻雁長く飛んで光度らず。魚龍潛躍水文を成す。昨夜間潭落花を夢む。憐れむべし春半ばにして家に還らず。江水春を流し去つて盡さんと欲す。江潭の落月復西に斜なり。斜月沈々海霧を藏め。碣石瀟湘無限の路。知らず月に乗じて幾人か歸る落月情を搖かして江樹に滿つ。

(大意) 春江一碧末大空に連なり明月皎々潮と共にわき漣々として波につれて千里萬里の里までも照らして春流至るところに月明を見る。江流はまがりくして花の都のまぢまぢを遠り月は花林を照らして梅花の一房々々を蔽と化し大空の裏嚴霜流ると見て月は更に汀上の白沙をてらせば白沙も白く月も白くいづれやまざこいづれ月とのけぢめもつかぬ。水や空空や水とも見わわかす。塵一すじもたぬ大空に唯まんまるい月一痕が大きくあかるくかかつてゐる。あゝこの岸邊にたちて誰が始めて此明月を見たことであらう。又この清江のほとりになつて何時始めてあの月がほめそやす人を照らしそ

めたことであらう。人生の變轉究極するところなきに江月のながめは年々同じことである。變化極りなき人生のどれだけを照らしたとか。あの月の光の含蓄を一寸見ただけではそのことはわからないわかるものは唯長江の流れの洋々たる様だけである。そが上を白雲一片去つて悠々と長く迥かに連なり青楓しげる浦の上をいろに人を愁殺するものがある。この背にして一葉の輕舟に棹さしてツイ／＼江上を這つてゐるのはこの誰であらうか。又その人を思うて明月樓上に夫戀しの情にやるせない思ひをしてゐる佳人はどこにゐることであらう。樓上徒に月のみ徘徊してその物思ひにふける佳人の鏡臺を照らしていやが上に物思ひをせよとがし顔であらう。そこでその佳人は「マアいやだ……」など云うてその簾をまきおろしても一向月かげは去らずして又その簾をもれ得たぬ思ひかよはせてきぬたをうてば又候砧の上に月がさして拂へども／＼のかない。ああこのやうにしてこちらで月をながめてをれば思ひは同じく異郷の人も又月を見て故郷をなつかしんでゐるけれども無線電信のない當時のこととてそよどのたよりだに寄せる便宜はない。ならうことなら月の光ともろともに此河を流れてせめては御身を照らしたいなご思つてゐるやさきに光は流れず鴻雁のみ高く飛び魚はピン／＼とはねて水に銀紋を生ずる。ああ翼あらば鱗あらばと思ひ／＼思ひに沈むばかりである。夜前は静かな淵に落花する様を夢に見たがあはれ旅の兒は妻も氣色も春最中なのに家へも得歸らず。その中江流は春を

流し佳人も年老いて春色模索すべからざるに至るであらう。江潭の月かけ又入りかたとなつて濃霧朦々の中にその餘光を藏む。碣石と云ひ瀟湘と云ひ遙かの遠にある風勝の地であるが今晚あたり此月影の水の面に棹さしてかうした思ひをいだきつついくらの人が歸つてくることであらうか。落月は尙も想ひをそつて江樹の枝々に誘惑的な餘光をなげてゐる。

人日寄社二拾遺一

高

通

人日題詩寄草堂。

遙憐故人思故郷。

柳條弄色不忍見。

梅花滿枝空斷腸。

身在南蕃無所預。

心懷百憂復千慮。

今年人日空相憶。

明年人日知何處。

一臥東山三十春。

豈知書劍老風塵。

龍鍾還忝二千石。

愧爾東西南北人。

(譯) 人日詩を題して草堂に寄す。遙に憐む故人故郷を思ふを。柳條色を弄して見るに忍びず。梅花枝に滿ちて空しく斷腸。身は南蕃に在つて預る所無く。心に懷く百憂復千慮。今年人日空しく相憶ふ。明年人日知りぬ何れの處ぞ。一臥東山三十春。豈知らんや書劍風塵に老いんとは。龍鍾還つて二千石を忝うす。愧づ爾東西南北の人。

(大意) 此人日に方つて一篇の詩を君が草堂に寄せやう。今頃は定めし君も故郷のことを思ひ出してゐられるでせう。柳條梅花の春色を見るにつけても御身のことがなつかしくてたまりません。それなのに我身は南蕃にあつて日毎日毎にいろ／＼かす／＼の心配をしてちつともお目にかゝる機會がないのです。今年この偏鄙でこのやうな思ひを懷いて人日を送りますが來年の今日はまたいづくのはてでどんな思ひで暮らすことせう。晉の謝安が一臥東山三十春と云ひましたが私もそうかうする中不遇の中に年をとつて書劍空しく名を爲さないで終ることせう。大まい二千石と云ふ俸祿につながれて堂々たる男一匹が毎日凡俗の輩に米つきばつたをするとは何たるみじめさでせう。あゝこれを思へば御身のやうに東西南北自由の境涯がお羨ましくもあり愧づかしくも思はれてなりません。

丹青引贈曹將軍霸

杜

甫

將軍魏武之子孫。

於今爲庶爲清門。

英雄割據雖已矣。

文采風流今尙存。

學書始學衛夫人。

但恨無過王右軍。

丹青不知老將至。

富貴於我如浮雲。

開元之中嘗引見。

承恩數上南薰殿。

凌烟功臣少顏色。

將軍正筆開生面。

其七 漢 詩

良相頭上進賢冠。猛將腰間大羽箭。褒公鄂公毛髮動。  
 英姿颯爽來酣戰。先帝天馬玉花驄。畫工如山貌不同。  
 是日牽來赤墀下。迴立闔闔生長風。詔謂將軍拂絹素。  
 意匠慘澹經營中。斯須九重眞龍出。一洗萬古凡馬空。  
 玉花卻在御榻上。榻上庭前屹相向。至尊含笑催賜金。  
 圍人太僕皆惆悵。弟子韓幹早入室。亦能畫馬窮殊相。  
 幹惟畫肉不畫骨。忽使驕驕氣凋悵。將軍善畫蓋有神。  
 必逢佳士亦寫眞。即今漂泊干戈際。屢貌尋常行路人。  
 途窮反遭俗眼白。世上未有如公貧。但見古來盛名下。  
 終日坎壈纏其身。

〔解〕丹青引。繪畫についての鑑賞の詩。魏武。魏の武帝即曹操のこと。衛夫人。書を能くす。其子は即王羲之。南薰殿。宮中の正殿なる興慶殿の一部。凌烟閣。唐の時代に功臣の畫像を掲げたところ。玉

花驄。玄宗皇帝の愛した駿馬。

〔大意〕曹將軍は今でこそ一匹夫となり下つてゐるが先祖はかの有名な魏武侯で實に名門の出である。英雄の割據はあとかたなくなつたが彼も武侯の子孫だけあつて文采風流な素質を遺傳的に稟け得てゐる。君は嘗つて書をまなんでなか／＼うまくなつて唯王羲之より劣ると云ふことを以て残念がつた。そこで君は繪を習ひかけたが大へんよく嗜好にかなつて老の將に至らんとするをも忘れ功名富貴を淨べる雲と見て朝夕繪筆に親しんでをつた。開元年中朝廷命あり屢々南薰殿にお召しになつた。凌烟閣の功臣の畫像が大分はげてきたなくなつてゐたのを君が筆を補つてからは見ちがへる程立派になつて房玄齡、杜如晦、魏徵等が頭上の冠や段志玄、尉遲恭等の武官の大羽箭や偕は褒公鄂公などの勇ましい毛髪までも英姿あたりを拂つて今や戦中から歸つたばかりと云ふやうにいろごられた。又玄宗皇帝が愛馬の玉花驄は此迄屢々他の畫工が筆にしようとかかつたけれどもどうもうまく書けない。と云ふので君が出仕の日赤墀の下へ引いてきて皇帝の命によつて意匠慘澹の末に絹素を拂ふと瞬く中に眞龍をさるとばかり爾餘幾多平凡なる馬像を排した。皇帝は御機嫌殊の外うるはしく賞金あまたをさらせられ心なき馬飼までも舌を捲いて歎賞した。君の弟子韓幹も亦能く丹青にたけ馬を畫くにも長じてをつたが唯夫れ神韻を素面に髣髴せしむるの技に至つては師君に及ばざること遠しと謂はなければなら

らぬ。それ此だけの腕をもつた君のことだから立派な人にあへば屹度亦其人をも立派に寫すだらうに  
今や徒に戦亂の際にさすらひ人となつて通常行路の人を書いたり又それ等凡人ににらめられたりして  
ゐることは何たる逆境であらう。凡そ今の天下に於いて恐らくは君程貧しい人はなからう。だけでも浮  
世はいつもかうしたもので昔から盛名と逆境とは姉妹境のやうになつてつきまとつてゐる。

琵琶行

白居易

潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。主人下馬客在船。  
舉酒欲飲無管絃。醉不成歡慘將別。別時茫茫江浸月。  
忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。尋聲暗問彈者誰。  
琵琶聲停欲語遲。移船相近邀相見。添酒迴燈重開宴。  
千呼萬喚始出來。猶抱琵琶半遮面。轉軸撥絃三兩聲。  
未成曲調先有情。絃絃掩抑聲聲思。似訴平生不得志。  
低眉信手續續彈。說盡心中無限事。輕攏慢捻抹復挑。

初爲霓裳後六么。大絃嘈嘈如急雨。小絃切切如私語。  
嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落玉盤。間關鶯語花底滑。  
幽咽泉流水下灘。水泉冷澁絃凝絕。凝絕不通聲暫歇。  
別有幽愁暗恨生。此時無聲勝有聲。銀鈸乍破水漿迸。  
鐵騎突出刀鎗鳴。曲終收撥當心畫。四絃一聲如裂帛。  
東船西舫悄無言。唯見江心秋月白。

(譯) 潯陽江頭夜客を送る。楓葉荻花秋瑟瑟。主人馬より下り客は船に在り。酒を舉げ飲まんと欲し  
て管絃なし。酔うて歡を爲さず慘として將に別れんとす。別時茫茫江月を浸す。忽ち聞く水上琵琶の  
聲。主人歸るを忘れ客發せず。聲を尋ねて暗に問ふ彈く者は誰ぞ。琵琶聲停んで語らんと欲する遲し  
船を移し相近づいて邀へて相見る。酒を添へ燈を迴らして重ねて宴を開く。千呼萬喚始めて出で来る。  
猶琵琶を抱いて半ば面を遮る。軸を轉じ絃を撥す三兩聲。未だ曲調を成さず先づ情あり。絃々掩抑聲  
々思ふ。訴ふるに似たり平生志を得ざるを。眉を低れ手に信せて續々彈じ。説き盡す心中限なきの事  
軽く攏み慢く捻り抹しては復挑ぐ。初めは霓裳を爲し後は六么。大絃は嘈々急雨の如く。小絃は切々私

語の如し。嘈々切々錯雜彈じ。大珠小珠玉盤に落つ。間關たる鶯語花底に滑らかに。幽咽せる泉流水灘を下る。水泉冷澁絃凝絶す。凝絶通せず聲暫く歇む。別に幽愁暗恨の生ずる有り。此時聲なきも聲あるにまされり。銀餅乍ち破れて水漿迸り。鐵騎突出して刀鎗鳴る。曲終つて撥を收め心に當て、盡す。四絃一聲裂帛の如し。東船西舫悄として言なく。唯見る江心秋月の白きを。

(大意) 白居易九江の司馬に貶せられて潯陽城中快々の月を送る。或夜江頭に客を送つたのに頃しも秋の半ばとて楓葉荻花に風そよぎ瑟瑟の音をいろに物淋しい趣に満ちて居つた。已にして主人(自分)は馬を下り客も船にのつてここで一盞を傾けやうと思つたが生憎樂器が一つもない。酔うは酔うたがお互に物足らぬそぶりで別れやうとして月を見れば月は今しも天心に澄みわたつて江上の碧波金色爛々たるものあり……。と見ればついこの向ふから琵琶のしらべが一曲さやかな音を流してゆかしく響いてくる。主人も客も申し合はしたやうにまた後もごりをしてじつとその音に耳を立てた。やがてそばかりく漕ぎよつて「一体あなたはどの誰ですか。」つてきくと琵琶の手をやめた女ははづかしげに答をためらつてゐる。あまりのゆかしさにこちらから向ふの船に乗り移つて接近して亦酒を飲み燈をついで又候二次會と洒落れたところが件の女はまだ琵琶を手にして伏目がちでゐたが宴酣となるに連れ軸を轉じ絃をはねて二聲三聲何か「出し」をうたつた。まだことばもふしもわからない。けれども何

となく情趣ありげである。それから段々と手の込んだ彈奏が始まつて抑への手には聲くもつて宛も平素の不遇を訴へるやうな表情があり眉を垂れ眼をややしぶり氣味にして妙手の動くがまゝに弾じて心中無限の怨らみを皆琵琶で訴へるかとばかり或は軽くつかみ或はゆるくひねり或はこすり又はねあげ最初には霓裳の曲を二回目は六么の曲を奏した。二つとも凡手の及ばぬ難曲である。太い絃を弾く時には嘈々として急雨のそそぐが如く細い絃を弾く時にはヒソヒソとささやいてゐるが如く嘈々切々嘈々切々と大絃小絃を彼此入り亂れさせ宛として大珠小珠の盤上をまろぶが如く或は綿繚たる鶯の谷渡りの如く若くは泉流岩に激して硬咽限りなきの餘韻を想はしめるものがある。……と思ふ中突然その水流がせきとめられたやう凍りついたやうに音をブツツとさる。そのきつたあとの休止には又別種多恨の趣があつて無聲却つて有聲に勝ること萬々である。再び撥を弾ねれば銀瓶の破るるが如く三たび手をかへては水瓶ほどばしり再後は鐵騎の突進して刀鎗皆鳴るの趣あり。あゝ奇絶妙絶愉快絶と思つてゐる中に曲は終つて撥を收めてちやんと胸のあたりに持つたかと思ふうち四つの絃を一時に「ツツンシャシャン」とまるで帛でもさくやうな音をたててしとやかに一禮した。此時までも今まで東西南北最寄の船一語を發せず。一咳を立てず。唯江心秋月の一痕ほのに白みて搖々たるを見るのみであつた。

沈吟放撥挿絃中。整頓衣裳起歛容。自言本是京城女。  
 家在蝦蟇陵下住。十三學得琵琶成。名屬教坊第一部。  
 曲罷長教善才服。粧成每被秋娘妬。五陵年少爭纏頭。  
 一曲紅綃不知數。鈿頭銀篋擊節碎。血色羅裙翻酒汚。  
 今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。弟走從軍阿姨死。  
 暮去朝來顏色故。門前冷落鞍馬稀。老大嫁爲商人婦。  
 商人重利輕別離。前月浮深買茶去。去來江口守空船。  
 遠船明月江水寒。夜深忽夢少年事。夢啼粧淚紅闌干。  
 (譯) 沈吟撥を放つて絃中に挿み。衣裳を整頓して起つて容を歛む。自ら言ふ本は京城の女。家は蝦蟇陵下にありて住す。十三琵琶を學び得て成る。名は屬す教坊の第一部。曲罷んで長へに善才をして服せしめ。粧成つて毎に秋娘に妬まる。五陵の年少争うて纏頭し。一曲の紅綃數を知らず。鈿頭の銀篋節を撃つて碎き。血色羅裙酒を翻して汚る。今年歡笑し復明年。秋月春風等閑に度る。弟は走つて

軍に従ひ阿姨は死す。暮去り朝來り顏色故し。門前冷落して鞍馬稀なり。老大嫁して商人の婦となる。商人利を重んじて別離を輕んず。前月浮深に茶を買ひ去る。江口に去來して空船を守る。船を遠る明月江水寒し。夜深うして忽夢む少年の事。夢に啼く粧淚紅闌干。

(解) 蝦蟇陵。漢の薰仲舒の墓所のことで人々皆尊敬して馬から下りて拜むから下馬陵とも云ふ。坊。音樂教授所。秋娘。已に容色衰へた老女。五陵。富豪のこと。くはしく云へば長安陽茂平の五陵のこと。此邊富豪が多いからとりてその意としたもの。

(大意) それから撥を絃の下にはさんで身づくろひをして言ふには「もと私は都のほとり蝦蟇陵のさどで育ちまして十三才に琵琶を習つて一門中の秀才とたたへられ年頃となるに連れて盛裝する毎に秋娘に羨ましがられ五陵あたりの若様に引立てられて一曲毎の花にもらう紅い絹が幾枚ともわからの位手をとられ袖をひかれて或時は銀の簪がボキンと折れる程の騒ぎとなり赤の裳裾に酒樽かけてのさざめきも一年一年又一年と面白をかしく暮して居ります中に弟が戦争に行くやら姉が死ぬるやらそして我身もよる年なみに門前いごひつそりとして一向に五陵あたりのおとづれもなくなりました。しかたなく、或商人に嫁ぎましたところが物質欲一遍の夫は妻に空聞を守らせる位のことは何とも思はず。つい前月茶を買入れると云つて浮深の方へ參りました。たよるやすがもなきまゝに昔誇りし藝が

身を助くる程の不仕合せ此江口に去來して寢られぬ秋の夜な夜なは昔の榮華とやかくと思つては泣き泣いては思ひして暮らしてをります。不束な妾の身の上話しおはもじ様やと顔あげて又さめざめど血の涙…。

三

我聞琵琶已歎息。又聞此語重唧唧。同是天涯淪落人。  
 相逢何必曾相識。我從去年辭帝京。謫居臥病潯陽城。  
 潯陽地僻無音樂。終歲不聞絲竹聲。住近湓江地低濕。  
 黃蘆苦竹繞宅生。其間且暮聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。  
 春江花朝秋月夜。往往取酒還獨傾。豈無山歌與村笛。  
 嘔啞嘲哳難爲聽。今夜聞君琵琶語。如聞仙樂耳暫明。  
 莫辭更坐彈一曲。爲君翻作琵琶行。感我此言良久立。  
 却坐促絃絃轉急。淒淒不似向前聲。滿座重聞皆掩泣。  
 就中泣下誰最多。江州司馬青衫濕。

(譯) 我琵琶を聞いて已に歎息す。又此語を聞いて重ねて唧唧。同じく是れ生涯淪落の人。相逢ふ何を必ずしも曾て相識らん。我去年帝京を辭してより。謫居病に臥す潯陽城。潯陽地僻にして音樂なく終歲聞かず絲竹の聲。住は湓江に近く地低濕。黃蘆苦竹宅を繞つて生ず。その間且暮何物を聞く。杜鵑血に啼き猿哀鳴す。春江の花朝秋月の夜。往々酒をとつて還獨り傾く。豈に山歌と村笛と無からんや。嘔啞嘲哳聽を爲し難し。今夜君が琵琶の語を聞き。仙樂を聞くが如く耳暫らく明らかなり。辭する莫れ更に坐して一曲を彈するを。君の爲に翻して琵琶行を作らん。我此言に感じ良久しく立ち。却坐絃を促し絃轉急なり。淒々似す向前の聲。滿座重ねて聞き皆泣を掩ふ。中んづく泣下る誰か最も多き。江州の司馬青衫濕ふ。

(大意) 自分は已に琵琶を聞いて悲しんでゐたが今又述懐をきいて更に悲痛の感を寄せた。ああ我も彼女も同じくこれ天涯淪落の徒で偶然にここで相逢うたと云ふ此偶然をごこまでも尊重したい。自分は去年帝京を去りて此地に來てより間もなく病床の人となり僻地のことごとて無聊を慰めやうにも何等音曲の聴くべきなく花の朝や月の宵さては奥山打しぐれましら高なくその聲をせめて山歌や村笛と思つてこれを肴に一献を汲むものの我ももとの藝なし猿でとても人なみの曲節をまねることは能うし得ない。ところへ今晚はからず御身の琵琶をきき思はず神行き魂馳せて近頃快心の至りである。どう

かもう一曲何かを弾いて聞かせられよ。たつての所望だから……。すればわしは御身の身の上話を韻文化して琵琶行の一篇を作らうからと言ふと彼女はしばらく無言で傾聴端座してゐたが深い思入れのあるらしい様子で又撥をとつてこんどは思ひきり切迫した物凄いやうな曲種を一つ弾いたが一座のもののは又重ねて袂をうるほしたがさて今晚誰が一ばんの泣きがしらかと云ふとはづかしながら多涙の余は上衣しごに泣かされた。

送三孔巢父謝病歸遊江東。兼呈李白。

杜

甫

巢父掉頭不肯住。東將入海隨煙霧。詩卷長留天地間。  
釣竿欲拂珊瑚樹。深山大澤龍蛇遠。春寒夜陰風景暮。  
蓬萊織女回龍車。指點虛無引歸路。自是君身有仙骨。  
世人何得知其故。惜君只欲苦死留。富貴何如草頭露。  
蔡侯靜者意有餘。清夜置酒臨前除。罷琴惆悵月照席。  
幾歲寄我空中書。南尋禹穴見李白。道甫問訊今何如。  
〔譯〕巢父頭を掉つて住まらぬことを肯せず。東の方將に海に入つて煙霧に隨はんとす。詩卷長く留む

天地の間。釣竿拂はんと欲す珊瑚の樹。深山大澤龍蛇遠し。春寒夜陰風景暮る。蓬萊の織女龍車をめぐらし。虚無を指點して歸路を引く。自らは君が身仙骨あり。世人何ぞその故を知ることを得ん。君を惜んで只苦死して留めんことを欲す。富貴何ぞ如かん草頭の露。蔡侯は靜者にして意餘りあり。清夜置酒して前除に臨む。琴を罷めて惆悵すれば月席を照らす。幾歲か我に寄せん空中の書。南の方禹穴を尋ねて李白を見ば。道へ甫問訊す今何如と。

〔大意〕親友巢父君はいくらとごめてもさかす東の方海濱近く轉地療養をして煙霞を友としやうと云ふ。君は天才詩人で今や其佳吟を永く天地の間に留めて身は一本の釣竿に飄然として江河に親しまうとしてゐる。春寒料峭として夜は更け龍蛇に比すべき君は深山大澤のほとりをさして潛み蓬萊の織女は龍車をめぐらして虚無をさしめして「サアお歸り」と云ふ。君は實に仙骨稜々餘の凡人の窺ひ知ることを得ざるものがある。蔡侯も亦仙骨自ら仙骨を知つて今宵此催しを開かれたが折しも月澄み琴聲わてをいかに惜別のかなしみにたへぬものがある。君とわかれていつ頃又なつかしい音信をもらふことが出来やうか。若も南の方禹穴のあたりを通つたならば李白によろしくと云つてくれ給へ。

送三孔巢父謝病歸遊江東。兼呈李白。

杜

甫

少年易老學難成。

一寸光陰不可輕。

未覺池塘春草夢。

其七 漢 詩

三二一



階前梧葉已秋聲。

〔譯〕 少年老い易く學成り難し。一寸の光陰輕んすべからず。未だ覺めず池塘春草の夢。階前の梧葉已に秋聲。

〔大意〕 年はどりやすく學は成就しにくいものであるからわづかな時間とてあだやおろかに思つてはならない。池塘春草の青春の夢まださめやらぬ中已に階前のあをざり落葉して我身にすさぶ秋の風悔む齒がみの齒もかけてしまふやうになるであらふ。

黄金の交

世人結交須黄金。黄金不多交不深。縱令然諾暫相許。終是悠悠行路心。

〔譯〕 世人交を結ぶに黄金を須ひ。黄金多からずんば交はることも深からず。縱令然諾して暫らく相許すとも。終に是れ悠悠たる行路の心。

〔大意〕 世間の人は交際をするに金錢を費やすのが普通で少しけちなものはあまり人が深く交際をしない。よしや暫らくは互に親密げに交はつてゐても終にはしらの顔の他人となつてしまふ。

江南春

千里鶯啼綠映紅。水村山廓酒旗風。南朝四百八十寺。多少樓臺煙雨中。

〔譯〕 千里鶯啼いて綠紅に映す。水村山廓酒旗の風。南朝四百八十寺。多少の樓臺煙雨の中。

〔大意〕 始め二句江南の春を總叙し後二句眼前髮髯の景を即叙す。見渡すかぎりの山野は黃鳥春を報じて花紅綠葉と相映じ川ぞひの村里や山邊の家々には勢のよい酒旗が風にはためいてゐる。その昔佛法興隆の南朝時代に建てられた四百幾十の寺院堂塔が煙れる霧の上

雁

瀟湘何事等閑回。水碧沙明兩岸苔。二十五絃彈夜月。不勝清怨却飛來。

〔譯〕 瀟湘より何事ぞ等閑に回る。水碧に沙明なり兩岸の苔。二十五絃夜月に彈せば。清怨に勝へずして却つて飛び來らん。

(大意) 心なの雁よ。此風光明媚の瀟湘を見棄て、何しに北の國へ歸るか。今若し湘君(堯の女にし  
て此ほごりに祭らる)の靈が二十五絃を月下に弾じたならば幾ら無心の汝と雖その妙音哀調につれら  
れて翼をかへすことであらう。

雪中松柏愈青々。 扶殖綱常在此行。 天下久無龔勝潔。  
人間何獨伯夷清。 義高便覺生堪捨。 禮重方知死甚輕。  
南八男兒遂不屈。 皇天上帝眼分明。

(譯) 雪中の松柏愈々青々たり。綱常を扶殖して此行に在り。天下久しく龔勝の潔なし。人間何ぞ獨  
り伯夷の清なる。義高くして便ち覺る生捨つるに堪ふるを。禮重くして方に知る死の甚輕きを。南八  
男兒遂に屈せず。皇天の上帝眼分明なり。

(大意) 松柏は雪に遇うて愈其綠を發揮することく吾人道の救濟を以て自ら任じて此行に在り。天下  
は久しく龔勝の人(廉潔質直の人)を缺いて茫々數百載の間獨り伯夷の清あるのみ。義の高きに遇へば  
乃死も亦辭せざるべきを覺り禮の重要なるを覺るにつれて乃死の甚輕きをも自覺する。南八男兒(唐

の南霽雲が張巡と共に節に死んだ故事に由つて氣慨ある男子の意に用ふ。)遂に屈せず。上天の神明唯  
よく我心事を諒とするであらう。

哀 江 頭

杜 甫

小老野老吞聲哭。 春日潛行曲江曲。 江頭宮殿鎖千門。  
細柳新蒲爲誰綠。 憶昔霓旌下南苑。 苑中萬物生顏色。  
昭陽殿裏第一人。 同輦隨君侍君側。 輦前才人帶弓箭。  
白馬嚼齧黃金勒。 翻身向天仰射雲。 一箭正墮雙飛翼。  
明眸皓齒今何在。 血污遊魂歸不得。 清渭東流劍閣深。  
去住彼此無消息。 人生有情淚沾臆。 江水江花豈終極。  
黃昏胡騎塵滿城。 欲往城南忘城北。

(譯) 少老の野老聲を吞んで哭す。春日潛行す曲江の曲。江頭の宮殿千門を鎖し。細柳新蒲誰が爲に  
綠なる。憶ふ昔霓旌南苑に下り。苑中の萬物顏色を生ず。昭陽殿裏第一の人。輦を同じうし君に隨ひ君側  
に侍す。輦前の才人弓箭を帶び。白馬嚼齧す黄金の勒。身を翻して天に向ひ仰いで雲を射る。一箭正  
に墮つ雙飛翼。明眸皓齒今いづくにか在る。血は遊魂を汚してかへり得ず。清渭東に流れて劍閣深く

去住彼此消息なし。人生情あり涙臚を沾ほす。江水江花豈終に極まらんや。黄昏胡騎塵城に滿つ。城南に往かんと欲して城北を忘る。

(大意) 玄宗安祿山の亂をさけて南蜀に行幸し楊貴妃馬嵬ヶ原に死してそのかみ清遊の曲江いごうらさびたるかなしさを弔へるもの。杜甫が得意の詩境正に這般思慕蜘蛛の間に在りと謂ふべきである。少陵の一匹夫杜甫は春日曲江のほごりを訪ひ聲をのんで慟して哭した。

江頭の宮殿は何れも門をしめきり細柳新蒲の美しき緑も誰一人賞翫するものがない。おもへば昔天皇此南苑に成らせられ苑中の人も草も木も皆此上なき面目を施した。昭陽殿中第一の美人と云はれた楊貴妃が君と相乗りして隨行して始終御側はなれずつかへてをつた。禁前には才人數多弓矢を帯び白馬に黄金の勒をかけ身をかはして一矢の下に二鳥を射おとし一座の興をそへて君臣悦に至つた。その時の美人貴妃は今はどこに居られることぞ。馬嵬原頭血芳魂を汚して玉容どこしへに歸らず。清渭の流れと共に遠く東方の一涯に在り。而して皇帝は遙の西南蜀の棧道にゐませり。彼此雲煙數千萬里消息杳として聞くべからず。

あゝ人は感情に動くもの。此をおもへば血涙胸にみつ。洋々たる江水よ爛漫たる江花よ。汝の湛ふるかぎり汝の開くかぎり多恨の遊子とこしへに怨みに泣くであらう。

徘徊願望幾たびか怨嗟のおもひに耽るうち日は早やたそがれかたとなり安祿山の麾下が馬の蹄に塵煙をたてゝやつてきたのであわてゝ城南に行かうと思つてどこが北やら南やら行く先さへも迷つた。

青天有月來幾時。我今停盃一問之。人攀明月不可得。

月行却與人相隨。皓如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。

但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。白兔搗藥秋復春。

姮娥孤栖與誰鄰。今人不見古時月。今月曾經照古人。

古人今人如流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。

月光長照金樽裏。

(譯) 青天月あつてよりこのかた幾時ぞ。我今盃をどめて一たび之に問ふ。人明月によづるは得べからず。月行却て人と相隨ふ。皓として飛鏡の丹闕に臨むが如し。綠煙滅し盡きて清輝發す。但見る宵に海上より來るを。寧ぞ知らん曉に雲間に向つて没するを。白兔藥を搗く秋復春。姮娥孤栖して誰と鄰る。今人は見ず古時の月を。今曉曾經に古人を照らす。古人今人流水の如く。共に明月を看る皆斯

の如し。惟願ふ歌に當り酒に對するの時。月光の長へに金樽の裏を照らさんことを。

（大意）大空月を浮べて以來幾年を経過したことであらう。我今盃をとめて一たび之を問ふ。人は明月までよちのぼることは容易なことではないが月は却つて人と相したがつて至るところを照らしてゐる。白くきら／＼としてまるで明鏡の飛んで宮殿に朝するかと疑はれる。宵にちらりと東の山の端に出るのはわかつて居るがあげにスーツと雲間に隠れて行く様はわからない。月中白兔あり藥をついて春もくれ秋も去りして幾年月を暮すことであらう。又月中には姮娥と云ふ美人があつていつも獨すみの淋しさに暮してゐることであらう。今の人は昔の月を知らないが今の月は曾てはいつも古人を照らしてゐたものである。古人と云ひ今人と云ひまるで流るゝ水のやうにせんぐり變つて行くがその明月に對して發する讚歎の聲は蓋同じであらう。よしそれはともかくも酒すきの我唯かうやつて一杯傾ける時にせめてきれいな汝のかげが此よい酒樽のうちを照らしてほしいと思ふ。

誰家玉笛暗飛聲。

散入春風滿洛城。

此夜曲中吹折柳。

何人不起故園情。

（譯）誰が家の玉笛ぞ暗に聲を飛ばす。散じて春風に入つて洛城に滿つ。此夜曲中折柳を吹く。何人

か故園の情を起さらん。

（大意）暗中聲あり。鳴笛明々たり。餘音嫋々春風をこよませて洛の城中に入る。而もその曲は懷郷の意をあやなせる折柳と云ふのである。此を聴くもの誰か故園の情を起さないものがあらうか。

巳 亥 歲

曹 松

澤國江山入戰圖。

生民何計樂樵蘇。

憑君莫話封侯事。

一將功成萬骨枯。

（譯）澤國の江山戰圖に入る。生民何ぞ計らん樵蘇を樂むを。君に憑む話すこと莫れ封侯の事。一將功成るも萬骨枯れむ。

（大意）今や澤國の山河は修羅の巷と化し生民その業に安んぜずして誠に酸鼻の極である。君よ。封侯の事を話して無名の英雄一劍天下に呼號するやうな野心をそゝることをやめよ。一將功成ることも萬卒之が爲に犠牲となつて赫灼たる功名をば血と涙とをして裏書するものがあらう。

太 行 路

百 居 易

太行之路能摧車。

若比人心是坦途。

巫峽之水能覆舟。

若比人心是安流。

人心好惡苦不常。

好生毛羽惡生瘡。

其 七 漢 詩

與君結髮未五載。 豈期牛女爲參商。 古稱色衰相棄背。  
 當時美人猶怨悔。 何況如今鸞鏡中。 妾顏未改君心改。  
 爲君熏衣裳。 君聞蘭麝不馨香。 爲君盛容色。  
 君看珠翠無顔色。 行路難難重陳。 人生莫作婦人身。  
 百年苦樂由他人。 行路難難於山險於水。 不獨人間夫與妻。  
 近代君臣亦如此。 君不見左納言右納史。 朝承恩暮賜死  
 行路難不在水不在山。 唯在人情反覆間。

(譯) 太行の路能く車を摧く。若し人心に比すれば是れ坦途。巫峽の水能く舟を覆へす。若し人心に比すれば是安流。人心の好悪苦常ならず。好は毛羽を生じ悪は瘡を生ず。君と結髮未だ五載ならず。豈期せんや牛女參商を爲すを。古に稱す色衰ふれば相棄背すと。當時美人猶怨悔す。何ぞ況んや如今鸞鏡の中。妾が顔未だ改らず君が心改まる。君が爲に衣裳を熏す。君蘭麝を聞いて馨香とせず。君が爲に容色を盛んにす。君珠翠を見て顔色なし。行路難重ねて陳じ難し。人生作るなかれ婦人の身。百年の苦樂他人に由る。行路難山よりも難く水よりも險し。獨り人間夫と妻とのみならず。近代君臣亦

此の如し。君見すや左納言右納史。朝に恩を承け暮に死を賜ふ。行路難水に在らず山に在らず。唯人情反覆の間に在り。

(解) 巫峽。水甚だ急にして且險蜀の三峽の一つ。牛女。牽手織女二星のこと。一年に唯一回七月七日に逢ふと云ふ。參商。參と商との二星が遠くへだてゝゐる如く離別日久しいこと。左納言右納史。二つとも重要な官職。

(大意) 太行の路は能く車をくだくけれども人の心に比ぶればまだしもなる路である。巫峽の水はよく舟をくつがへすが人情のくつがへりやうにくらぶれば寧ろ安流と謂ふべきである。人の心の好しあしきゝらひは區々として定まらぬものである。よければ毛羽の如くやさしくあたゝかくわるければ瘡の如くきたなくいやらしい。

御身と結婚をしてまだ物の五年と立つてはゐないのに早くもわかれゝとなつて年に一べん逢ふ逢はずの契りにならうとはあまりにひどいかはりである。昔は女のみめが衰へると棄てられたと云ふがそれはまだしも此節では美人も尙此怨みがある。鏡にうつす妾が面輪は少しも嫁た時とかはつてはゐないのに夫の心に秋風吹いて折角衣裳に蘭麝の香をたきしめても別に「いゝ香だ」とも云ふてはくれず折角したゝるやうな黒髪に珠をかざつて御化粧に念を入れても別に「美しくなつた」とも云ふてもく

れず。疎ましい目つきで知らぬ顔である。あゝ人生行路の難きは二度と形容の詞もない位である。又の世に生れるならばごんなことがあつても女には生れるものでない。一生涯の苦樂は皆夫次第でどうにでもならなければならぬ。人生行路難わけても婦人の處世の險は山や水の形容しつくす處ではない。曾に夫婦の間のみならず近頃は君臣の間亦之と相似たものがある。見よ。左納言と云ひ右納史と云ひ朝廷樞要の官に在りながら朝に君の寵を受けてゐるかと思ふと暮には生害を仰せつけられる。行路難は巫峽の水でもなければ太行の路でもない。唯人情の七面鳥のやうに變轉たよるところのないと云ふ點にある。

失

題

項

羽

力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈汝何。

(譯) 力は山を抜き氣は世を蓋ふ。時に利あらずして騅逝かず。騅の逝かざるは奈何ともす可し。虞や虞や汝を奈何せん。

(大意) 項羽が最後に垓下で戦死する前その寵姫虞美人との訣れを惜んでよんだもの。我力よく山を抜き我力能く一世を蓋ふ。夫程の英雄でも時運の然らしむる所我軍利あらずして愛馬の

騅も進まない。騅の進まぬ位のことは何とかしやうがあるがいかあいさうなのは虞美人その方である。

飲中八仙歌

杜

甫

知章騎馬似乘船。	眼花落井水底眠。	汝陽三斗始朝天。
道逢麴車口流涎。	恨不移封向酒泉。	左相日興費萬錢。
飲如長鯨吸百川。	銜杯樂聖稱避賢。	宗三瀟灑美少年。
舉觴白眼望青天。	皎如玉樹臨風前。	蘇晉長齋繡佛前。
醉中往往愛逃禪。	李白一斗詩百篇。	長安市上酒家眠。
天子呼來不上船。	自稱臣是酒中仙。	張旭三杯草聖傳。
脫帽露頂王公前。	揮毫落紙如雲煙。	焦遂五斗方卓然。
高談雄辯驚四筵。		

(譯) 知章が馬に騎るは船に乗るに似たり。眼花井に落ち水底に眠る。汝陽三斗始めて天に朝す。道に麴車に逢うて口涎を流す。恨むらくは封を移して酒泉に向はざるを。左相の日興萬錢を費し。飲むは長鯨の百川を吸ふが如く。杯を銜んで聖を樂しみ賢を避くと稱す。宗三は瀟灑たる美少年。觴をあ

げて白眼青天を望む。皎として玉樹の風前に望むが如し。蘇晋長齋す繡佛の前。醉中往々逃禪を受す李白一斗詩百篇。長安市上酒家に眠る。天子呼び來れども船に上らず。自ら稱す臣は是酒中の仙と。張旭三杯草聖傳ふ。帽を脱いで頂を露はす王公の前。毫を揮ひ紙に落せば雲煙の如し。焦遂五斗方に卓然。高談雄辯四筵を驚かす。

(大意) 大酒の人八人のことを詠じたもの。

- 一、賀知章は酒をのんで馬にのるのにまるで船に乗るやうにフカフカとして遂あやまつて井にはまつてもまだ眼のさきがちらついて井のなかでグーグーとねてゐる。
- 二、汝陽は毎日是非とも參朝するまへに三斗の酒は平げねば腹の蟲が承知しないと云ふ人でそれでもまだ中途酒をのせた車に出あふと涎をながして羨ましうにして「何でおれを酒ばかりの國の領主にしてくれないか」と怨み顔である。
- 三、左相は毎日の酒手が萬錢でイザとなつて飲みかけると鯨が川の水を飲みほすやうにガブ／＼と息をもつがすのみつくして「どうも酒は清酒(聖)に限る。濁酒(賢)は駄目だ」と云ふ。
- 四、宗三はさつぱりとした美少年だが一たび杯に向へば顔るつきの猛者で白眼天をにらめまるで玉樹が風前にのぞんだと云ふ面持で顔にも似合はぬ大酒家である。

- 五、蘇晋は書齋や佛壇で所きらはす左手をはたらかせて是も一種の禪道だと云ふ。
- 六、李白は一斗程のむと詩心が湧いて百篇位は一氣呵成である。常に長安のちまたに酒をのんで天子のお召があつても酒屋の門をはなれず。船に乗れと云はれても容易にはのらず。「我輩は是でも酒中の仙人様だ」ときめこむところ亦なか／＼の豪氣ものである。
- 七、張旭は草書の名人だが少くとも三杯を傾けて酒氣のぬけぬうちでないに筆が走らぬと云ふ。三杯機嫌で王公の前でもかまひこなく冠をぬぎ頭をむき出しにして筆を揮ふと意氣筆端にあふれて見る見る雲龍蒸騰の奇字をあらはす。
- 八、焦遂の酒量は無慮五斗でそれでも舌ももつらさず談論風發滿座舌をまくと云ふ。

長安古意

盧 照 隣

長安大道連狹斜。	青牛白馬七香車。	玉輦縱橫過主第。
金鞍絡繹向侯家。	龍銜寶蓋承朝日。	鳳吐流蘇帶晚霞。
百丈游絲爭繞樹。	一群嬌鳥共啼花。	啼花戲蝶千門側。
碧樹銀臺萬種色。	複道交窗作合歡。	雙闕連蔓垂鳳翼。

其七 漢 詩

梁家畫閣天中起。漢帝金莖雲外直。樓前相望不相知。曾經學舞度芳年。陌上相逢詎相識。借問吹簫向紫煙。比目鴛鴦真可羨。得成比目何辭死。願作鴛鴦不羨仙。好取門簾帖雙燕。雙去雙來君不見。生憎帳閣繡孤鸞。片片行雲著蟬鬢。雙燕雙飛繞畫梁。羅帷翠衣鬱金香。含嬌含態情非一。纖々初月上鴉黃。鴉黃粉白車中出。御史府中烏夜啼。妖童寶馬鐵連錢。娼婦盤龍金屈膝。遙遙翠幃沒金堤。廷尉門前雀欲栖。隱隱朱城臨玉道。俱邀俠客芙蓉劍。挾彈飛鷹杜陵北。探丸問客渭橋西。清歌一轉口氤氳。共宿娼家桃李蹊。娼家日暮朱羅裙。南陌北堂連北里。北堂夜夜人如月。南陌朝朝氣似雲。南陌北堂連北里。佳氣紅塵暗天起。五劇三條控三市。弱柳青槐拂地垂。

漢代金吾千騎來。翡翠眉蘇鸚鵡杯。羅襦寶帶爲君解。燕歌趙舞爲君開。別有豪華稱將相。轉日回天不相讓。意氣由來排灌夫。專權判不容蕭相。專權意氣本英雄。生虬紫燕坐生風。自言歌舞長千載。自謂驕奢凌五公。節物風光不相待。桑田碧海須臾改。昔時金塔白玉堂。只今唯見青松在。寂寂寥寥楊子居。年年歲々一牀書。獨有南山桂花發。飛來飛去襲人裾。

(譯) 長安の大道狹斜に連り。青牛白馬七香車。玉釐縱橫主第を過り。金鞍絡繹として侯家に向ふ。龍は寶蓋を街んで朝日を承け。鳳は流蘇を吐いて晚霞を帶ぶ。百丈の游絲争うて樹を繞り。一群の嬌鳥共に花に啼く。

啼花戲蝶千門の側。碧樹銀臺萬種の色。複道交窗合歡を作し。雙闕連葦風翼を垂る。梁家の畫閣天中に起り。漢帝の金莖雲外に直し。樓前相望むも相知らず。陌上相逢ふ詎ぞ相識らん。



借問す簫を吹いて紫煙に向ふを。曾て經たり舞を學び芳年を度ることを。比目となるを得ば何ぞ死を辭せん。願くは鴛鴦となつて仙を羨まざらん。比目鴛鴦眞に羨むべし。雙去雙來君見すや。生憎や帳閣孤鸞を繡す。好取す門簾帖雙燕。

雙燕雙び飛んで畫梁を繞る。羅帷翠衣鬱金香。片々たる行雲蟬鬢をつく。織々たる初月鴉黃に上る。鴉黃粉白車中に出で。嬌を含み態を含みて情一にあらす。妖童寶馬鐵連錢。娼婦盤龍金屈膝。御史府中烏夜啼き。廷尉門前雀栖まんと欲す。隠々たる朱城玉道に臨み。遙々たる翠轆金堤を没す。彈を挟み鷹を飛ばす杜陵北。丸を探り客に問ふ渭橋の西。俱に邀ふ俠客芙蓉の劍。共に宿う娼家桃李の蹊。

娼家日暮れて朱羅の裙。清歌一たび轉じては口氣氤。北堂夜々人月の如く。南陌朝々騎雲に似たり。南陌北堂北里に連り。五劇三條三市を控く。弱柳青槐地を拂つて垂る。佳氣紅塵天に暗うして起る。漢代金吾千騎來り。翡翠の眉蘇鸚鵡の杯。羅襦寶帶君が爲に解き。燕歌趙舞君が爲めに開く。別に豪華の將相と稱する在り。日を轉じ天を回らして相譲らず。意氣由來灌夫を排し。專權判して蕭相を容れず。專權意氣本豪雄。青虬紫燕坐ながら風を生ず。自ら言ふ歌舞千載を長うすと。自ら謂ふ驕奢五公を凌ぐと。

節物風光相待たす。桑田碧海須臾に改まる。昔時金階白玉の堂。只今唯見る青松のあるを。寂々寥々たり楊子が居。年々歳々一牀の書。獨り南山桂花の發くあつて。飛び來り飛び去り人の裾につく。

(解) 狹斜。道はばせまき町。長安の狹斜最賑はしくして娼家多く並び立つより後世色町のことを狹斜の巷と云ふ。

七香車。七種の香木を以て作つた車。流蘇。ふさ。複道。木を空中にかけて本道以外に設けた道。梁家畫閣。後漢の將軍梁冀土木を盛にす。漢帝金莖。漢帝の金莖漢の武帝銅柱の上に白露盤をおき夜露をうけて仙人の露と稱して飲む。鐵連錢。黒毛の中に錢を連ねたやうなまゝの斑あるもの。盤龍詩繪のかんざし。金屈膝。は金屈戌の誤金屏風のやうなもの。芙蓉劍。俠客の帯ぶるもの。五劇。五方に通じてゐる道。三市。晨と朝と夕との市。漢代金吾。漢代からある官名で其人美麗なる車に騎る翡翠眉蘇。結構なる綠酒。鸚鵡杯。貝の殻を割きて作つた杯。燕歌趙舞。燕や趙の美人國の歌舞。青虬紫燕共に一日千里の駿馬。

(大意) 此詩始めに長安の繁盛を述べ次に青年子女遊娼の痴態武將相の大盡驕ぎ節物風光の推移人生悠忽の感慨より最後に歡樂極まつて哀情多しの意を以て結ぶ。長安の大通りは狹斜の巷に連つて香車玉輦を青牛白馬にひかせたり金鞍をつらねつらねたりして立派な邸宅や高貴の家のあたり往訪頻々と

して目もあやかなる様である。朝には車上の龍王寶蓋をふくんで朝日にはこり夕には輦上の鳳凰流蘇を吐いて金色晚露にきらびやかに映ね爛るが如きかげろふはボカリ／＼と所々にたむわれてさへする百鳥の聲もそぞろになつかしく花より花に飛び狂ふ蝶の姿の愛らしく長安の春景真に愛すべきものがある。

複道千門の窓戸を交へて歡聲そこに湧き大厦高樓臺を並べて鳳翼飾らる。梁家畫閣漢帝の金莖それにままさる立派な建て物が雲外に聳ね樓前陌上相逢へど處も知らず。名も知らず。知るは互の粹無粹だけである。此等繁盛の兒の云ひ艸は海に在つては比目の魚となり江に在つては鴛鴦の鳥となることを得ば不老不死の仙人何ぞ羨むに足らん。それに何ぞや此帳見ればおぞや配なき鸞一羽。さはれ飛び交ふ燕を見れば翼ならべて陸まじげである。どうか自分もあの様に在りたい」と。  
その可憐の双燕飛ぶところ脂粉こつてりの美人が各自特有の愛嬌をたゞへてモシモシと云ふ。そこへやつてくる大畫粹客は鐵連錢の馬にのつたる美少年や御史の府中につとめてゐるお歴々や廷尉の顯官に在る人ばかりで役所に蜘蛛の巢が張つても平氣で有頂天に騒いでゐる。或は杜陵の北や渭橋の西に狩りくらしして男だてこれみよがしの芙蓉の劍を提げた俠客もあり。此等一切の遊治郎がたそがれ待つて續々娼家にとまりこむと娼家の美女はあらんかぎりの優待をして羅襦寶帯も之が爲に解き燕歌趙舞

も之が爲に惜しまない。

各自の遊蕩振りに一頭地を抜いてゐるものは身將相の權門にして天日でも自由にひるがへす程の意氣古への灌將軍以上に出で青虬紫燕にも優るやうな駿馬にまたがつて世の中は舞へや。歌へや。飲めや騒げや。唯これだけだと云はぬばかりの散財をする。

併し一年には春秋の變遷ある如く人にも盛衰は免れない。そのかみ將相の玉堂を見し所今は松風音ばかり。美人もつまりは一介の鬪體に晴着きたものと悟つては依然たる讀書を娛んで年々歳々一牀の書を愛讀してゐる方がどれ程よいかわからない。

楓橋夜泊

張

繼

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。

夜半鐘聲到客船。

(譯) 月落ち烏啼いて霜天に滿つ。江楓の漁火愁眠に對す。姑蘇城外の寒山寺。夜半の鐘聲客船に到る。

(解) 楓橋。今の蘇州府の姑蘇城外の入江に架せる橋。姑蘇城。春秋時代吳の都のあつた所で今の蘇州府。寒山寺。寒山捨得が住んだことがあるから山門の名となつたものだと云ふ。

（大意） 一葉の輕舟油の如き江を滑れば夜半鐘なつて音韻々驚いて目さむれば月は今し西山に傾き鳥啞々とないて嚴霜一白。漁火對岸に搖いて此旅寢の哀愁をそゝる。

望廬山瀑布

李白

月照香爐生紫煙。遙看瀑布挂長川。飛流直下三千尺。疑是銀河落九天。

（譯） 日は香爐を照らして紫煙を生ず。遙に看る瀑布の長川を挂くるを。飛流直下三千尺。疑ふらくは是銀河の九天より落つるかど。

（大意） 日は香爐峯を照らして飛流の水蒸氣の反射光によつて紫煙を生ずるあたりと見れば名だゝる廬山の瀑が長川をかけて直下すること三千尺。到底地上の一河とは思はれず。彼の大空に流ると云ふなる銀河が九天より落つるのではないかと疑はれる。

曲江

朝回日々典春衣。每日江頭盡醉歸。酒債尋常行處有。人生七十古來稀。穿花蛺蝶深々見。點水青蜓款々飛。傳詔風光共流轉。暫時相賞莫相違。

（譯） 朝より回つて日々春衣を典す。毎日江頭盡酔うて歸る。酒債尋常行く處に有り。人生七十古來稀なり。花を穿つ蛺蝶は深々として見わ。水に點する青蜓は款々として飛ぶ。語を傳ふ風光共に流轉す。暫時相賞して相違ふこと莫れ。

（大意） 毎月春着を質において酒を買つてはのみくするので至るところ酒代がのこつてゐる。けれどもかの花に戯るゝ蝶や水に羽うつ蜻蛉を見れば陽氣な吾々は浮かれないわけには行かぬ。人間五十七が定命で七十才は古から少ない。して見れば生命のあるうち浮かれ騒ぐに限るではないか。

公子行

劉延芝

天津橋下陽春水。天津橋上繁華子。馬聲迴合青雲外。人影搖動綠波裏。綠波清迴玉爲砂。青雲離披錦作霞。可憐楊柳傷心樹。可憐桃李斷腸花。此日傲遊邀美女。此時歌舞入娼家。娼家美女鬱金香。飛去飛來公子傍。的的朱簾白日映。娥娥玉顏紅粉妝。花際徘徊雙蛺蝶。池邊顧步兩鴛鴦。傾國傾城漢武帝。爲雲爲雨楚襄王。

其七 漢詩

三四三

古來容光人所羨。 况復今日遙相見。 願爲輕羅著細腰。  
 願爲明鏡分嬌面。 與君相向轉相親。 與君雙棲共一身。  
 願爲貞松千歲古。 誰論芳槿一朝新。 百年同謝西山日。  
 千秋萬古北邙塵。

(譯) 天津橋下陽春の水。天津橋上繁華の子。馬聲迴合す青雲の外。人影搖動す緑波のうち。緑波清  
 適玉を砂と爲し。青雲離坡錦を霞となす。憐むべし楊柳傷心の樹。憐むべし桃李斷腸の花。此日傲遊  
 美女を邀へ。此時歌舞娼家に入る。娼家の美女鬱金香。飛び去り飛び来る公子の傍。的々たる朱簾白  
 日に映じ。娥々たる玉顔紅粉妝ふ。花際徘徊す双蝶。池邊顧歩す兩鴛鴦。國を傾け城を傾く漢の武  
 帝。雲となり雨となる楚の襄王。古來容光人の羨むところ。況んや復今日遙に相見ををや。願はくは  
 輕羅となつて細腰につかん。願はくは明鏡となつて嬌面を分たん。君と相向つて轉相親しみ。君と双  
 び棲んで一身を共にせん。願はくは貞松となつて千載古びん。誰が論せん芳槿一朝の新なるを。百年  
 同じく謝す西山の日。千秋萬古北邙の塵。

(解) 天津橋。洛陽貫の處に架せる橋。傾國傾城。漢の武帝寵姬李夫人の爲に國を傾け城を傾けた

と云ふ。後世美人を傾城と云ふのも此から起る。爲雲爲雨。楚襄王一日夢に神女と契る。神女曰く「妾は  
 これ巫山の神女朝には雨となり夕には雲となり大王雲雨を見給はゞ妾をな忘れ給ひそ」と。

(大意) 天津橋下春流洋々。天津橋上貴公子揚々。馬の嘶きは高く青雲の外に響き往き來の人のかけ  
 は深く緑波のうちにうごめく緑波清くたへつて玉を砂とまがふべく青雲はなれ開いて錦霞の如し。楊  
 柳は傷心の色にめぐみ桃李は斷腸の色に咲く。此好適の背景にうかれて一日千金の邀遊をこころみ歌  
 舞音曲にうかるべく娼家に入れば娼家の美女は十二分に身じまひをしてぬかりなく愛嬌をふりまいて  
 貴公子のそばにつきまどうて御機嫌をとる。

そこでのた々たる朱簾に輝々たる白日が映り蛾々たる玉顔をしていやが上に美しく見せる。庭園花に見  
 ざるれば睦まじく飛ぶ雌蝶雄蝶。池邊緑波に一瞥を投ぐれば鴛鴦翼をならべて嬉遊す。昔漢の武帝は  
 李夫人の爲に國を傾け城を傾け楚の襄王は巫山の神女と契つて行雲行雨云々の誓ひをしたと云ふが美  
 貌は昔から人の羨むところ。况や今日眼前に遠目に見せつけられては尙更人生を惱殺するの趣がある  
 まゝならうことなら輕羅となつてあの優しい腰にまつはりたいものである。また出来ることなら明鏡  
 となつてやさしの君が朝夕うつす顔に心を慰めやう。若し左様のごとが出来ぬまでも君と相對して親  
 しき交らひをかはし異體同心の仲らひもならう。

なごと云うて松の千年のいつまでも不夜喜見の歡樂に酔うて居てもはかなき浮世の榮華はあさがほの露のひぬまの一刹那だけのことで百年ふれば醜さも美きも同じく北邙の塵と化し千秋萬古、復、舊の歡樂を見ることが出来ない。

山中問答

李杜

問余何意栖碧山。

笑而不答心自閑。

桃花流水杳然去。

別有天地非人間。

(譯) 余に問ふ何の意を碧山に栖む。笑つて答へず心自ら閑なり。桃花流水杳然として去る。別に天地の人間に非ざるあり。

(大意) 自問自答の體によつて閑雅の境に自適せることを述べたもの。

「一體お前さんはどうして此碧山にすむ氣になつたのか」と自分で自分に問うて見ても一向こたへがない。唯微笑してゐるだけだが此心持は誠に静なものである。流水桃花をうつしてはるく去り全く人間界を離れた別天地の趣がある。

秋日山行

杜牧

遠上寒山石徑斜。

白雲生處有人家。

停車坐愛楓林晚。

霜葉紅於二月花。

(譯) 遠く寒山に上つて石徑斜なり。白雲生ずる處人家あり。車を停めて坐るに愛す楓林の晩。霜葉は二月の花よりも紅なり。

(大意) 遠く冬枯の山に上れば磴道斜に白雲たなびくあたり人家の三々伍々點在するあり。そこに車をどごめて楓林の暮色を愛す。霜を帯びたる紅葉はは二月の花よりも尙紅なりだ。

白居易

把鏡照面心茫然。

既無長繩繫白日。

又無大藥駐朱顏。

朱顏日夜不如故。

(譯) 鏡を把つて面を照らせば心茫然たり。既に長繩の白日を繋ぐなく。又大藥の朱顏を駐むるなし。朱顏日夜故の如くならず。

(大意) 鏡を把つて顔を見ると心茫然として自失せんばかり。朱顔色褪せて愁波深く刻み長繩を以て白日をつながんとすれども大藥を以て朱顏をどいめんとすれども匆々たる烏兔しばらくも停止すべからず。噫やんぬるかな。

滕王高閣臨江渚。

佩玉鳴鸞罷歌舞。

畫棟朝飛南浦雲。

珠簾暮捲西山雨。

間雲潭影日悠悠。

物變星移幾度秋。

閣中帝子今何在。

檻外長江空自流。

(譯) 滕王の高閣江渚に臨み。佩玉鳴鸞歌舞を罷む。畫棟朝に飛ぶ南浦の雲。珠簾暮に捲く西山の雨。間雲潭影日々に悠々たり。物變り星移るいくたびの秋。閣中の帝子今いづくにかある。檻外の長江空しく自ら流る。

(大意) 滕王閣は江のほとり近くにたてられて今や佩玉鳴鸞の音もなく清歌慢舞のおともなく朝には南浦の雲に畫棟映じ夕には西山の雨に珠のみすをまき雲しづか水又しづか日も静かなうちにも流る。月日は流れてやまず。物は變り星は移つて幾春秋。あゝそのかみ此閣を建てました王子は今いづく? 檻外の長江問へども答へず。碧流尙往年の如く湛へてゐる。

富家不用買良田。

書中自有千鐘粟。

安居不用架高堂。

書中自有黃金屋。

出門莫恨無人隨。

書中車馬多如簇。

娶妻莫恨無良媒。

書中有女顏如玉。

男兒欲遂平生志。

六經勤向窓前讀。

(譯) 家を富ますに良田を買ふを用ひず。書中自ら千鐘の粟あり。居を安くするに高堂を架くるを用ひず。書中自ら黄金の屋あり。門を出づるに人の隨ふ無きを恨む莫れ。書中車馬多く簇の如し。妻を娶るに良媒無きを恨む莫れ。書中女あり顔玉の如し。男兒平生の志を遂げん欲せば。六經つとめて窓前に向つて讀め。

(大意) 家を富ますには田地を買はなくても書物をよめば千石の穀物あり。住宅を結構にするには大厦高樓を建てる必要はない。書中自ら立派な邸宅がある。門を出て隨行員の無いことを恨むよりは書物をよめば車馬簇の如きを見る。妻をめとるに良い仲人のないことを憂ふる必要はない。書中の美女玉の如きものがある。男兒平素の志をしとげやうと思ふならば窓前に向つて六經を繙くことを怠ること勿れ。

白髮蕭々臥澤中。 祇憑天地鑑孤忠。 阨窮蘇武餐毼久。

憂憤張巡嚼齒空。 細雨春燕上林苑。 頽垣夜月洛陽宮。

昨心未與年俱老。 死去猶能作鬼雄。

(譯) 白髮蕭々として澤中に臥す。祇に憑る天地孤忠に鑑みるを。阨窮蘇武毼を餐うて久し。憂憤張巡齒を嚼んで空し。細雨春燕上林苑の苑。頽垣夜月洛陽の宮。昨心未だ年と俱に老いす。死去猶能く鬼雄と作らん。

(大意) 白髮惘然の態をして此澤中に老ゆと雖上天應に我孤忠を憫れむことであらう。漢の蘇武は寒中毼毛を食つて命を繋ぎ唐の張巡は自ら齒を食ひしばつて齒を傷うて節に殉じた。春燕巢くふに忙しい御獵の林。夜月徒に衰頽を照らす洛陽の宮。此を救はうとして曾て慷慨の氣を起し一氣未だ年と共に老碌せず。よしやこのまゝ死すとも猶よく忠義の鬼とならうぞ。

翻手作雲覆手雨。 紛紛輕薄何須數。 君不見管鮑貧時交。

此道今人棄如土。

貧 交 行 社 甫

此道今人棄如土。

翻手作雲覆手雨。

紛紛輕薄何須數。

君不見管鮑貧時交。

此道今人棄如土。

(譯) 手を翻へせば雲となり手を覆へせば雨。紛紛たる輕薄何ぞ數ふることを須ひん。君見ずや管鮑貧時の交。此道今人棄て、土の如し。

(解) 管鮑。管仲と鮑叔のこと。二人は共に春秋時代齊の國に仕へて水魚も曾ならぬ交際をした。

(大意) 今の世の中はまるで手のひらをかへすやうな輕薄なものゝ寄り合ひであるからかの管鮑二人が貧しい時に親しかつたやうな朋友相信する道もまるで土芥のやうにすてゝかへりみるものがない。さて、嘆げかほはしいことである。

吹 笛 社 甫

吹笛秋山風月清。 誰家巧作斷腸聲。 風飄律呂相和切。

月傍關山幾處明。 胡騎中宵堪北走。 武陵一曲想南征。

故園楊柳今搖落。 何得愁中却盡生。

(譯) 笛を吹いて秋山風月清し。誰が家か巧に斷腸の聲を作す。風は律呂を飄へして相和すること切に。月は關山に傍ふて幾處か明らかなる。胡騎中宵北走するに堪へたり。武陵の一曲南征を想ふ。故園の楊柳今搖落すらん。何ぞ愁中却つて盡く生することを得たる。

(大意) 月すみて風清し。此良夜をば誰の家か何の兒か朗々吹笛響斷腸の律呂を爲す。胡騎輕捷にし

て夜中と雖北走すること電の如し。是晉劉琨が歎ある所以なり。武陵の曲には馬援が南征の苦を忍ばしめ楊柳の曲には故園の情をそつて今は秋のことゝて實際は皆凋落してゐるのに我心却つてその一葉一葉までもあり／＼と描かれるとは何と此は音樂の美の至妙の極致に達したものであるまいか。

葡萄酒夜光杯。

欲飲琵琶馬上催。

醉臥沙上君莫笑。

古來征戰幾人回。

葡萄酒の美酒夜光の杯。飲まんと欲して琵琶馬上に催す。酔うて沙上に臥す君笑ふこと莫れ。古來征戰幾人か回る。

（大意）酒は上等の葡萄酒なり。杯は夜光の杯なり。おまけに琵琶ではやしたてられるわと來ては上戸の我輩大に飲まざるを得んではないか……。酔うて沙の上に寝たふけたからとてそんなに笑つてくれるな。むかしから戦地へ行つて無事にかへつたものが幾人あるか。行けばさつと死ぬるにきまつてゐるから今その門出に當つて豪飲を縱にするのである。

鳳凰臺上鳳凰遊。

鳳去臺空江自流。

吳宮花草埋幽徑。

登金陵鳳凰臺

李

白

晋代衣冠成古丘。

三山半落青天外。

一水中分白鷺洲。

總爲浮雲能蔽日。

長安不見使人愁。

（譯）鳳凰臺上鳳凰遊び。鳳去り臺空しくして江自ら流る。吳宮の花草幽徑に埋み。晋代の衣冠古丘と成る。三山半ば落つ青天の外。一水中分す白鷺洲。總べて浮雲の能く日を蔽ふが爲に。長安見えず人をして愁へしむ。

（解）金陵。陳の舊都。鳳凰臺。江寧縣治南に在つて宋の元嘉中王顛鳳のその邊を飛んでゐるのを見てこゝに臺を築き名づけて鳳凰城と云ふ。三山。三つの山と云ふこと金陵に在り名は別になし。二水。秦淮と淮と。白鷺洲。二水にさしはさまれた洲を云ふ。

（大意）曾ては此鳳凰臺上に鳳凰が遊んだと云ふが今ではその鳳も去り臺も朽ちて唯江流のみが昔ながらに湛へてゐる。吳宮の花園も苔むすこみちごかはり晋代の衣冠も寂しい古丘に埋もれ三山は雪間に聳む二水は洲を挟み凡て浮雲の天日を蔽ふが爲になつかしの故都長安は見えず。遊子をして斷腸の至りに堪へざらしめる。

岷江始出於岷山。

其源少水可以濫觴。

及入楚國滄波萬頃。



非船路不可涉也。

(家語)

岷江の始岷山より出づ。其源少水にして以觴を濫ふべし。楚國に入るに及んで蒼波萬頃。船路

(譯) 岷江と云ふ流れはその始め岷山から出てゐるが其源は水少く僅に以て觴を浮べることが出来る位のものであるが楚に入るやうになつてはすつと廣く蒼波萬頃にたへて船路でなくてはわたられない。

(大意) 岷江と云ふ流れはその始め岷山から出てゐるが其源は水少く僅に以て觴を浮べることが出来る位のものであるが楚に入るやうになつてはすつと廣く蒼波萬頃にたへて船路でなくてはわたられない。

江上吟

李

白

木蘭之枻沙棠舟。

玉簫金管坐兩頭。

美酒尊中置千斛。

載妓隨波任去留。

仙人有待乘黃鶴。

海客無心隨白鷗。

屈平詞賦懸日月。

楚王臺榭空山丘。

興酣落筆搖五嶽。

詩成笑傲凌滄洲。

功名富貴若長在。

漢水亦應西北流。

(譯) 木蘭の枻沙棠の舟。玉簫金管兩頭に坐す。美酒尊中千斛をおき。妓を載せ波に隨つて去留に任す。仙人待つあつて黃鶴に乗り。海客心なくして白鷗に隨ふ。屈平が詞賦日月を懸け。楚王の臺榭空しく山丘。興酣にして落筆五嶽を搖がし。詩成つて笑傲滄洲を凌ぐ。功名富貴若し長へにあらば。漢

水も亦應に西北流すべし。

(解) 黃鶴。昔竇子安が仙人となつた時黃鶴が迎に來たと云ふ故事を指す。屈平。戰國時代に於ける楚の厭世詩人。楚王臺。楚の靈王の作つた章華臺。五嶽。支那の四方と中とにある五つの大きな山。

(大意) 枻は木蘭なり。舟は沙棠なり。船首と船尾に立派な樂器を置き中に美酒千斛美妓數多をのせ波のまにまに舟あそびを催はす。箇中の風流は俗人輩にはわからない。昔の竇子安は仙人となつて黃鶴にのり今の吾々は無心に白鷗と共に浮遊する。屈平が詩賦は日月と共に永久に稱へられるけれども楚王のつくりみがいたちものは今空しく荒廢して山丘となつてゐる。知るべし。風流文雅には永久の生命があつて物質的の驕奢はその人と共に滅ぶることを。そこで自分も酒たけなはにして筆をとつて五嶽もゆるがばかりの筆勢を以て詩をつくれば意氣大海を傾けんばかりである。若も功名富貴が悠久の生命あるものならば漢水も亦逆流しよう。そんなことは斷じてない。

江村即事

司空曙

罷釣歸來不繫船。

江村月落正堪眠。

縱然一夜風吹去。

唯在蘆花淺水邊。

(譯) 釣を罷めて歸來船を繫がす。江村月落ちて正に眠るに堪へたり。縱令一夜風吹き去るも。唯蘆

花淺水の邊に在らん。

(大意) 釣りから歸りがけたが船はこのまゝつながすにおかう。江村月落ちて今や眠るには好適の時刻となつた。よしや今夜風が吹いて此船をさらへて行つたところが唯蘆の花ちる淺瀬のあたりにたゞよふと云ふまでだ。

江村の景を寫したスケッチで輕妙洒脱にして無屈托どころが面白い。

代下悲二白頭一翁上

洛陽城東桃李花。

飛來飛去落誰家。

洛陽女兒惜顔色。

行逢落花長歎息。

今年花落顔色改。

明年花開復誰在。

已見松柏摧爲薪。

更聞桑田變成海。

古人無復洛城東。

今日還對落花風。

年年歲歲花相似。

歲歲年年人不同。

寄言全盛紅顔子。

應憐半死白頭翁。

此翁白頭眞可憐。

伊昔紅顔美少年。

公子王孫芳樹下。

清歌妙舞落花前。

光祿池臺開錦繡。

將軍樓閣畫神仙。

一朝臥病無相識。

三春行樂在誰邊。

宛轉蛾眉能幾時。

須臾鶴髮亂如絲。

但看古來歌舞地。

惟有黃昏鳥雀悲。

(譯) 洛陽城東桃李の花。飛び來り飛び去り誰が家に落つ。洛陽の女兒顔色を惜む。行く行く落花に逢うて長へに歎息す。今年花落ち顔色改まり。明年花開き復誰かある。已に見る松柏摧けて薪となるを。更に聞く桑田變じて海となるを。古人復洛城の東になし。今日還つて對す落花の風。年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず。言を寄す全盛の紅顔子。應に憐むべし半死の白頭翁。此翁白頭眞に憐むべきも。伊れ昔紅顔の美少年。公子王孫芳樹の下。清歌妙舞落花の前。光祿池臺錦繡を開き。將軍樓閣神仙を畫く。一朝病に臥して相識なし。三春の行樂誰の邊にか在る。宛轉たる蛾眉能く幾時ぞ。須臾にして鶴髮亂れて絲の如し。但看る古來歌舞の地。惟黃昏鳥雀の悲しむあるを。

(大意) 一言すれば「兎烏匆々人生無常」の歎であるが美辭麗句をつらぬて古來有名なる詩である。洛陽城東桃李の花散りになつて飛來飛去し幾らの家に行く春の趣をそへることであらう。滿都の子女何れも容色の衰へるのを氣するところから行々落花を見て我身の春の暮れに思ひよそへてなげいてゐる。花咲き花散り一春秋を暮らす間にも人生はあわたくしく暮れて松柏の薪にせられ桑田の海とかはるをきくなど世の變轉は頻繁なもので年々歳々花は同じやうに咲くけれども歳々年々人は老いて行く

のである。ア、もしくそな若い衆。ちつとは此白髮翁の身の上を思つて下さい。

と或一老翁が云ふ。滿街滿都の老翁が言ふ。

成程此翁は真に同情に値するものがある。此でも昔は矢張り血色麗はしい若者で芳樹の下に戯るゝ貴公子たり。落花の前に盛歌妙舞する風流息子であつたので光祿池臺（漢の曲陽侯王根が光祿太夫たりし時の美麗な池。）のやうな立派なところに錦繡の帳を引きまはし將軍樓閣（漢の梁冀將軍が豪華を競うた樓閣。）のやうないかめしいところで神仙を畫いたこともあつたのだが一朝病に臥して看取りのしるべもなく春や朦朧爛漫の三月は思へばかない一夜の夢であつた。

今あの様に曲線美に誇つてゐる蛾眉も嬌態もよく何時までも持續し得るものぞ。東の間に鶴の毛衣のやうな頭が蓬々と亂れることであらう。斯して古來清歌妙舞の舞臺となつた繁華の地も遂には烏雀徒に悲鳴するの地とかはることであらう。

此漢詩を和化し宗教化したものが真宗で有名なる白骨の御文章である。

白骨の御文章（蓮如和讃）

夫れ人間の浮生なる相をつらく観するにおほよそはかなきものはこの世の始中終まぼろしの如くなる一期なり。されば未だ萬歳の人身を受けたりといふことを聞かず。一生過ぎ易し。今に至りて誰

か百年の形體を保つべきや。我やさき人やさき今日とも知らず明日とも知らず後れ先だつ人はもこの筆末の露よりもしげしといへり。されば朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。既に無常の風來りぬれば則ち二つの眼忽ちに閉ぢ一つの息長く絶ぬれば紅顔空しく變じて桃李の粧を失ひぬること六親眷族あつまつて歎き悲めども更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべきことならねばとて野外に送りて夜半の煙となしはてぬれば唯白骨のみぞ残れり。哀れといふも中々愚なり。されば人間のはかなきことは老少不定の境なれば誰れ人も早く後生の一大事を心にかけて阿彌陀佛を深く頼み參らせて念佛申すべきものなり。あなかしこあなかしこ。

一株雪（梨花）

蘇軾

梨花淡白柳深青。柳絮飛時花滿城。惆悵東欄一株雪。人生看得幾清明。

（譯）梨花は淡白柳は深青。柳絮飛ぶ時花城に滿つ。惆悵す東欄一株の雪。人生看得たり幾清明。

（大意）梨の花は薄白く柳は青く柳の新芽が飛散すると満面花の如き面白味があるけれども余は東欄に凭つて一株白雪の如き梨花に對する時最よく人生清明の味を味はふことが出来るやうに思ふ。

山中與三友人對酌

李白

兩人對酌山花開。一杯一杯復一杯。我醉欲眠君且去。

其七 漢詩

三五九

明朝有意抱琴來。

(譯) 兩人對酌して山花開く。一杯一杯復一杯。我酔うて眠らんと欲す君且つ去れ。明朝意あらば琴を抱いて來れ。

(大意) 兩人山中に相對して隔て氣なく時ならぬ酒宴の花を開いて一杯一杯復一杯と段々盃をかきねてどう／＼睡氣がさしてきた。まよよ。僕はここで眠らうと思ふ。君は居つても用はないからどうなと勝手にせい。若し氣をかきかすならばあすの朝頃琴をもつて來い。その時分には僕も眼をさましてるやうから。

廬山煙雨浙江潮。

未到千般恨不消。

到得還來無別事。

蘇東坡

廬山煙雨浙江潮。

(譯) 廬山の煙雨浙江の潮。未だ到らざる時千般恨み消せず。到り得て還り來つて別事なし。廬山の煙雨浙江の潮。

(大意) 廬山の煙雨浙江の潮之を觀んと欲して觀得ざること多年。憧憬轉痛切なるものあれども已に之を觀て宿昔の望みを達せばケロリとして別にそれ程の盛を生せしめず。而もその勝之を以前に比して敢て増減あるにあらずして依然たる廬山の煙雨浙江の潮たり。

其八 朗詠

藤原公任が當時人々に膾炙せる漢詩と和歌とを集めて朗詠に資したのが起りて當時の貴公子や貴夫人は佳辰會月の會合の席上常に之を吟詠したもので我國の文學作品中最王朝氣分をよくあらはしてゐる

池冷水無三伏夏。

松高風有一聲秋。

納涼

源英明

(譯) 池冷かにして水に三伏の夏なく。松高うして風に一聲の秋あり。

(大意) 池水清涼夏のけはひもなく松風一陣已に秋聲あり。

九夏三伏之暑。

月竹含錯午之風。

玄冬素雪之寒。

朝松影君子之德。

(譯) 九夏三伏の暑。月竹錯午の風を含み。玄冬素雪の寒。朝松君子の徳を影はす。

(大意) 眞夏の月は竹吹く風に揺めき嚴冬の雪は松に配して彼の洞むに後るゝ君子の徳をあらはす。